

郡山遺跡群 富貴田遺跡

発掘調査報告書

郡山遺跡群・富貴田遺跡発掘調査報告書

2013年3月

山形県南陽市教育委員会

こ　お　り　や　ま
郡山遺跡群
ふ　ぎ　た
富貴田遺跡

発掘調査報告書

南陽市埋蔵文化財調査報告書第6集

平成25年3月

山形県南陽市教育委員会



沢田遺跡 ST1 縦穴住居跡炭化材検出状況



沢田遺跡出土 弥生土器



沢田遺跡出土 古墳時代土師器



西原東遺跡出土 土師器高基脚部

序

この度、「郡山遺跡群・富貴田遺跡 発掘調査報告書」を発行する運びとなりました。

本書は、「南陽市中央第一土地区画整理事業」及び「南陽市西工業団地拡張事業」の施行にともない、複数年度に亘り南陽市教育委員会が実施した発掘調査の成果をまとめたものです。

郡山遺跡群は、市内沖郷地区内の赤湯駅西方に位置する島貫地区にある沢田遺跡・島貫遺跡・西原遺跡および郡山地区にある沢口遺跡を総称し、昭和59年から昭和61年、平成元年、平成2年、平成6年の各年度にわたり調査を実施しました。また富貴田遺跡については、市内宮内地区西南部にあり、平成2年度に2回にわたり調査を実施しました。これらの調査により、8世紀末から9世紀後半までの置賜郡衙とその時期に構成された周辺集落の姿について、多くの資料を提供することができました。

本市には、旧石器時代から、須刈田にある縄文時代の大野平遺跡、古墳時代の前方後円墳である国指定史跡「稲荷森古墳」や全国的にも極めて珍しい合掌形石室を持つ市指定史跡「松沢古墳群」や市指定史跡「蒲生田山古墳群」など、各時代にわたり数多くの遺跡を抱えております。この貴重な財産を後世に受け継ぎ、本市の将来を考察する礎とすることが、この地に育ち生きていく私たちの責務と考えております。

結びに、本調査及び報告書を作成するにあたり、ご協力及びご指導いただいた佐藤鎮雄先生と佐藤庄一先生をはじめとする関係各位に厚く感謝を申し上げます。

平成25年3月

南陽市教育委員会

教育長 猪野忠

本書は、南陽市中央第一土地区画整備事業及び分布調査に係る「郡山遺跡群（沢田遺跡・西原東遺跡・沢口遺跡・島貫遺跡）」および南陽市西工業団地抵張事業に係る「富貴田遺跡」の発掘調査報告書である。

発掘調査の内容は、既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。

発掘調査は、南陽市教育委員会が実施した。

出土遺物、調査記録類は報告書作成後、南陽市教育委員会が保管する。

調査要項

遺 跡 名 ①郡山遺跡群（沢田遺跡・西原東遺跡・沢口遺跡・島貫遺跡）

②富貴田遺跡

遺 跡 番 号 ①昭和 57 年度登録

②昭和 62 年度登録

所 在 地 ①山形県南陽市郡山・島貫・若狭郷屋

②山形県南陽市池黒

調 査 主 体 南陽市教育委員会

調査実施機関 南陽市教育委員会社会教育課

調 査 期 間 ①沢田遺跡 昭和 59 年 11 月 6 日～平成 4 年 6 月 5 日

西原東遺跡 昭和 62 年 7 月 16 日～昭和 62 年 8 月 31 日

沢口遺跡 昭和 58 年 10 月 11 日～昭和 58 年 11 月 7 日

島貫遺跡 平成元年 10 月 23 日～平成元年 10 月 26 日

②昭和 61 年 10 月 6 日～平成 2 年 6 月 5 日

調 査 担 当 者

昭和 59 年度 社会教育課長 佐藤豊雄 社会教育課次文化係長 渡部昌久

主任 須藤房雄 学芸員 吉野一郎

昭和 60 年度 社会教育課長 栗野忠雄 社会教育課次長 二瓶精蔵、渡部昌久

～昭和 61 年度 文化係長 渡部昌久 主任 須藤房雄

学芸員 吉野一郎

昭和 62 年度 社会教育課長 栗野忠雄 社会教育課次長 渡部昌久

文化係長 菅野章 学芸員 吉野一郎

昭和 63 年度 社会教育課長 渡部昌久 社会教育課次長 熊坂善行

文化係長 菅野章 主任 大道寺祝子

学芸員 吉野一郎

平成元年度 社会教育課長 渡部昌久 社会教育課次長 米秀一

文化係長 菅野章 学芸員 吉野一郎

平成 2 年度 社会教育課長 渡部昌久 社会教育課次長 恩地佑助

～平成 3 年度 文化係長 吉野一郎 主事 角田朋行

報告書作成担当者

平成 24 年度 スポーツ文化課長 江口和浩 スポーツ文化課長補佐（兼理歴文化財調査推進係長）熊坂正規

埋蔵文化財調査推進係 鈴木義三 嘱託 吉田江美子、山田 濬

調査指導 山形県教育庁文化課 佐藤巖雄

調査協力 南陽市都市計画課（調査時）

南陽市商工観光課（調査時）

凡例

1 本書の執筆は、熊坂正規（郡山遺跡群第Ⅰ章、富貴田遺跡第Ⅰ章）、佐藤巖雄（郡山遺跡群第Ⅱ章、富貴田遺跡第Ⅱ章）、吉田江美子（郡山遺跡群第Ⅲ・Ⅳ章、富貴田遺跡第Ⅲ章）、山田 渚（遺物写真撮影）が担当した。

2 遺構図に付す高さは海拔高で表す。方位は磁北を示す。

3 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

S D ••• 溝跡 S K ••• 土坑 S X ••• 性格不明遺構 S T ••• 積穴住居跡

S B ••• 掘立柱建物跡 S P ••• ピット・柱穴 S H ••• 墓坑

4 遺構実測図の縮尺は各図に示し、各々スケールを付した。遺物実測図は1/3で採録している。なお、遺物番号について「第15図3」の場合本文中では「15-3」と省略する。

5 写真図版は任意の縮尺で採録した。

6 基本層序および遺構覆土の色調記載については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖（1997年版）」によった。

7 本書を作成するにあたり、下記の方々からご協力、ご助言をいただいた。（敬称略）

佐藤巖雄 佐藤庄一 秦 昭繁 伊藤邦弘 菅原哲文 菊池玄輝 角田朋行 島貫幹子

8 委託業務は下記のとおりである。

郡山遺跡群

基準杭等設置業務

有限会社マエダ測量設計事務所

富貴田遺跡

基準杭及びグリット杭設置業務（平成2年）

有限会社マエダ測量設計事務所

目 次

郡山遺跡群	1	富貴田遺跡	87
I 調査の経緯	3	I 調査の経緯	89
1 調査に至る経過	3	1 調査に至る経過	89
2 調査の概要	3	2 調査の概要	89
II 遺跡の立地と環境	5	II 遺跡の立地と環境	90
1 地理的環境	5	1 地理的環境	90
2 歴史的環境	6	2 歴史的環境	90
III 遺跡の概要	10	III 遺跡の概要	94
1 沢田遺跡	10	1 検出遺構	94
2 西原東遺跡	40	2 出土遺物	95
3 沢口遺跡	62	3 小 結	95
4 島貫遺跡	68		
5 中央第一土地整理事業地内調査	72		
IV まとめ	82		

図 版

第 1 図 遺跡位置図	7	第 19 図 沢田遺跡 出土遺物 (6)	32
第 2 図 郡山遺跡群遺跡調査実施区	11	第 20 図 沢田遺跡 出土遺物 (7)	33
第 3 図 沢田遺跡(平成元年度調査) トレンチ配置図・ 基本層序	13	第 21 図 沢田遺跡 出土遺物 (8)	34
第 4 図 沢田遺跡(平成元年度調査) 遺構配置図	14	第 22 図 沢田遺跡(昭和 59 年調査) ST6 出土遺物	39
第 5 図 沢田遺跡 ST1 穫穴住居跡	15	第 23 図 西原東遺跡 概要図	40
第 6 図 沢田遺跡 ST1 穫穴住居跡 土層断面	16	第 24 図 西原東遺跡 遺構配置図	41
第 7 図 沢田遺跡 ST1 穫穴住居跡・EK18 柱穴 炭化物・ 遺物分布図	17	第 25 図 西原東遺跡 掘立柱建物跡 (1)	42
第 8 図 沢田遺跡 土坑	18	第 26 図 西原東遺跡 掘立柱建物跡 (2)	43
第 9 図 沢田遺跡 土坑・溝	19	第 27 図 西原東遺跡 土坑 (1)	46
第 10 図 沢田遺跡 溝・柱穴	20	第 28 図 西原東遺跡 土坑 (2)	47
第 11 図 沢田遺跡 溝	21	第 29 図 西原東遺跡 土坑 (3)	48
第 12 図 沢田遺跡(平成 4 年度調査) 遺構配置図	23	第 30 図 西原東遺跡 土坑・溝	49
第 13 図 沢田遺跡 溝・柱穴 断面図	24	第 31 図 西原東遺跡 溝・柱穴	50
第 14 図 沢田遺跡 出土遺物 (1)	27	第 32 図 西原東遺跡 出土遺物 (1)	53
第 15 図 沢田遺跡 出土遺物 (2)	28	第 33 図 西原東遺跡 出土遺物 (2)	54
第 16 図 沢田遺跡 出土遺物 (3)	29	第 34 図 西原東遺跡 出土遺物 (3)	55
第 17 図 沢田遺跡 出土遺物 (4)	30	第 35 図 西原東遺跡 出土遺物 (4)	56
第 18 図 沢田遺跡 出土遺物 (5)	31	第 36 図 西原東遺跡 出土遺物 (5)	57
		第 37 図 西原東遺跡 出土遺物 (6)	58
		第 38 図 沢口遺跡 遺構配置図・基本層序	63

第 39 図 沢口遺跡 第 I 層 溝・土坑・柱穴	65	第 49 図 中央第一土地整理事業地内 出土遺物 (2)	78
第 40 図 沢口遺跡 第 II 層 捏立柱建物跡・柱穴・土坑	66	第 50 図 中央第一土地整理事業地内 出土遺物 (3)	79
第 41 図 沢口遺跡 第 II 層 柱穴・土坑 出土遺物	67	第 51 図 中央第一土地整理事業地内 出土遺物 (4)	80
第 42 図 島貫遺跡 概要図・基本層序	69	第 52 図 郡山矢人目跡跡遺跡出土 墨書き器	84
第 43 図 島貫遺跡トレンチ調査 出土遺物	70	第 53 図 遺跡位置図	93
第 44 図 中央第一土地整理事業地内 遺跡発掘調査図 (昭和 59 年度)	73	第 54 図 富貴田遺跡 試掘調査区	96
第 45 図 遺物実測図 中央第一土地整理事業地内調査 基本層序・出土遺物 (昭和 59 年度)	74	第 55 図 富貴田遺跡 南区遺構配置図・基本層序	97
第 46 図 中央第一土地整理事業地内調査 試掘地点 (昭和 60 年度)	75	第 56 図 富貴田遺跡 柱穴・溝・性格不明遺構	98
第 47 図 中央第一土地整理事業地内 遺跡試掘坑基本層序 (昭和 60 年度)	76	第 57 国 富貴田遺跡 捏立柱建物跡模式図	98
第 48 図 中央第一土地整理事業地内 出土遺物 (1)	77	第 58 国 富貴田遺跡 出土遺物 (1)	99
		第 59 国 富貴田遺跡 出土遺物 (2)	100
		第 60 国 富貴田遺跡 出土遺物 (3)	101
		第 61 国 富貴田遺跡 出土遺物 (4)	102
		第 62 国 富貴田遺跡 出土遺物 (5)	103

表

表 1 郡山遺跡群 周辺の遺跡	6	表 9 島貫遺跡 遺物観察表	71
表 2 沢田遺跡 遺物観察表 (1)	35	表 10 中央第一土地整理事業地内 遺物観察表 (1)	74
表 3 沢田遺跡 遺物観察表 (2)	36	表 11 中央第一土地整理事業地内 遺物観察表 (2)	80
表 4 沢田遺跡 遺物観察表 (3)	37	表 12 中央第一土地整理事業地内 遺物観察表 (3)	81
表 5 西原東遺跡 遺物観察表 (1)	59	表 13 郡山遺跡群 出土器時期推移表	82
表 6 西原東遺跡 遺物観察表 (2)	60	表 14 富貴田遺跡 周辺の遺跡	92
表 7 西原東遺跡 遺物観察表 (3)	61	表 15 富貴田遺跡 遺物観察表 (1)	103
表 8 沢口遺跡 遺物観察表	67	表 16 富貴田遺跡 遺物観察表 (2)	104

写真図版

巻頭写真 1	沢田遺跡 ST1 穴住居跡炭化材検出状況	写真図版 20	島貫遺跡 調査状況
	沢田遺跡出土 弥生土器	写真図版 21 ~ 38	沢田遺跡 出土遺物
巻頭写真 2	沢田遺跡出土 古墳時代土師器	写真図版 39 ~ 51	西原東遺跡 出土遺物
	西原東遺跡出土 土師器高杯	写真図版 52	沢口遺跡 出土遺物
写真図版 1 ~ 10	沢田遺跡 (平成元年度調査) 調査状況	写真図版 52 ~ 53	島貫遺跡 出土遺物
写真図版 11 ~ 12	沢田遺跡 (平成 4 年度調査) 調査状況	写真図版 54 ~ 62	中央第一土地整理事業地内 出土遺物
写真図版 13 ~ 16	西原東遺跡 調査状況	写真図版 63 ~ 66	富貴田遺跡 調査状況
写真図版 17 ~ 19	沢口遺跡 調査状況	写真図版 67 ~ 75	富貴田遺跡 出土遺物

郡山遺跡群

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

郡山遺跡群については、JR 奥羽本線赤湯駅西側一帯の沖綱地区東部の島貫地区にある沢田遺跡・島貫遺跡と新規発見された西原東遺跡、また同郡山地区にある沢口遺跡を總称している。

南陽市中央第一土地区画整理事業（昭和60年～平成9年）（以下「区画整理事業」という。）にともない、昭和59年11月に郡山及び周辺地区における埋蔵文化財包蔵地（遺跡）及び郡衙推定地の確認調査（分布調査）を行った。昭和61年度には、先述の調査により遺跡と認められた地点について遺跡詳細分布調査として、既存遺跡である沢口遺跡と新規遺跡である西原東遺跡を調査した。また、緊急発掘調査として、記録保存を図ることを目的に、平成元年度から2年度にわたり事業計画区域内の遺跡の有無とその範囲を確認する表面踏査を実施した。さらに区画整理事業地内に文化施設整備計画が出されたことに伴い、平成6年10月18日～20日にわたって沢田遺跡の調査を実施した。

2 調査の概要

区画整理事業にともなう郡山～島貫地区の分布調査を、昭和59年11月6日～8日まで表面採集、11月14日～21日までの間テストピットによる遺構・遺物の確認を実施した。表面採集では、土師器片と須恵器片、中世陶器を採取し、平安時代が主体的であるが、中世のほか、古墳・奈良時代の遺跡が存在することが推定された。表面採取ができなかった箇所で代表的な場所としてテストピット7か所を選定し調査したところ、遺構・遺物の存在が確認された。

昭和61年度遺跡詳細分布調査を、昭和61年11月10日～11月14日に亘り実施した。地権者説明会については同年11月5日に島貫地区センターにて実施した。調査地約2.5万m²に、図上で25m×25mを1単位とする大グリッドを配し、1グリッドに2か所の仮試掘地点

を設け、11月7日に地権者に説明・確認を経て61か所を予定地としたが、うち2か所につき湿地であることや盛土が厚いことから試掘しないこととし、最終的には59地点について試掘を実施することとした。試掘溝は1m×1mとし、周知遺跡である沢口遺跡内の遺構が把握されている箇所を除き、無遺物層まで掘り下げた。また11月14日に、試掘溝TP18地点南側に8m×2.5m（南北長）のトレンチ掘りを行い、上部遺構の確認を行った。試掘を実施した59地点中、遺構及び遺物が検出されたのは15地点、遺物のみが検出された地点は38地点、また出土遺物総数は308個であった。出土した遺構と遺物の分類と地形の状況等から二つの遺跡が確認された。

西原東遺跡（新規）：TP8～TP29の範囲内で、古墳時代・奈良・平安時代の二つの時期の集落が主体であり、一部中世から近世の集落跡も含むため、文化層としては3時期が存在した。

沢口遺跡（既登録）：昭和58年度に郡衙確認のための学術発掘調査がなされた沢口遺跡であるが、今次の試掘により遺跡範囲が広がることが判明した。ただし、遺跡の中心は郡山字沢口の個人所有の畠地と考えられる。奈良・平安時代及び中世（～近世）が確認された。

平成元年度より島貫遺跡及び沢田遺跡の試掘調査を実施した。

平成元年10月23日～24日にわたり、島貫の個人所有畠地、約400m²内に真北方向に長さ4m、幅1mの試掘溝（トレンチ）を4本設定した。掘り下げ深度は、遺構確認面又は地山までとし、サブトレンチを設けつつ掘り下げた。内一つのトレンチから地表下約6.3cmの所で隅丸長方形の土坑が検出され、長径1m、短径0.7m、深さ約15～20cm、底部には焼けた粘土があり、その上に木炭と骨片が散在し、他の遺物は出土しなかった。もう一つのトレンチの上層から、奈良～平安時代の須恵器等が數片出土したが、面的共通性が無いことと遺構も無いため二次堆積であると思われた。調査結果より出土遺構は火葬土坑一つのみであり、遺跡の範囲内と見なし得

るが、発掘調査対象地域外と判断した。

同年10月25日～26日にわたり、島貫の個人所有畠地約500m²内に長さ5m、幅1.2mのトレンチを3か所、1m×1mの試掘溝4か所について調査した。遺物は出土したもののはじめ跡や集落跡は確認されなかった。また、南北に貫く溝状遺構が確認されたものの、積極的に発掘する程の資料は検出されなかった。

同年11月1日～2日にわたり、個人所有地内長さ7m、幅1.3mのトレンチ1か所と長さ3m、幅1.3mのトレンチ2か所について調査した。1か所から奈良～平安時代のものと思われる竪穴住居跡を1基検出した。また、他の2か所のトレンチからいずれも東西の方向に走る深さ約60cmの溝が検出されたが、覆土、形状等から、両者は同一のものと思われ、特に遺物・遺構とも存在が確認されたことから発掘調査地と判断した。

沢田遺跡（既登録）：沢田遺跡周辺地（西側）分布調査として同年11月9日～12月8日にわたり実施した。当該調査については、周知の沢田遺跡南西周辺一帯を踏査の結果、33地点から土器片を探集し、その内容は土師器片及び須恵器片であり、奈良～平安時代のものと考えられ、従って沢田遺跡は、南西にさらに続くものと推定された。このことを受け、当該遺跡区域内に整地化工事予定地付近は特に採取量が多い地点であることから、遺跡の保護のため試掘調査を実施した。長さ7m、幅1.3mのトレンチ1か所、長さ3m、幅1.3mのトレンチ2か所について調査した。それぞれのトレンチより住居跡、土壤、溝跡が確認され、出土遺物は、土師器片及び須恵器片が出土し、奈良～平安時代のものと推定した。本調査により同遺跡は南西に広がることが確認された。また工事予定地については、記録保存等の保存措置が必要と判断した。

平成2年度には、同年10月23日に関係課と協議後、11月7日～15日にわたり沢田遺跡の分布調査を実施した。民有地であることから30m×30mを一単位とするグリッドを設定し、第1次試掘分として15か所、第1次で分布状況が把握できない時のために第2次試掘分をさらに15か所設定した。試掘予定地に木杭を仮設し、地権者に予め確認後、縦1m、横1mの試掘穴を掘り下げ調査を行った。1次、2次試掘分を合わせて20か所となった。試掘調査で遺構が確認されたのは5地点、

遺物から弥生時代～古墳時代と推定される。検出された遺物の中で、2か所から出土した遺物は、弥生時代後期のものと思われる甕、本調査区域の南半分に広がって4～6世紀の古墳時代のものと思われる土器が出土した。試掘調査区域内において出土した遺物及び表土から採取した遺物のうち、奈良・平安時代の須恵器及び土師器が最も多く見られた。沢田遺跡は昭和57年に郡山市街跡推定地閑連遺跡分布調査により発見されたもので、昭和59年度に県の発掘調査が実施されている。県の調査地は、今回の試掘範囲の南部にあたり、弥生、古墳、奈良～平安に及ぶ多くの遺構、遺物が検出されている。今回の試掘調査は県の調査結果と類似した状況であり、特に弥生時代の遺物の出土例は、市内調査では県調査地に次ぐ2例目であり、遺構は市内はじめての検出である。

平成6年10月18日から20日にかけて中央第一土地区画整理事業地内の沢田遺跡に係る調査を実施した。試掘溝3か所、試掘溝1か所を調査し、試掘溝からは土師器が出土し、試掘溝からは遺構が確認され、奈良～平安期の土器が出土した。試掘穴東方50～100mが遺跡の中心部と推定した。また試掘遺構については、小集落の東縁に当たるものと推定した。

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

南陽市の地理的景観を簡単に表現すると「北に丘陵、南に沃野」と言える。北の丘陵とは、山形県南部置賜地方の米沢盆地周辺域の北部を限る白鷹山（標高 994m）の南に広がる白鷹山系丘陵をさす。白鷹山は新生代第四紀の死火山である。白鷹火山の活動の噴出物を主体とする丘陵が周囲に広がるが、その南部丘陵が南陽市域の北部丘陵である。

白鷹山の麓に源を発する吉野川は、ほぼまっすぐ南流し、上流域の吉野地区・上中流域の金山地区を貫流して宮内地区に至る。宮内地区で山間を抜け出て広大な扇状地を形成する。扇頂部から扇央部が宮内地区、扇央部から扇端部が沖郷地区である。扇端部の位置に郡山がある。

位置的には、JR 奥羽本線赤湯駅周辺である。赤湯駅から奥羽本線は東北に進み、東進して赤湯地区北部山麓を大きく廻り山形方面に路線を伸ばす。また、赤湯駅から北進して宮内に至り、さらに西進するフラワー長井線が路線を伸ばしている。

ところで、吉野川の扇状地は宮内地区西部を南流する上無川、宮内地区西隣の漆山地区を南流する織機川の冲積作用をも複合した合成扇状地である。この扇状地を「宮内扇状地」と呼称している。

宮内扇状地を形成した主体は吉野川であるが、吉野川はかつて宮内東部からまっすぐ南下して沖郷地区内を流れていた。しかし、現在は沖郷地区北部で流路を東南に変えて赤湯地区へ流れる。現在でも沖郷地区蒲生田から萩生田・郡山を経て宮崎に至る旧河道が明顯にみられる。

江戸初期までは旧河道にも川が流れ、赤湯地区にも流れていたとみられる。扇央部の土砂堆積による河川の流路変化は扇状地形成における定理であるが、その現象が宮内扇状地でも生じていたのである。土砂堆積によって扇状地中央部への流れが減じ、より低い扇側部への流路変化が増し、蒲生田一郡山の東部にある赤湯地区三間通へ流れようになったのである。

そのような折、江戸初期において上杉氏の米沢入部があり、新田開発が盛んに行われるようになった。会津

120 万石から 30 万石に減封されて米沢に入部した上杉氏は新田開発を奨励し、戦国のエネルギーが農地拡張に集約されたのは周知の事実である。宮内扇状地周辺では、三間通一鍋田・長岡一宮崎など扇側部・扇状地前縁帯の低地の水田開発が盛んであった。もともとこの地域は奈良時代の条里制施行により水田開発の基幹は整っていたが、基礎的集落の近辺のみの水田で、多くの低湿地が荒れ地のままであった。しかし、水田開発が進むにつれ課題となったのが水不足であった。そこで、蒲生田から南下する吉野川を堰に変え、旧河道沿いの余地を溜め池にして節水し、赤湯方面に流れる水を多くの堰でまかなる方向にした。かくして、沖郷地区は旧河道を流れる堰と連なる数多くの溜め池が用水と化したのである。近世以降の五ヶ村堰、十ヶ村堰はその面影を偲ばせる。特に十ヶ村堰は 10 箇所の溜め池が旧河道に連続する。その中でも大きな溜め池が丸堤で、そこに沢田遺跡の北部が隣接する。

また、沖郷地区内を流れる堰で最も東に位置し、新田の若狭郷屋一郡山東部を流れる厨川堰は、取水に苦労した経緯がある。その溜め池が JR 赤湯駅西部に隣接する郡山堤と中ノ目堤である。

したがって、中世までの地理的景観と近世以降の地理的景観は大きく異なる。本書で述べる郡山遺跡群は、主体が古代であり、宮内扇状地をまっすぐ南下する吉野川を考慮した古い地理的景観で考察しなければならない。

標高 994 m の白鷹山から流れを発した吉野川が扇状地を形成し始める扇頂部の宮内北部で標高 250m、扇端部の郡山南部で標高 220m、前縁帯の宮崎で 210m と、宮内扇状地の勾配はほぼ 100 分の 1 位である。

実は吉野川がまっすぐ南に流れた理由は、約 1100 万年ほど前の火山性陥没地形である大谷地低湿地の古カルデラの西側が沖郷地区の多くの部分を占めていたからに外ならない。沖郷地区の東半分を埋めている分厚い沖積層は 10 万年ほど前の氷河期以降のものである。沖積作用が穏やかになるのは縄文時代前期末の 5000 余年の頃である。一番古い遺跡でも縄文時代中期頃というのをうした事情を物語る。

これまで述べてきたことから郡山遺跡群の立地する南陽市沖郷地区郡山周辺は、吉野川が形成した宮内扇状地の扇端部に位置し、吉野川本流の流れたところであることが理解できる。

郡山遺跡群は、近世の村落である郡山村、すなわち大字郡山の中に所在する遺跡群としてとらえると、かなり変形した範囲に所在することになり、中世以前の実態にせまり難い。大字郡山に所在する遺跡群がほぼ切れ目無く広がる一定の範囲を対象としなければならない。郡山に隣接する島貫や高梨の北部、対岸の萩生田・中落合の一部も含まれる。

こうした範囲の地形は、扇状地の端部で、中央を貫いて流れる吉野川の氾濫原を含みながらも沖積作用による自然堤防状の微高地が連続する。また近くに後背湿地が広がる。このような場所は水田稲作の適地でもあるが、大型の集落や施設を営むのにも適した土地と言えよう。さらに小舟を主体とした水運にも適している。郡山を少し南下すれば宮崎に至るが、吉野川は宮崎で最上川に合流している。

番号	遺跡名	種別	時代
1	沢田	集落跡	弥・古・奈~平・中
2	西原東	集落跡	古墳・奈良~平安
3	沢口	集落跡	奈良~平安・中世
4	島貫	集落跡	古墳~平安
5	富貴田	集落跡	繩文・奈良
6	大清水	散布地	繩文・奈良~平安
7	瀬生田山古墳群	古墳	古墳~奈良
8	山居沢山B	散布地	平安
9	山居沢山A	散布地	平安
10	観音堂	散布地	奈良~平安
11	狸山沢古墳群	古墳	奈良
12	上野山古墳	古墳	奈良
13	横戻	散布地	繩文・奈良
14	二色根古墳群	古墳	奈良
15	二色根館	城館跡	中世
16	庚塙	集落跡	繩・弥・古・奈~平・中
17	北前	散布地	繩文
18	長瀬跡	城館跡	繩文
19	檜原	集落跡	奈・平・中世
20	中落合	集落跡	奈良~平安
21	中落合館	館跡	中世
22	梅ノ木	散布地	奈良~平安
23	萩生田	集落跡	奈良~平安
24	西田	散布地	平安
25	若狭郷屋敷	城館跡	中世
26	唐越	散布地	繩文・奈良~平安
27	大塚	墳墓	古墳
28	西中上	集落跡	奈良~平安

2. 歴史的環境

(1)はじめに

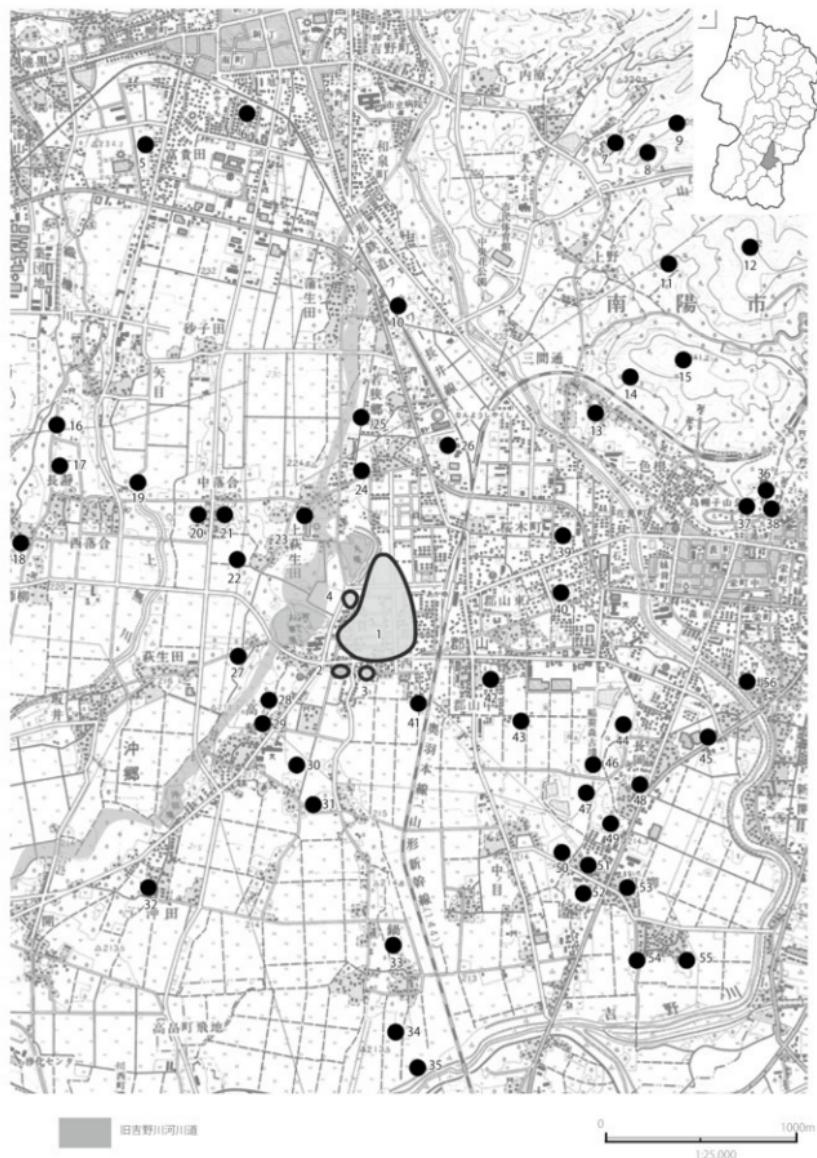
南陽市沖郷地区は、宮内扇状地の扇央部から扇端部および前縁帯の平地にある。昭和42年に発足した南陽市の合併前の旧町村の和郷村のうち沖郷地区であり、もと沖郷村にあたる。近世から明治中期までの高梨・沖田・鍋田・中野目・郡山・若狭郷屋・島貫・宮崎・関根・露橋・坂井・西落合・中落合・長瀬・法師柳・蒲生田・萩生田の各村が合併して沖郷村が発足したのは、町村制が施行された明治22年(1889)のことである。その沖郷村が梨郷村と合併して和郷村となったのは昭和30年(1955)である。

(2)縄文時代

その沖郷地区的範囲で、人類の痕跡で最も古いのは高梨の百刈田遺跡で発見された縄文時代中期の集落跡である。宮内扇状地の吉野川流域では長岡山遺跡を除いて発見されるのは縄文時代中期以降の遺跡であるからそれに連動している。しかし、同じ宮内扇状地でも鐵櫻川流域

表1 郡山遺跡群 周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代
29	符監屋敷	散布地	奈良~平安
30	百刈田	集落跡	繩・弥・古・奈~平
31	前小屋	散布地	縄文
32	沖田	散布地	平安
33	大屋敷	散布地	平安
34	機内田	散布地	平安
35	窪田尻	古墳	平安
36	上ノ山	散布地	縄文
37	鳥帽子山古墳	古墳	奈良
38	鳥帽子山経塚	経塚	中世
39	譲訪前	集落跡	繩・弥・古・奈~平
40	東六角	集落跡	繩文・古墳・平安
41	間々ノ上	散布地	奈良
42	矢ノ目館	城館跡	中世
43	早稲田	散布地	奈良
44	長岡山	集落跡	繩文・古墳
45	太子堂	散布地	平安
46	福荷森古墳	古墳	古墳
47	長岡西田	散布地	繩文
48	長岡山東	散布地	繩文・平安
49	長岡南森	散布地	繩文・古墳
50	中ノ目下	散布地	奈~平
51	内城跡	城館跡	中世
52	鷺の木館	城館跡	中世
53	水上	散布地	奈良~平安
54	東畠A	集落跡	奈良~平安・近世
55	東畠B	散布地	平安
56	鷺保館ノ山	城館跡	中世



第1図 遺跡位置図(国土地理院発行2万5千分の1地形図「赤湯」使用)

では縄文時代早期まで遡ると対象的である。扁状地形の冲積作用の安定まで時間を要したせいであろうか。

(3) 弥生時代

続く弥生時代でも中期以降の遺跡が発見されている。上萩生田の萩生田遺跡では弥生時代中期の桜井式並行期の石包丁が発見されている。萩生田遺跡は吉野川の西岸であるが、吉野川を1kmほど南下した対岸の沢田遺跡の北部で中期中葉の円田式、後期の天王山式並行期の土器が発見されている。吉野川東岸をさらに約1km南下した百刈田遺跡でも弥生時代中期の墓坑19基が検出され、桜井式並行期の土器に稻の痕跡が付いていることが確認されている。このことから吉野川を挟んで2km四方位の範囲に、弥生時代後半に営まれた集落遺跡が存在したことは明らかである。同様の状況は漆山地区池黒矢ノ目の織機川東岸の庚塙遺跡周辺にもうかがえる。かのえだん

(4) 古墳時代

古墳時代に入ると、沖郷地区の北北東1km、吉野川を挟んだ対岸の蒲生田山の南に入り出す丘陵に古墳が出現する。長さ約30mの前方後方墳2基(蒲生田山4号墳・3号墳)である。底部穿孔壺などを伴う4世紀前半期の古墳である。米沢盆地でも最古級の古墳であり、平地に築かれた長さ75mの川西町天神森前方後方墳に先行するともられる。この丘陵の先端へやや下って長さ約30mの前方後円墳(蒲生田山2号墳)があるが、未調査ながら2基の前方後方墳に統いて築かれたものとみられている。

蒲生田山古墳群に統いて出現するのは、沖郷地区郡山の東部に隣接する赤湯地区長岡の稲荷森前方後円墳である。全長96m×高さ9.6mの後円部3段の大型古墳は東北有数の規模を誇る。4世紀の第4四半期までは下らないとみられている。稲荷森古墳の近くにある南森は全長百数十m規模の前方後円墳である可能性があるという説(角田朋行2001)もあるが、未調査で確認されていない。もし古墳とすれば採集された土師器から4世紀第4四半期頃に位置づけられる可能性が高い。

宮内扁状地では沖郷地区の西方梨郷地区天王で、径20m前後の円墳群が発見されているが、稲荷森古墳に併行する4世紀第3四半期頃のものである。また、沖郷地区郡山

に隣接する吉野川緑の大塚遺跡の257号墳は辺26mの方墳である。4世紀も第4四半期頃まで下る。大小11基の方形周溝墓群を伴う。郡山に隣接する赤湯地区長岡山でも大小の方形周溝墓群が発見されている。

これら古墳時代前期4世紀代の古墳を築いた人々の集落は赤湯地区諏訪前遺跡や沖郷地区郡山遺跡群など宮内扁状地に存在したものとみられている。

古墳時代中期に入ると、前半においては米沢盆地では中期初頭の小方墳である米沢市成島2号墳と伝安然大師入定窟に納められた高畠町時沢大師森山石棺(中期前半)しか見あたらず、古墳の空白期が生じる。中期後半になると後期中葉にかけて米沢市戸塚山139号墳はじめ戸塚山古墳群、米沢市八幡塚古墳、米沢市成島・京塚古墳群、川西町下小松古墳群、長井市河井山古墳群などの中小規模の古墳群がみられるが、宮内扁状地付近では南陽市梨郷山古墳群、赤湯地区的松沢古墳群、沖郷地区宮崎の植木場一古墳と多くの古墳がみられる。

中期後期の集落遺跡は、宮内扁状地付近では沖郷地区的郡山遺跡群に沢田遺跡・百刈田遺跡、梨郷地区的清水ノ下遺跡などがみられる。宮内扁状地の多くの集落遺跡が基盤となって、集落近辺にも、集落を見下ろす盆地隣接丘陵の一部に古墳が築造された可能性がある。なお、松沢古墳群だけは他と異なる合掌型箱石石棺の積石塚古墳で、性格を異にする古墳群である。

(5) 飛鳥・奈良・平安時代

米沢盆地では6世紀末~7世紀前半の集落や古墳は確認されていない。この空白は今後の研究課題となっている。

米沢盆地では『日本書紀』持統天皇三年条の優曇毘舍那の記事に見える通り、飛鳥時代後半の7世紀後半から集落遺跡・終末期古墳・古窯跡がみられる。その分布は、米沢盆地を南北に縱走する最上川東部の平地や山麓部である。その中心をなすのは屋代川扁状地の扇端部の高畠町高畠で、優曇毘舍那が推定されている。近年の数多くの遺跡発掘状況をみると和銅5年(712)の出羽国建国以後も遺跡群は継続しており、平安初頭の9世紀代にもその一部は継続していることが判明している。米沢市上郷地区も7世紀後半から8世紀にかけて集落遺跡や古墳が営まれるが、米沢市大浦遺跡群では8世紀中葉~9世紀

初頭に遺構が充実し、団堺施設に囲まれた建物跡群が検出され、廐棄土坑から延暦23年(804)の具注曆(漆紙文書)が発見され、出羽国置賜郡の8世紀中後葉の郡衙説が出された(菊地政信2000他)。

一方、最上川が北の流れを西へ変える最上川北岸の南陽市域も高畠・上郷と同様に集落遺跡や終末期古墳が分布し、明らかに優等曇郡時代から置賜郡初期段階の遺跡群の存在がうかがえる(佐藤巖雄2008)。しかし、沢田遺跡をはじめ沖縄地区郡山周辺の遺跡が充実するのは、8世紀末葉~9世紀後葉であり、8世紀末葉からの団堺施設を伴う建物跡が見られた中落合遺跡(氏家・高桑2007)や沢田遺跡などがある。こうした状況も踏まえて、大浦遺跡群に郡山地名が遺っていないこと、古代郡衙と郡司層居館との関係等も考慮して、従来の高畠町小郡山→米沢市大浦B→南陽市郡山郡衙変遷説と異なる、8世紀末を変換点とする高畠町小郡山→南陽市郡山という郡衙変遷が指摘されている(佐藤巖雄2010)。

宮内扇状地には宮内南部を中心に条里制遺構が推定されている(柏倉亮吉1961)。佐藤巖雄は柏倉亮吉同様、沖縄地区における明治の地積図を検討し、柏倉の推定する宮内条里が沖縄地区の大半に拡がることを推定し、1983年の郡山矢ノ目館遺跡発見の大溝を作った道路状遺構を条里制に関わる遺構とした(佐藤巖雄1987)。佐藤庄一はそれを踏まえながら宮内・沖縄地区的条里制遺構を推定した(佐藤庄一1990)。その後、佐藤巖雄はこの条里制遺構を沖縄条里制遺構と改称している(佐藤巖雄2010)。

沖縄地区的北西隅の梨郷地区平野古窯跡は8世紀末葉から9世紀前半に營まれ、郡山遺跡群に推定されている置賜郡衙に連動している。

9世紀末葉になると郡山遺跡群が衰退はじめ、川西町道伝遺跡に郡衙機能が移転するものとみられている。10世紀以降の平安時代遺跡は今のところ明確でないが、現在の集落や宗教施設に重なっているようである。

引用・参考文献

- 菅井敬一郎 1990 「第一章南陽市のおいたち」『南陽市史上巻』南陽市史編さん委員会
- 沖縄村史資料 1973 「沖縄村史」沖縄村史編さん委員会収集資料『町村制実施前ノ地図』『沖縄村地図』外
- 柏倉亮吉 1961 「東北地方の条里制」古代文化Ⅶ-4 古代学協会
- 佐藤巖雄 1987 「南陽市史 考古資料篇」南陽市史編さん委員会
- 佐藤巖雄・佐藤庄一ほか 1990 「南陽市史(上巻)」南陽市史編さん委員会
- 角田朋行 2001 「南陽市域の条里制及び古墳等について」山形県地域史研究26号
- 川崎利夫編 2010 「出羽の古墳時代」高志書院
- 佐藤巖雄 2008 「出羽国ができるころ」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 佐藤巖雄 2010 「平安初頭の南出羽考古学」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 佐藤巖雄 2011 「やまとたの古墳時代」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

III 遺跡の概要

郡山遺跡群は南陽市沖郷地区周辺の旧吉野川左岸の自然堤防とそれに囲まれた後背湿地上に存在する遺跡群であり、現在も「郡山」の地名が使用されている。郡山は9世紀末までの約一世紀にわたり配置されたとみられる置賜郡衙の推定地であるが、今まで郡庁や正倉などの郡衙を証明する施設はまだ発見されていない。だが、昭和58年の調査でJR赤湯駅の南東約1kmに位置する郡山矢ノ目館遺跡から、真北方向に主軸をもつ幅約3mの道路状遺構とその両側に平行する幅約7m深さ1.5mの大型溝状遺構が調査区を縦断する状態で確認された（吉野1984）。8世紀後半に造成・使用された道路と用水路と考えられ、そのことから律令制度に基づいた条里制が施行されたことを示す遺構であるとみられる。また、城柵に由来を持つと思われる「厨川堰」という水路の存在、地割において少なくとも3条2里の方格地割をもつこと、字名にも「三條院」「仲ノ坪」「壱ノ坪」などの条里制の名残と思われるものが散見する（佐藤・佐藤庄ほか1990、佐藤2010）。

これまでの発掘調査でこの周辺からは弥生時代、古墳時代、奈良～平安時代、中世および近世の遺跡・遺物が発見され、古い時代から人々が生活の場とした地域であることが判明している（佐藤・佐藤1990、佐藤2008）。

今回報告する遺跡について、調査地ごとにそれぞれ「沢田遺跡」「西原東遺跡」「沢口遺跡」「島貫遺跡」の名称があるが郡山郡衙の推定地周辺に存在するため、これら4遺跡すべてを「郡山遺跡群」としてとらえて、報告書を刊行することとした。またそれに加えて「中央第一土地区画事業地内」の試掘調査の結果も掲載することとした。

1 沢田遺跡

沢田遺跡は南陽市JR赤湯駅西側300mに位置し、南北約350m・東西800mの範囲を持つ遺跡と推定される。以前は果樹畠であったが現在は住宅地である。

1. 検出遺構

沢田遺跡（平成元年度調査）

この調査は区画整理事業に伴い行われた調査である。遺跡はJR赤湯駅の西直線距離で約600mに位置し、調査は南北35m東西30mの範囲で行われた。

竪穴住居1棟、溝8本、土坑、柱穴が確認されている。

ST1 竪穴住居跡（第5、6、7図） トレンチによる試掘調査の時点では覆土の下層が炭化層で構成されていることが確認されている。

ST1 竪穴住居跡は長さ南北約6.5m、東側一部が調査区外に連続しているため東西は不明である。住居跡はほぼ真北を向き、方形を呈していると思われる。住居跡の深さは0.2m前後である。

住居跡の床周囲には幅6～8cm、深さ8cm程度の周溝がめぐる。住居跡壁面のピット（EP1、EP3、EB4、EB5、EP13）は土層断面に柱痕が明確に残ることから、柱穴として使用されたことが窺える（第6図）。

またSD8溝がST1のほぼ中央を南北に縦走し、カマドとその煙道および壁面を破壊しているためその詳細は不明である（第5図）。

焼失したとみられる住居内には炭化した部材及び土器などが比較的良好な状態で残存しており、特に土器はカマド周辺に、家屋の柱とみられる炭化材は住居跡西北部分によく残されている（第7図）。また、住居跡の土層断面（第5図）をみると、西側の炭化層が床面から約5～10cmの高さで、そして東側住居跡中央の炭化層がほぼ床面直上で確認できる。おそらく屋根中央付近が最初に焼け落ち、その後壁面や柱などの部材が倒れるよう焼け落ちたものとみられる。

カマドに隣接するEP5とその周辺からは黒色土器丸底有段环14-1～8が集中して出土している。また住居跡北西隅のSK18からは土師器壺15-9、黒色土器塊15-8、頸部に波状紋が施された須恵器壺15-10の破片などが大量に出土していることから貯蔵穴として使用したとみられる。

炭化材とともに黒色土器・土師器の丸底有段环などが出土していることから、7世紀末～8世紀初頭に属するものであると考えられる。これらの出土例として本遺跡から北西1.5kmに位置する、沢田遺跡ST2（山形県教育委員会調査）（佐藤・名和1985）、高畠町味噌根2号墳（井田1997）があげられる。

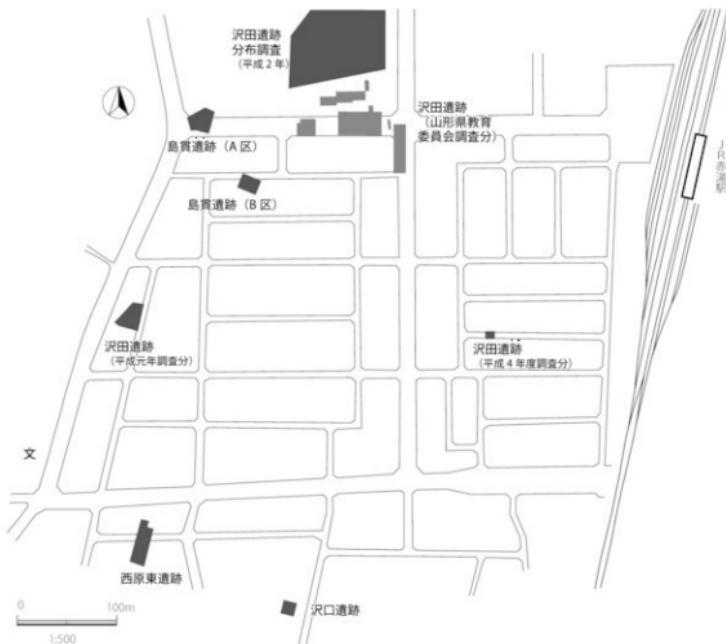
SK1 土坑（第8図） 遺構はやや不整形な橢円形を呈している。遺構の壁面と底面はほぼ箱型をしているが、土層断面を見ると北側に後世掘りこまれた痕跡が見られ

る。

SK1からは須恵器壺15-11（RP1）と土師器15-12（RP2）が出土しているが、15-11は覆土中から潰れて破片が折り重なるような状態で出土したのに対し、15-12は床面からほぼ正位に埋設された状態で出土している。

また、15-11は古代のもの、15-12は古墳時代前期のものと考えられ、製作された時代の差は明らかである。出土した層位から見た場合15-11は後世掘りこまれた上層（層1～4）から、15-12は下層（層5～6）から出土していることから、SK1は2時期の遺構が重複していると思われる。

SK5 土坑（第8図） 長径1.2m、短径0.8m、深さ0.1mの橢円形を呈したレンズ状の土坑である。遺物は出土していない。



第2図 都山遺跡群遺跡調査実施区

SK6 土坑（第8図） 長径1.9m、短径0.9m、深さ0.1mの楕円形を呈した土坑である。覆土は自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

SK10 土坑（第8図） 直径0.9m、深さ0.2mのやや隅丸方形に近い形を呈した土坑である。遺物は出土していない。

SK13 土坑（第8図） 長径1.1m、短径0.8m、深さ0.1mのやや楕円形を呈したレンズ状の土坑である。覆土は自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

SK14 土坑（第8図） 長径0.9m、短径0.7m、深さ0.1mのやや楕円形を呈したレンズ状の土坑である。覆土は自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

SK12 土坑（第9図） 遺構の一部が調査区外にあるため全体の様相は不明であるが、直径1.5m、深さ0.3mの遺構である。遺物は出土していない。

SK19 土坑（第9図） 北側の土坑が南側の土坑に切られているため、南側の土坑が新しいとみられる。長径0.8m、短径0.6m、深さ0.2m。遺物は出土していない。

SX4 遺構（第9図） 長径1.2m、短径0.8m、深さ0.3mのやや楕円形を呈した遺構である。遺物は出土していない。

SD2 溝跡（第9図） 調査区を南北に走る溝、確認出来る部分で長さ5.5m、幅0.3～1mで、溝形は浅く緩やかなU字型である。須恵器16-3～7・黒色土器の环16-8、土師器蓋16-9が出土している。出土した須恵器からみて9世紀後半に属するとみられる。

SD7 溝跡（第9図） 調査区中央に南北に短く走る溝。長さ3.5m、幅0.5m、深さ0.05m、溝形は緩く浅いU字型を呈している。覆土は自然堆積とみられる。出土遺物は黒色土器有段环16-15、土師器蓋16-16、甕底部16-17などが出土している。出土遺物から考えて7世紀末～8世紀初頭とみられる。

SD3、4 溝跡（第10図） 調査区を南北に走る溝、やや東に曲がったSD3とは別に、切合ったSD4が統くように伸びている。確認できる溝の長さはSD3が約7.5m、幅は0.6～0.8m、SD4は長さ3m、幅0.3～0.4mである。覆土は自然堆積とみられる。SD3からは肩の張るタイプの瓶の一部16-10が出土しており、おそらく8世紀前半に属するとと思われる。

P34 遺構（第10図） SD3 東隣にある直径0.3mのピットである。ここからは土師器甕口縁15-13、土師器小型甕15-14、ミニチュア土器15-15が出土している。遺物からみて古墳時代前半のものとみられる。

SD5 溝跡（第11図） 調査区を南北に走る溝で、幅1m、深さ0.1～0.15mで浅く緩いU字型を呈している。覆土は自然堆積とみられる。この溝からは土師器环16-11、黒色土器有段环16-12が出土している。2点とも底部が欠損しているが、少なくとも8世紀前半の範疇に属するものと考えられる。

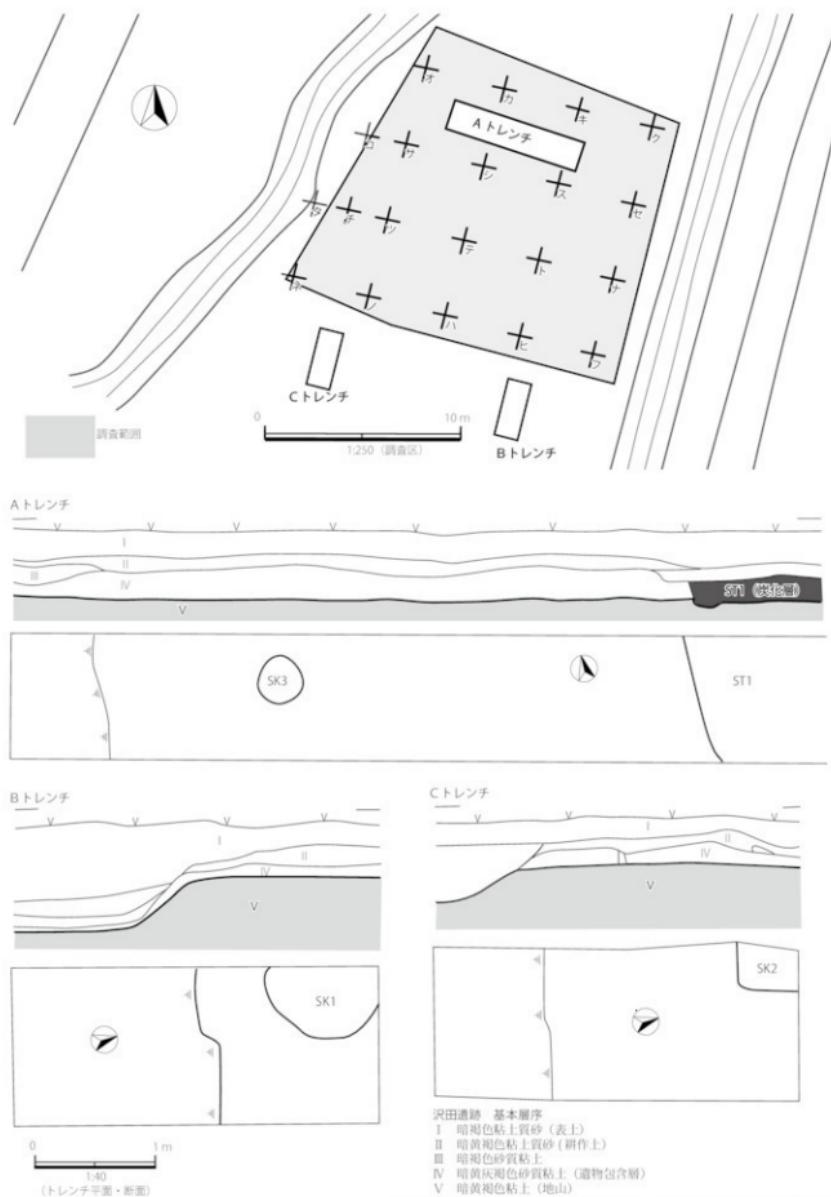
SD6 溝跡（第11図） 調査区を南北に走る溝で、長さ7m、幅0.5m、深さ0.1m半円形を呈した溝形で覆土は自然堆積とみられる。SD6からは器台16-13、黒色土器有段环16-14が出土している。器台は形状から古墳時代前期に、有段环は8世紀前半に属するとみられ、そのことから、溝については8世紀前半のものとみられる。

沢田遺跡（平成4年度調査）

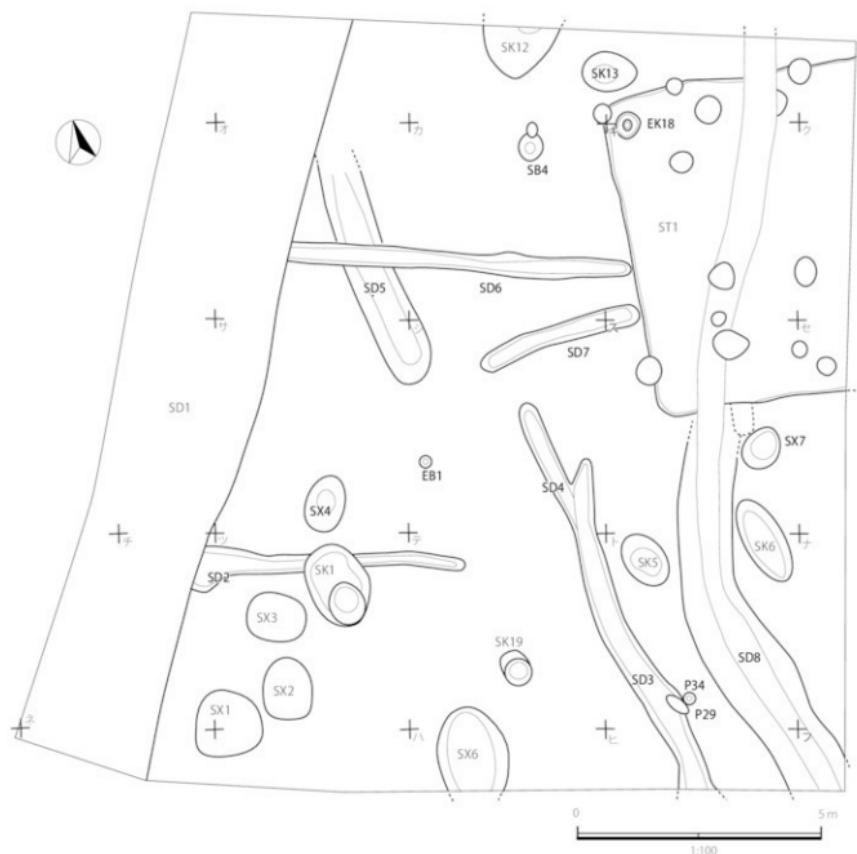
元年度調査同様、区画整理事業に伴い行われた発掘調査である。遺跡はJR赤堀駅の南西、直線距離にして約250mの住宅街に位置し、調査は南北8m、東西15mの範囲で行われた。

SD1 溝跡（第12図） 調査区をほぼ南北に走る溝であるが、非常に不整形な形状をしておりSX1とも隣接している。溝幅は1～2.6m程度、溝形は比較的箱型な部分が多く、覆土は自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

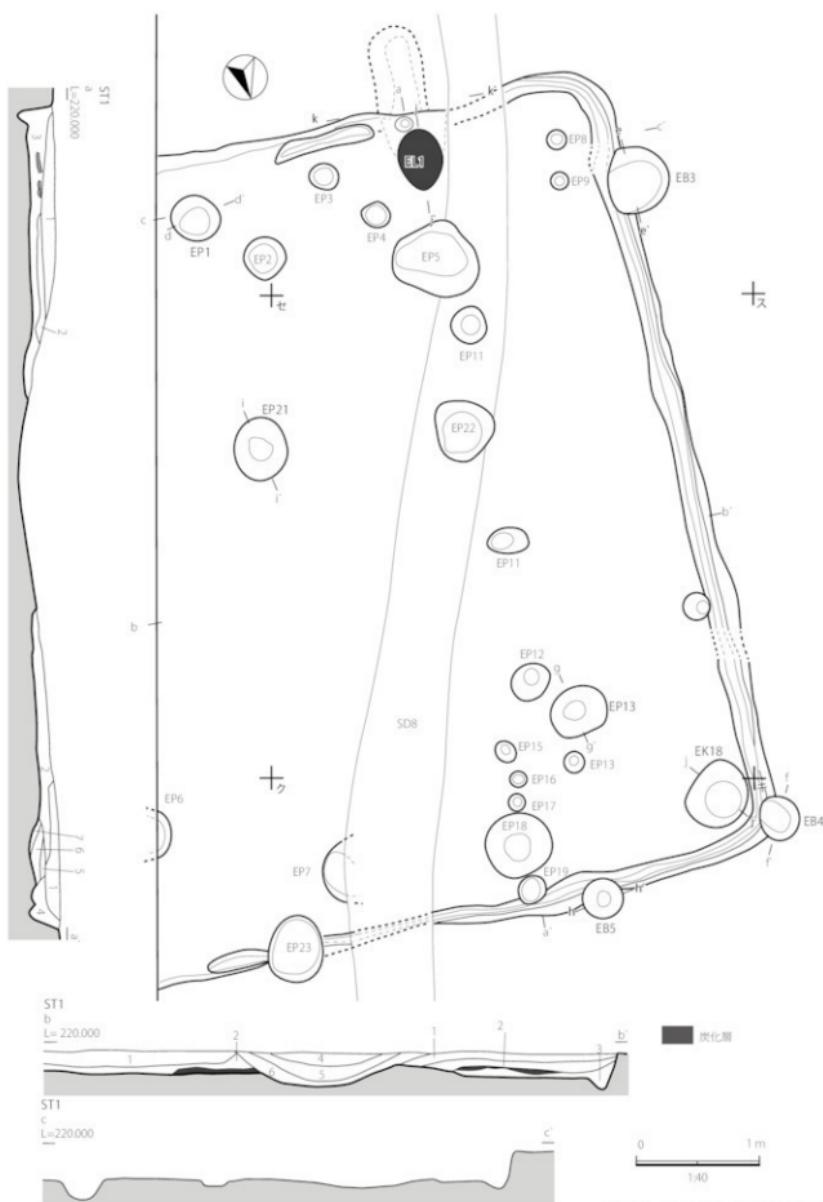
SD2 溝跡（第12図） 調査区をほぼ南北に走っているが、



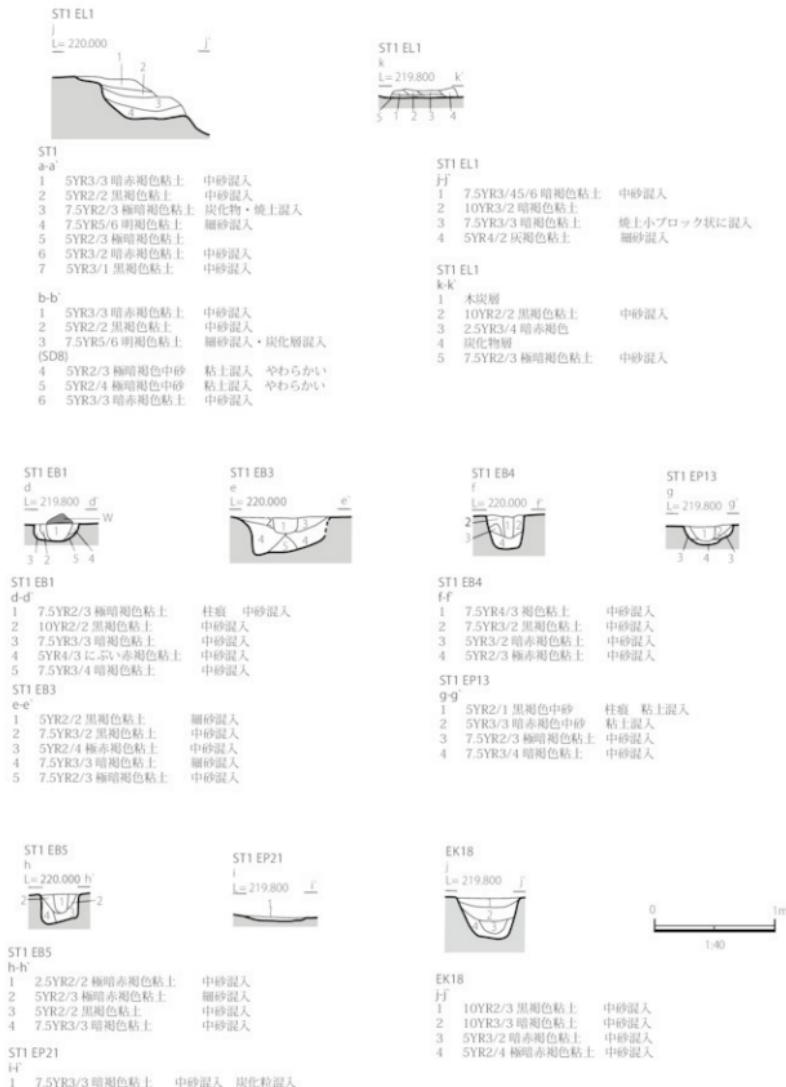
第3図 沢田遺跡（平成元年度調査） トレンチ配置図・基本層序



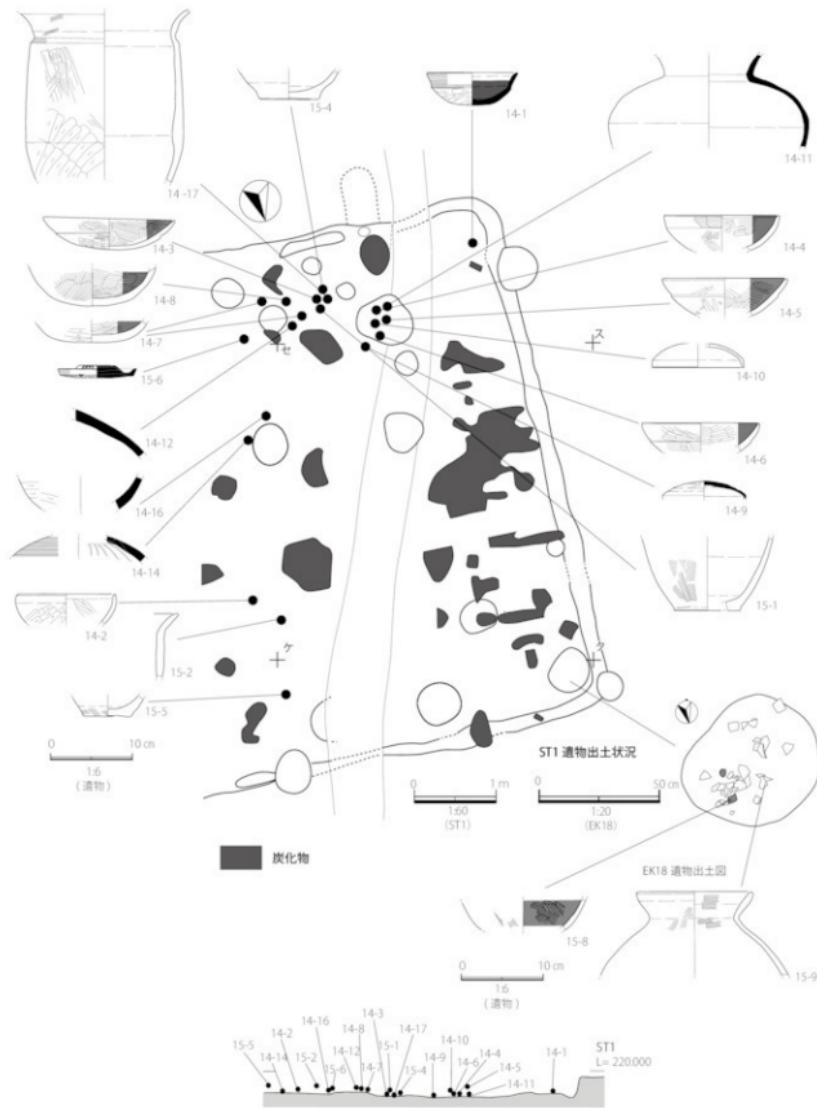
第4図 沢田遺跡（平成元年度調査） 遺構配置図



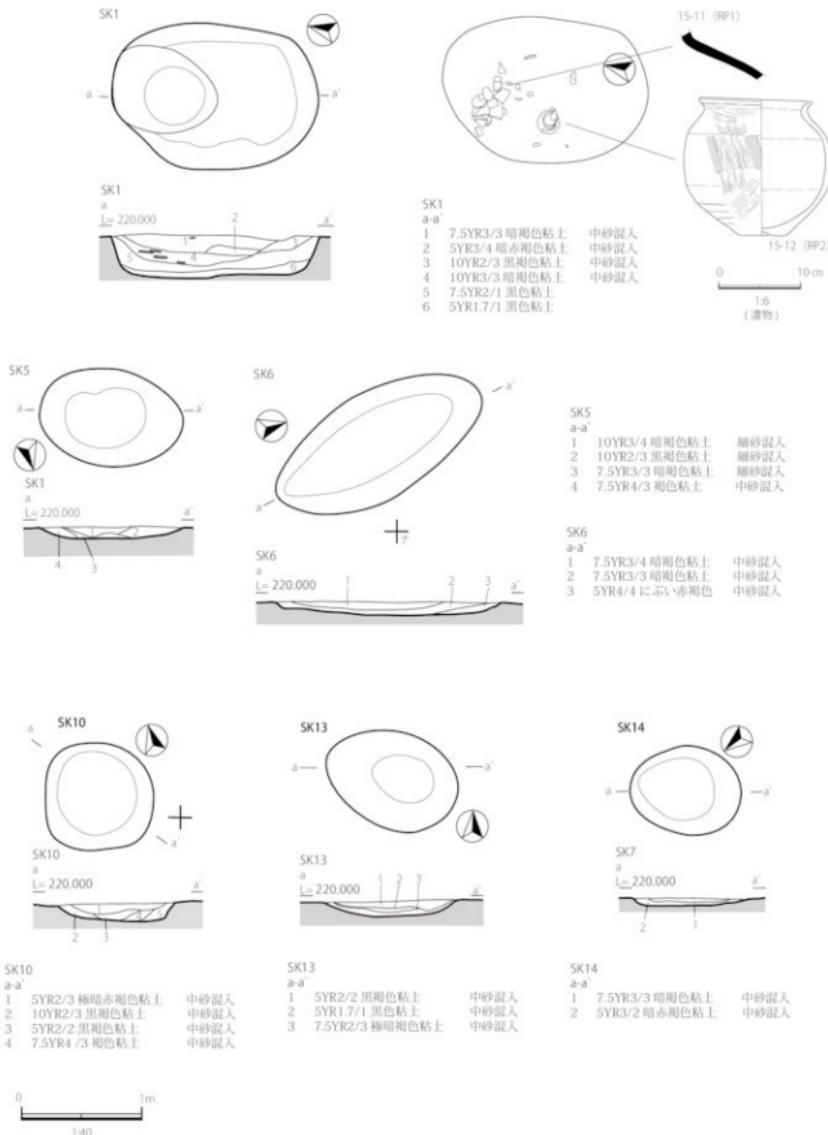
第5図 沢田遺跡 ST1 竪穴住居跡



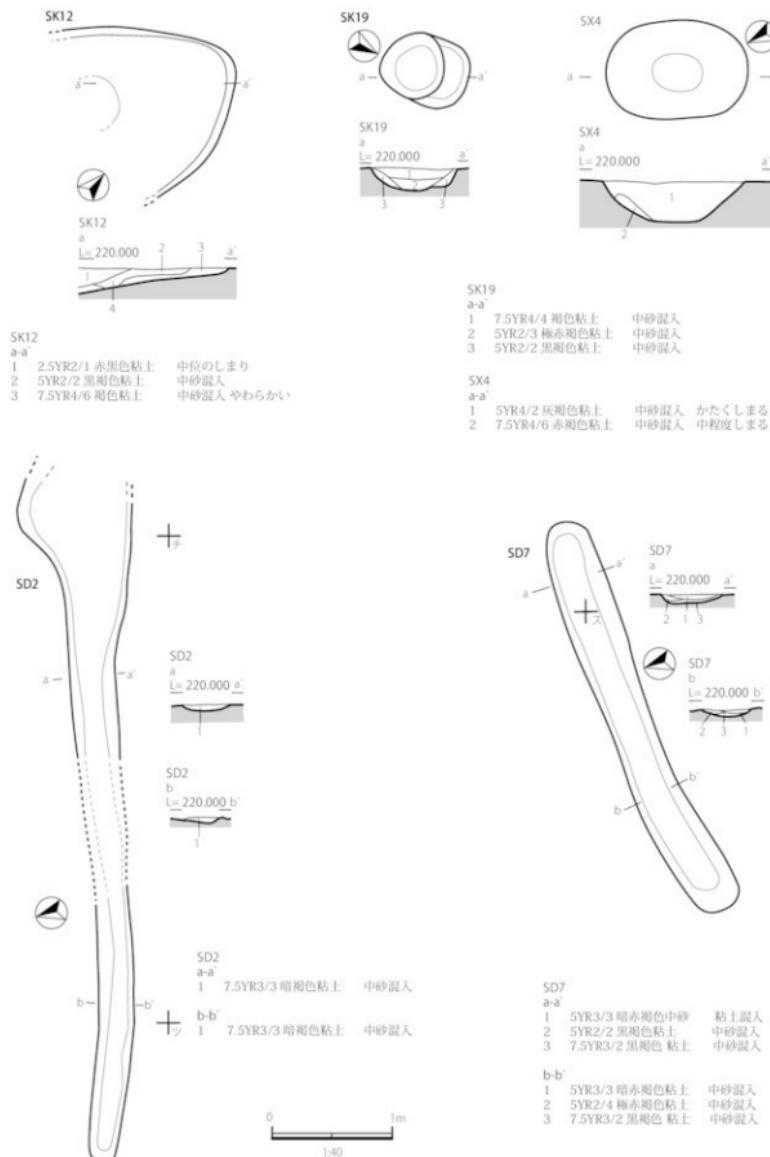
第6図 沢田遺跡 ST1 竪穴住居跡・土層断面



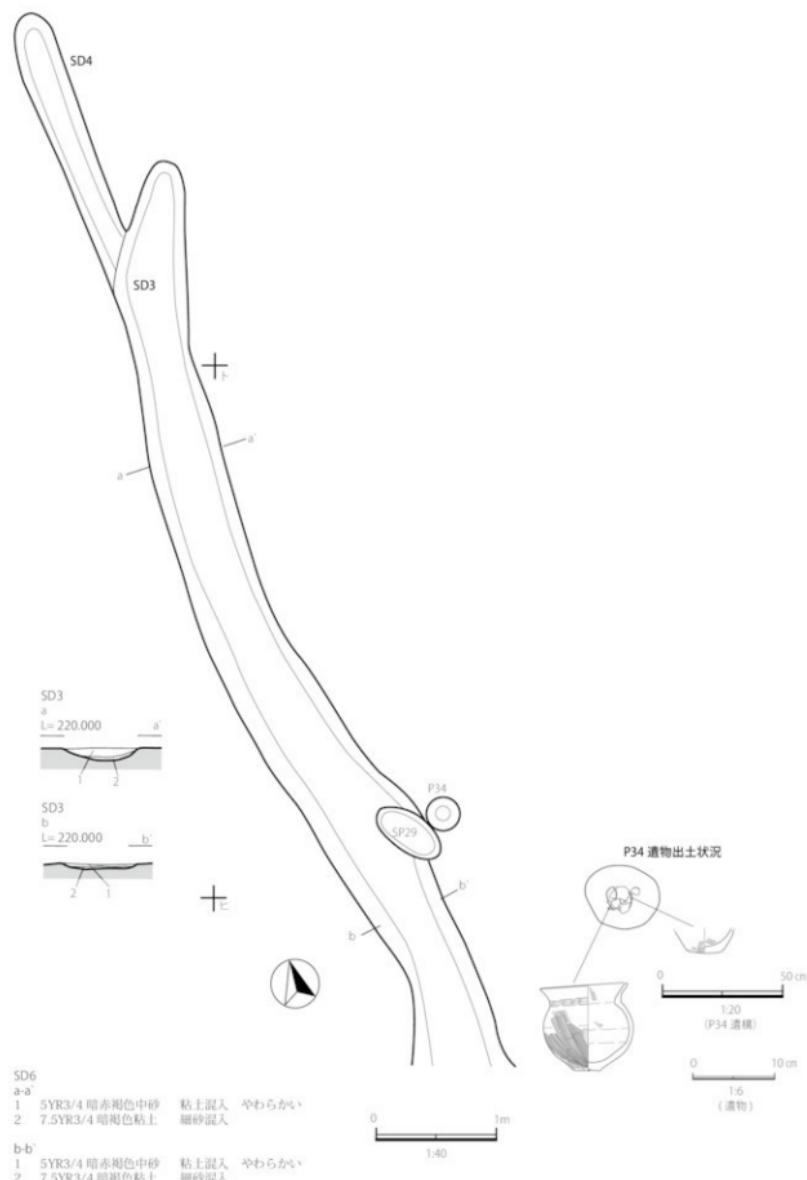
第7図 沢田遺跡 ST1 竪穴住居跡・EK18 柱穴 炭化物・遺物出土分布図



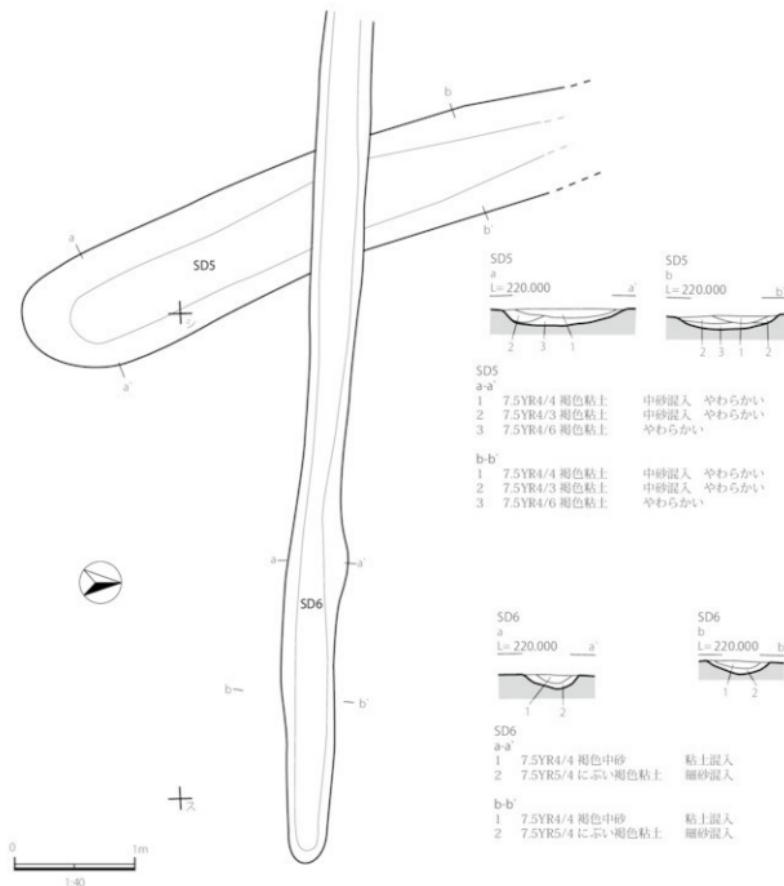
第8図 沢田遺跡 土坑



第9図 沢田遺跡 土坑・溝



第10図 沢田遺跡 溝・柱穴



第11図 沢田遺跡 溝

途中うねりが激しい。溝幅は1～3mで、溝形は箱型の部分が多い。覆土は自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

SP4 ピット（第12図） 調査区東端、やや方形に近い形をしたピットである。長辺1m、短辺0.8m、深さ0.2mで、断面は底面が平坦な箱型である。覆土は自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

SP7 ピット（第12図） 調査区北辺に位置するピットで、直径0.6m、深さ0.2m。断面は半円形で、覆土は自然堆積とみられる。遺物は出土していない。

SP8 ピット（第12図） SP 7西隣に位置するピット、直径0.6m、深さ0.2m。断面はU字型で、覆土は自然堆積とみられる。遺物の出土はない。

沢田遺跡（平成2年度分布調査）

この調査は区画整理事業に伴い行われた分布調査である（第2図）。15か所について試掘坑による調査を行い、その後5か所について詳細な試掘を行った。その結果、弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代の遺構と遺物が確認された。17-6 壺はTP20、17-18 壺はTP3から出土した（第44図）。

2 出土遺物

沢田遺跡本調査は2回、分布調査調査が1回行われたが、形状の明確な遺物が出土し図化できたのは、平成元年と2年の調査の遺物のみであり、ここではそれらの遺物について記述していく。

（1）弥生時代

弥生時代後期の天王山式並行期に属するとみられる壺の口縁が3点出土している。

P32 遺構（第15図13） 15-13はP32から古墳時代の土器とともに出土しているが、覆土に混入していたとみられる。二重口縁の壺で、外面にミガキ・赤色加工

が施されているが素口縁で加飾はない。古墳時代へ続く要素も認められる。

遺構外出土遺物 他2点についてはいずれも壺である。7-5は遺構外出土で全面ミガキ加工され、口縁の口唇と段部に刻み紋が施されている。17-6は試掘坑からの出土で、内面と頸部はミガキ調整であるが、外面口縁部には4本の沈線とその沈線に区画内に一部繩文が施されおり、また口唇部直下に刺突孔、段部には刻み紋が施されている。

これらの類例は沢田遺跡から北西約1.8kmに位置する庚塙遺跡（押切・須賀井2007）でも確認されている。

（2）古墳時代

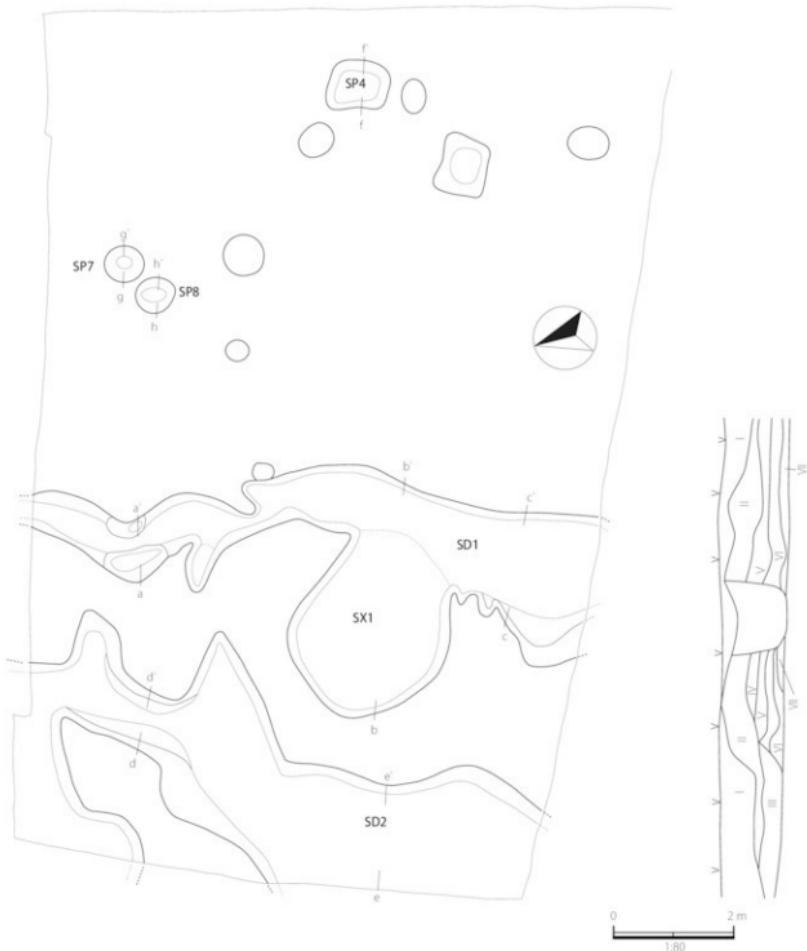
古墳時代前期から後期にわたる遺物が出土している。

P32 遺構（第15図13～15）

ピットから出土した一括資料である。小型壺1点、ミニチュア土器1点、弥生土器1点が出土している。小型壺15-14は球胴型でほぼ直行する口縁部をもつ。内外面ともに磨滅しているなど使用痕が見られる。また小型壺は遺構床面直上から出土し、ミニチュア土器をセットにしピットに埋設していることから呪術目的とした可能性がある。小型壺の頸部の形状などからこれらのセットは漆塗編年8～9群並行期の所産と思われる。

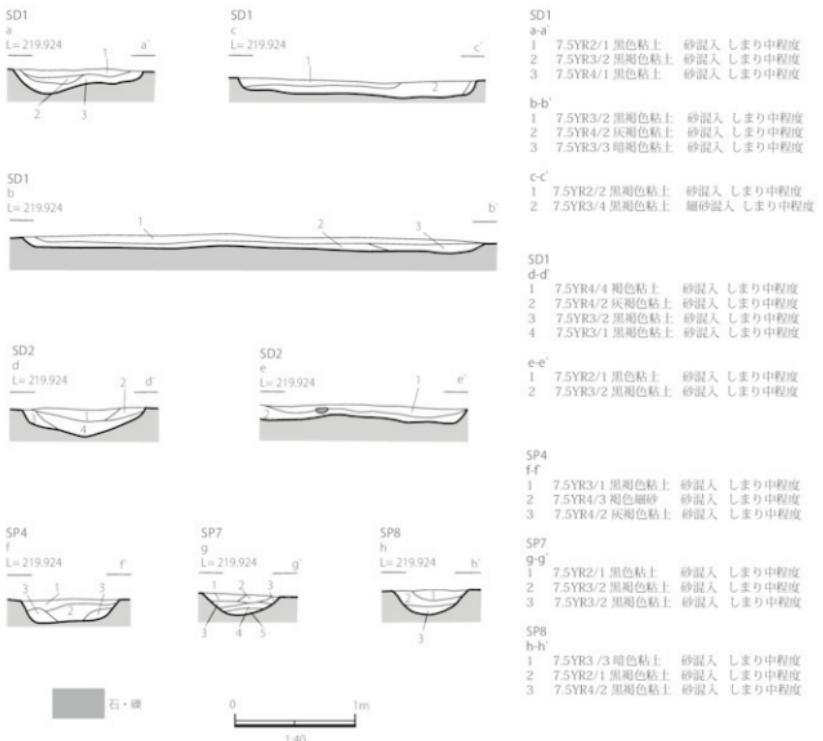
SK1 土坑（第15図12） 遺構底面から土師器壺15-12が出土している。SK1上層からは古代の須恵器も出土しているが、土層断面より後世の掘り込みであることがわかる。壺は正位に据えられていることから何らかの意図的に埋設したとみられる。この壺は胴部はやや六角形気味だがほぼ球胴に近い形である。頸部から口縁にかけて緩やかな「く」の字を描く。15-15はミニチュア土器とみられる。2点とも古墳時代前期中頃の範疇に属すると思われる。

SD8 溝跡（第16図20・21） 土師器16-20は口縁部の横調整から古墳時代中期の丸底壺とみられる。内面は磨滅が顕著だが外面にはやや乳白色の化粧土が残存している。須恵器蓋16-21については陶邑・田辺編年のTK10型式（古墳時代後期）に相当するとみられる（註1）。



基本層序
 I 表土
 II 研作土
 III 7.5YR4/3 褐色粘土
 IV 7.5YR3/1 黒褐色粘土
 V 7.5YR4/3 褐色砂
 VI 7.5YR2/ 黒色粘土
 VII 7.5YR3/1 黑褐色粘土
 砂混入 しまり中程度
 砂混入 しまり中程度
 粘土混入 しまり中程度
 砂混入
 砂混入 しまり中程度

第 12 図 沢田遺跡（平成 4 年度調査） 遺構配図



第13図 沢田遺跡 溝・柱穴 断面図

しかし SD8 は古代の住居跡 ST1 を切って掘り込まれて いるため、これらは後世の覆土への混入とみられる。

SD6 (第16図13) SD6 からは器台 16-13 が出土している。脚部の途中まで器厚が肥厚している。脚部内部に煤が付着しているため火消などに転用されたものとみられる。SD6 の 16-13 に関しても後世覆土に混入したものと思われる。

この器台とともに調査区外出土器台 17-21 についても 記述する。2点とも脚部に透孔があるが、脚部は内湾しながら広がる形状を呈している。特に 17-21 は受部から 脚部にかけて貫通孔をもつや長脚のタイプであり、北 陸系の要素もみてとれる (田嶋 1986)。

遺構外出土遺物 古墳時代の遺物とみられるものがあり、土師器腰の口縁部・底部などが出土しているが、注目すべき遺物は高環 17-7 である。一般的な高環と比較すると、環部の底を大きく凹ませ脚部と接着させるとい う特異な製作技法で作られている。环部と脚部の接着面は観察不可能な状態にあり詳細は不明であるが、环部内 部から脚部に向かって押しはめていると推測できる。ま た环部は深めてやや外反気味の形状、环部外面には粘土 組貼付けによる装飾、中実棒状脚から稜を作らずに八 の字に開く小型の裾部を持つ等の特徴がみられる。环 部と脚部の接着部分を除き山形県内でその類例を求める場合、山形市今塚遺跡 ST708 出土の高環群にその傾向

がみてとれる（須賀井・植松 1997）。それらのことから高环 17-7 は塙釜 2 式新相～3 式古層あるいは漆町 9 ～10 群並行期に属するのではないかとみられる（註2）。

古墳時代前期について、壺・甕類は詳細な時期は不明だが、加飾口縁 17-15、素口縁 17-16・18、折返口縁 17-17などの種類はあるものの、17-15・17 は緩やかに、17-16 大きく外反した口縁をもつ。

また、古墳時代中期について、高环 17-13・14 のようにがっちりした中空脚をもち据部が広がるタイプの脚部が出土しており漆町 13 群並行期の遺構の存在を窺わせる遺物も出土している。加えて 21-2 のような小型甕も出土している。

（3）古代

7 世紀末・飛鳥時代から 9 世紀代・平安時代までの遺物が出土している。

ST1 穫穴住居跡（第 14 図 1～17・第 15 図 1～10）

この遺構から出土した遺物で図化できたのは、黒色土器環 6 点、須恵器環 1 点、土師器環 1 点、須恵器蓋 1 点、土師器蓋 1 点、須恵器甕 4 点、須恵器瓶 2 点、土師器甕 6 点、円面鏡 1 点、紡錘車 1 点である。

黒色土器環で口縁が存在するものについて、14-3～6 について口縁が外側へ直行するタイプとなっている。また有段环 14-3・5・6 については有段の位置が比較的高く古いタイプのものと思われる。14-3 は床面直上出土である。土師器環 14-2 は口縁部がやや内弯気味になっており、いわゆる「関東系」といわれるタイプの丸底环であろう（植松 2008）。

須恵器蓋 14-9 と土師器蓋 14-10 が出土しているが、2 点とも上部がドーム型で口唇が下を向く形状である。しかし、ともにそれほど器高は高くないとみられ、つまりを接着した痕跡がないのでつまみはなかったと思われる。14-9 は床面直上出土である。

須恵器環 14-1 は「有段丸底环」という形であろうか。床面直上の出土である。外側底面には「×」印が漆で書かれ、内面には器に墨を入れたと思われる墨痕が残っている。県内での出土例として高畠町大在家遺跡河川跡から有段の須恵器環が出土している（植松・植 2006）が、

大在家遺跡のものは口縁が斜め上方に直行しているに対し、本遺跡出土のものは口縁が外反しているという特徴を持つ。

また、この住居からは小型の無脚円面鏡 15-6 が出土している。墨痕や磨滅などの使用痕が残る。

土師器甕 14-17 について、体部外面上方がハケメ、下方がケズリ調整され、内面は磨滅が顕著だが輪積み跡が明確に残る。口縁部は緩やかなカーブを描きながら外反しているとみられる。また土師器甕 15-1 は底部を穿孔して丁寧に打ち欠きを施された痕跡がみられ、甕として二次利用された可能性が考えられる。

須恵器の壺・甕類については、器壁が大変薄く肩の張る形状が特徴的な 14-11 がある。

住居内北東隅 EK18 からは、黒色土器甕 15-8、土師器甕 15-9、波状紋の施された須恵器大甕頭部 15-10 が出土している。いずれも 7 世紀末～8 世紀初頭のものとみられる。

ST1 の上層部からは須恵器の紡錘車および鉄棒が出土し、鉄棒は穴の中に残存していた。

SD1 溝跡（第 16 図 1～2） この遺構からは須恵器環 2 点が出土している。16-1 はやや身が深めである。16-2 は底部が回転糸切である。形状からも概ね 9 世紀第 3～4 四半期頃のものと思われる。

SD2 溝跡（第 16 図 3～9） この遺構からは須恵器環 5 点、黒色土器 1 点、土師器甕 1 点が出土している。16-3～5・8 は底部が回転糸切である。形状からも概ね 9 世紀第 2～3 四半期頃のものと思われる。

SD3 溝跡（第 16 図 10） この遺構からは瓶 1 点が出土している。肩の張るタイプの瓶と推測され、高畠町源福寺古墳群出土の長頸瓶と類似するため 7 世紀末に属するものではないかと思われる。

SD5 溝跡（第 16 図 11～12） この遺構からは土師器丸底环 1 点、黒色土器有段环 1 点が出土している。16-11 はやや身が深めで僅かに途中で器壁が屈曲する程度である。ただしこれは遺構確認面出土である。16-12 は底部がやや平坦で、有段が沈線で表現され形散化し、その位

置も低い。16-12 の特徴からすれば、8世紀以降のものと考えられる。

SD6 溝跡（第16図14） この遺構からは古代に属する遺物としては16-14の黒色土器壺1点である。やや有段が形態化していることから8世紀代のものとみられる。ただし遺構の確認面からの出土であり、遺構年代を示すものとは言い難い。

SD7 溝跡（第16図15～17） この遺構からは3点出土しているがいずれも遺構覆土上層出土である。古代に属する遺物として明確なのは、黒色土器丸底有段壺16-15、土師器甕16-17である。有段壺は7世紀末～8世紀初頭とみられるが、甕は時期不明である。

SD8 溝跡（第16図18・19・22） この遺構からは古代に属する遺物として須恵器壺2点、須恵器蓋1点出土している。古墳時代の土器については前述のとおりである。

須恵器壺16-18・19は底部が回転糸切であり形状から概ね9世紀2～3四半期、須恵器蓋16-22も同時期に属するとみられる。

SX1 遺構（第17図1～2） この遺構からは須恵器高台壺1点と須恵器横瓶体部破片1点が出土している。横瓶は破片のため時期は不明であるが、回転糸切底部の痕跡をもつ須恵器高台壺から推定して9世紀第3～4四半期のものとみられる。

SX7 遺構（第17図3） この遺構からは須恵器高台壺1点が出土している。回転ヘラ切の底部をもつその形状から8世紀第4四半期のものとみられる。

EB1 柱穴（第17図4） この遺構からは土師器甕底部1点が出土している。残存部分が僅少のため時期は不明。

遺構外出土 古代の遺物に関して、土師器高壺・壺・蓋・甕類、須恵器壺・高台壺・蓋・甕類、黒色土器壺が出土している。

7世紀末～8世紀初頭のものとして高壺17-12～14

があげられ、短脚で脚部内部の空間が広くなっているのが特徴的である。また19-10、19-18・19の有段壺も典型的なその時代の壺といえよう。

須恵器杯については、底部切離し技法によって分類した場合、回転ヘラ切・回転糸切はほぼ半数である。形状からも鑑みて8世紀第4四半期から9世紀第4四半期までの約1世紀の間ほぼ定量で使用されたとみられる。

また高台壺の時期についても同様の傾向がみられる。注視したいのは19-1で、底部中央を意図的に穿孔したと思われる痕跡がみられる。また意図的に部体を欠き割ったような痕跡を持つものが多いのが特徴である。

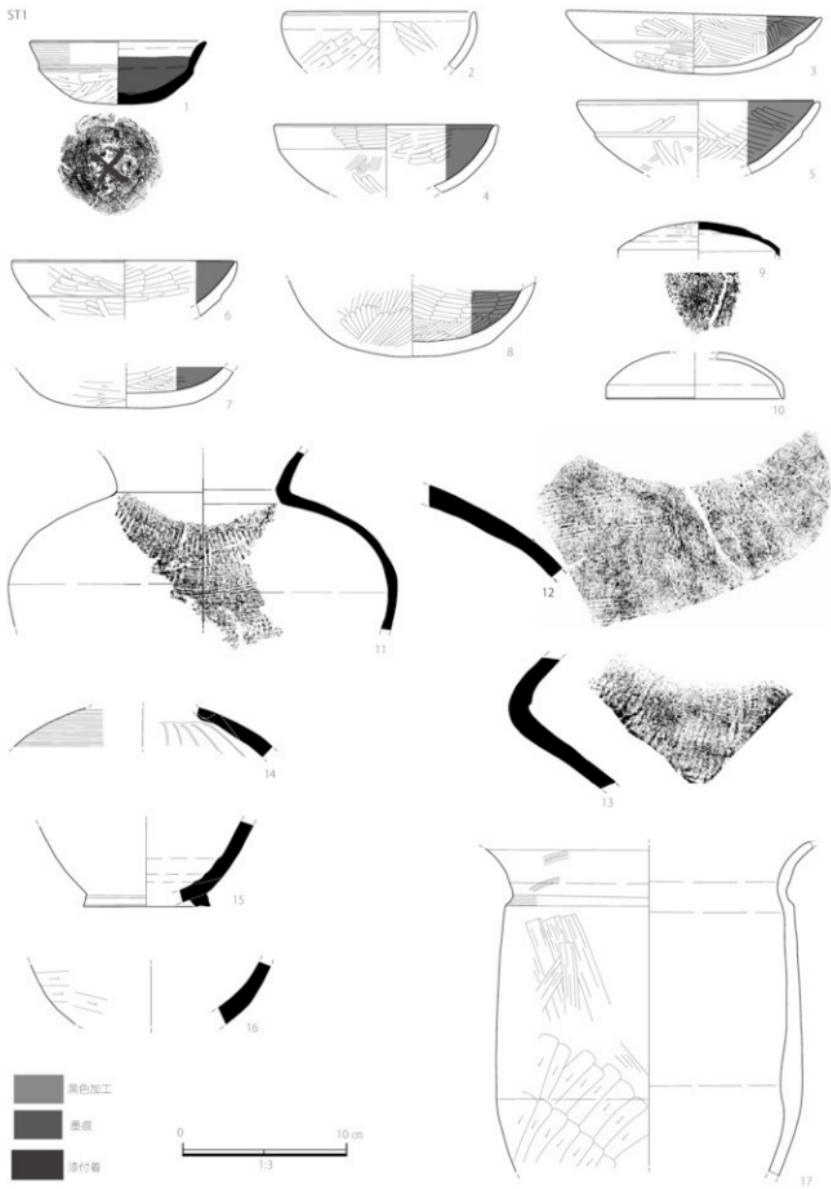
ただ土師器壺の場合、回転糸切に偏り気味で、9世紀第2～4四半期の範疇とみられる。その中で19-12のみが回転ヘラケズリした後底部を調整し、「×」のヘラガキがなされている。

須恵器蓋はツマミの付くタイプが大半であるが、体部がツマミのない大型の20-6が存在する。やドーム型に近い20-3は8世紀第3～4四半期のものと思われる。

土師器蓋20-7・8はツマミのないタイプとみられる。ST1から出土した土師器蓋と同型と考えられる。

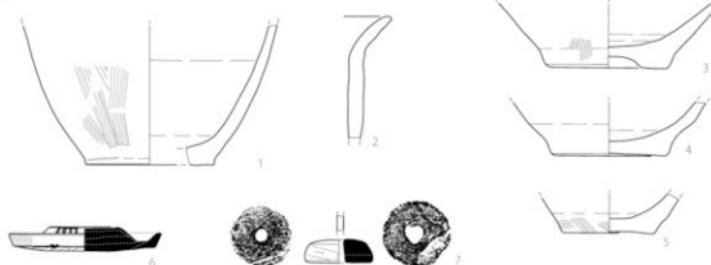
須恵器甕・瓶類の中で特徴的なのはこね鉢20-17である。こね鉢は近年行われた南陽市赤湯バイパス関連発掘調査において、西中上遺跡（氏家・吉田2007）及び中落合遺跡（氏家・高桑2008）から相次いで出土している。いずれの遺跡も郡山遺跡群から0.8kmほどの場所に位置する。また高畠町大在家遺跡からもこね鉢の底部が出土している（植松・植2006）。

土師器甕21-1について、口縁が大きく開きや細長い印象を受ける。底部は欠損している。その類例として河北町不動木遺跡（長橋1986）ST3及び寒河江市平野山古窯群第12地点第1次調査（佐藤・須賀井1998）ST15出土甕があげられよう。いずれも8世紀第2～3四半期の範疇とみられている。

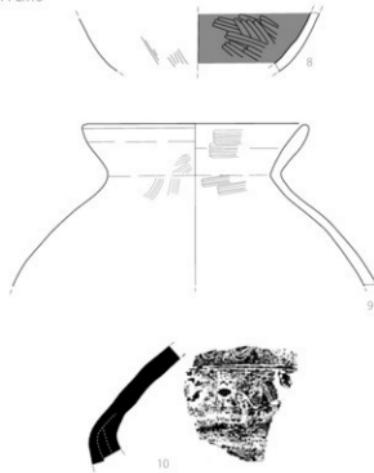


第14図 沢田遺跡 出土遺物(1)

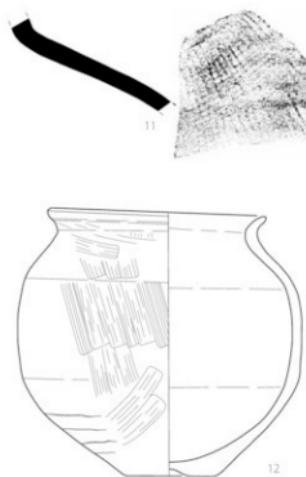
ST1



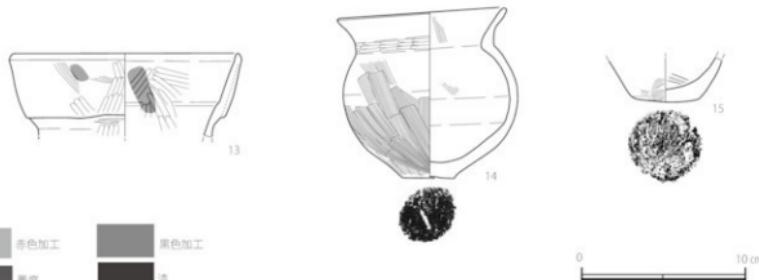
ST1 EK18



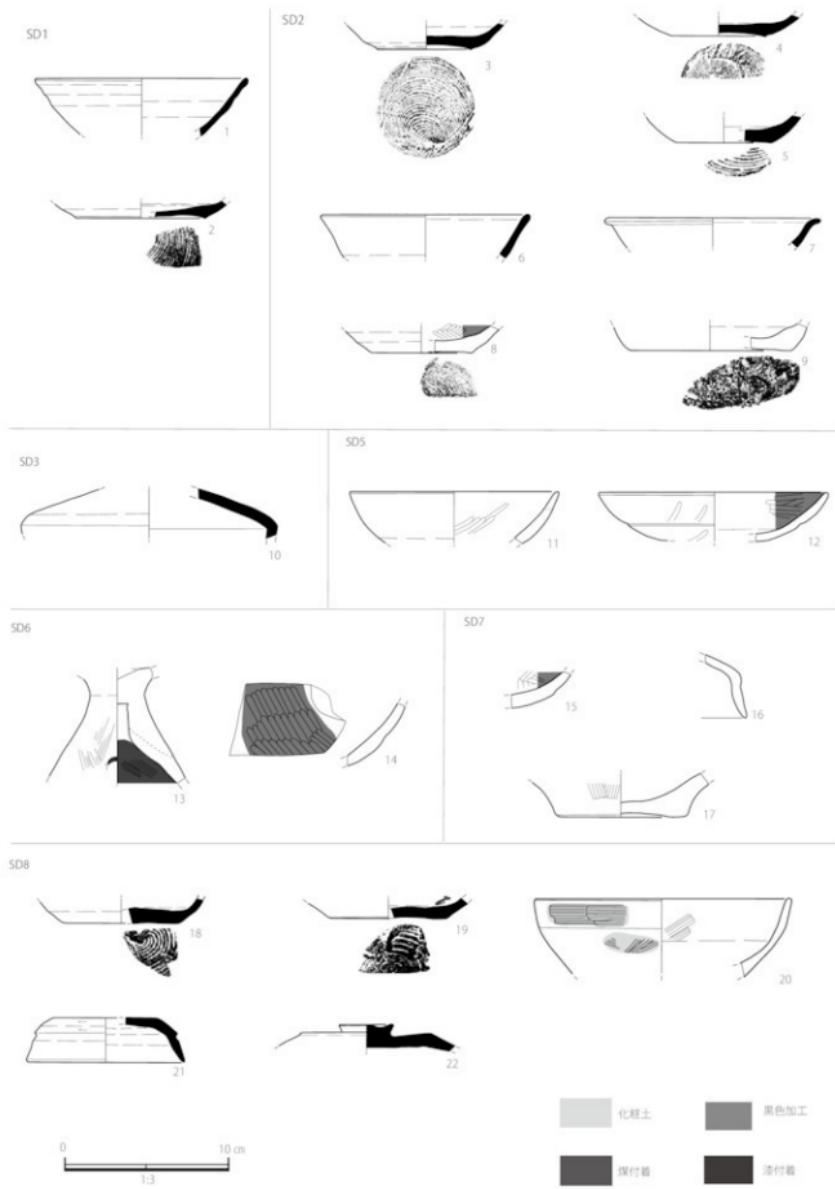
SK1



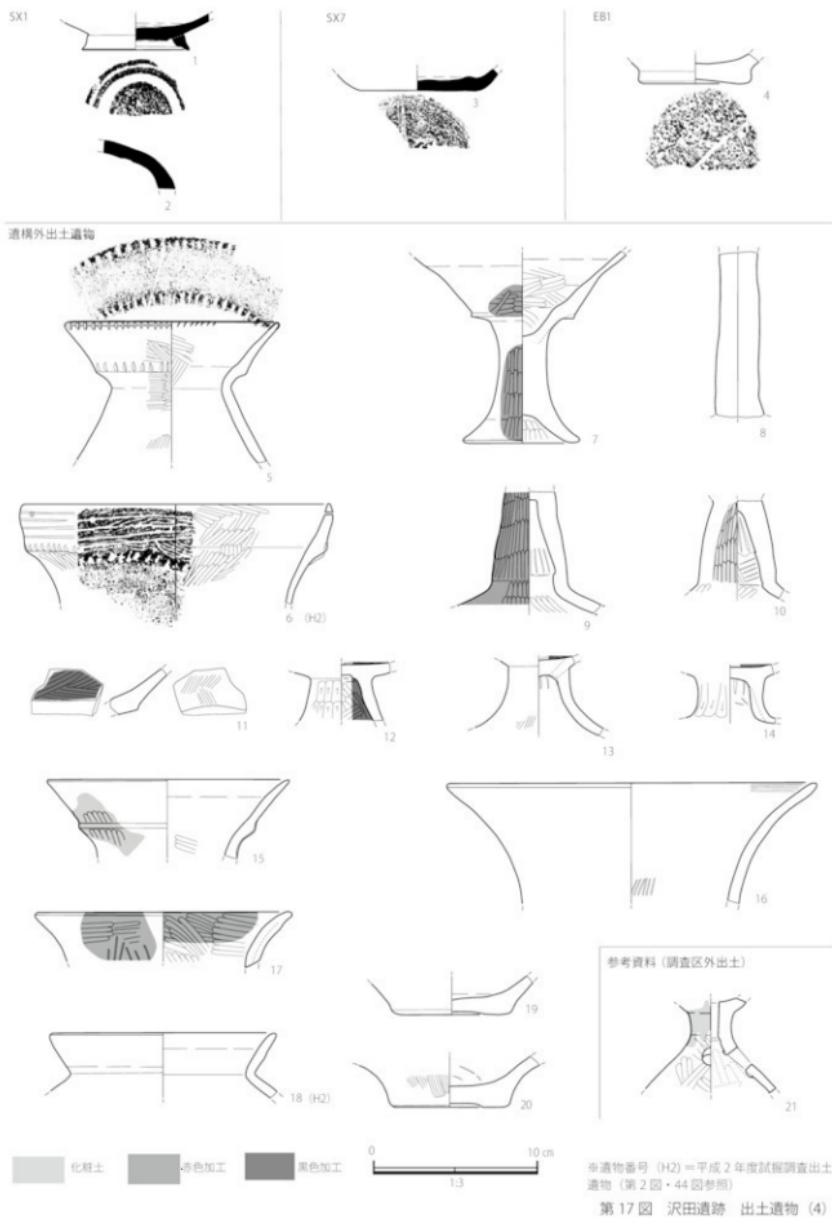
P32



第15図 沢田遺跡 出土遺物（2）



第16図 沢田遺跡 出土遺物 (3)



※遺物番号 (H2) = 平成 2 年度試掘調査出土
遺物 (第 2 図・44 図参照)

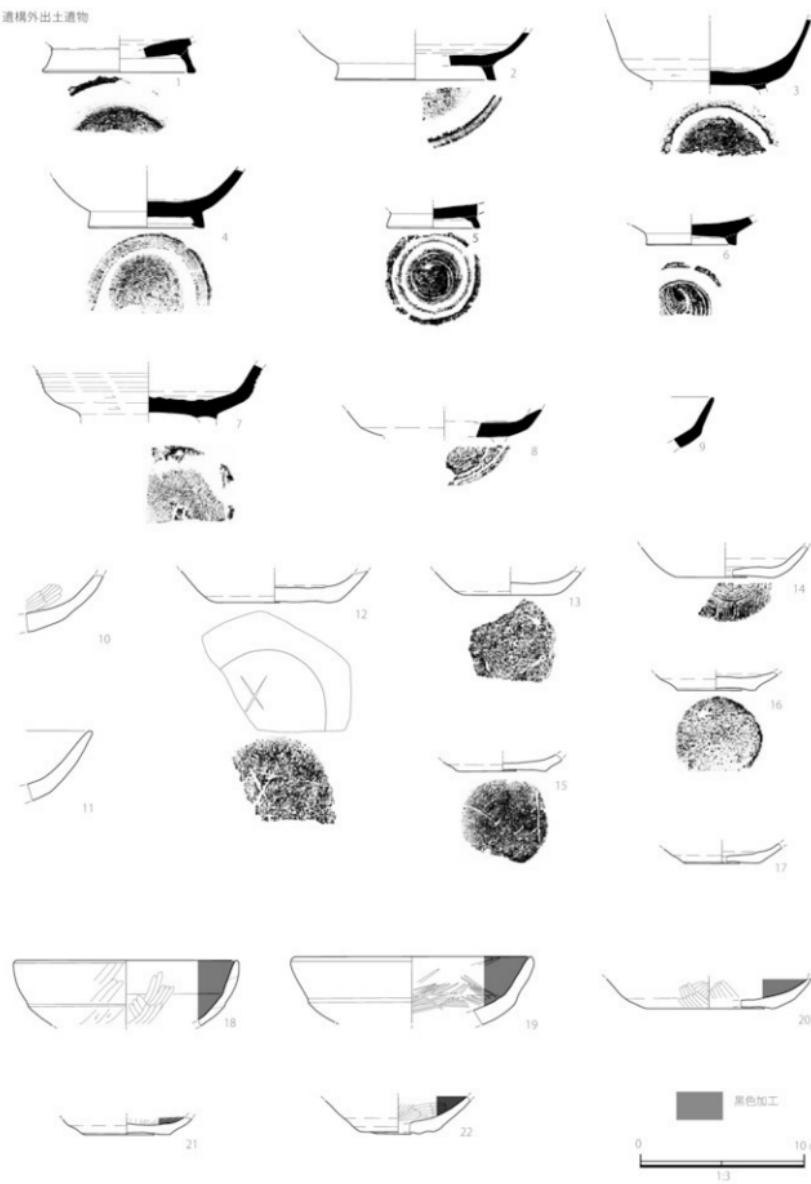
第 17 図 沢田遺跡 出土遺物 (4)

遺模外出土遺物



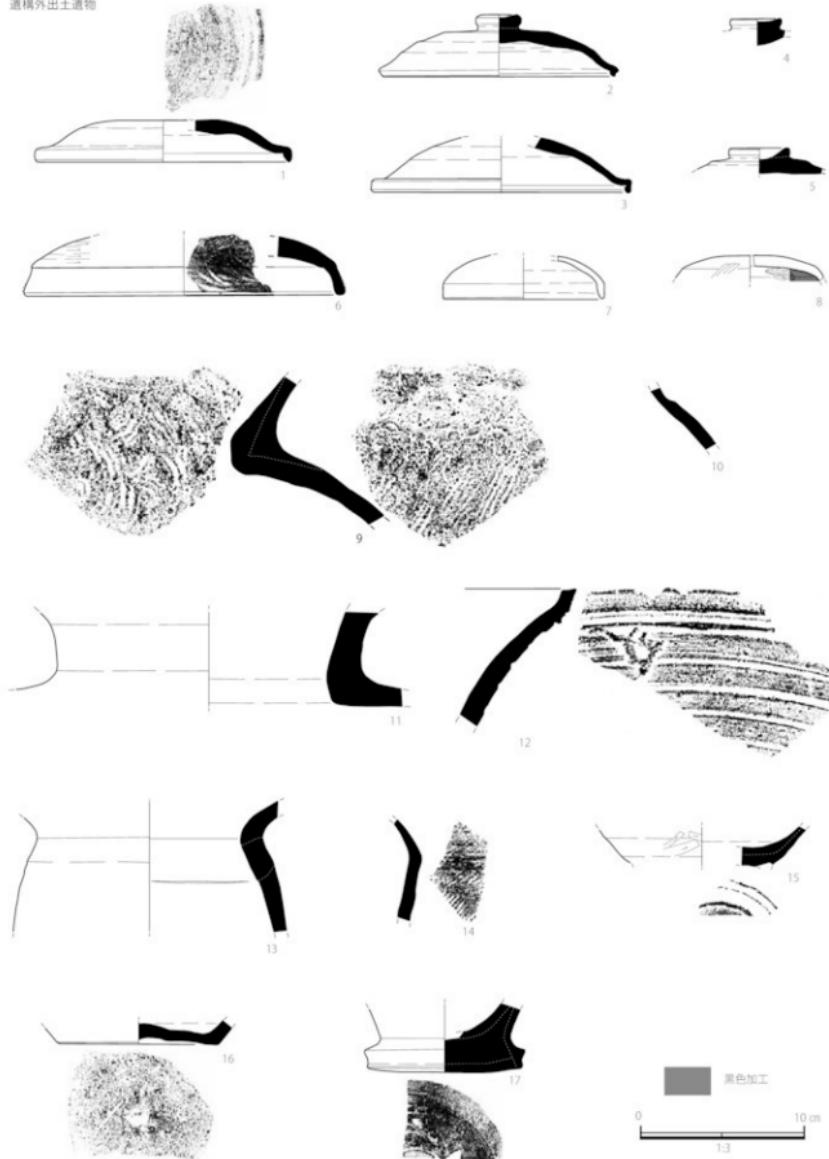
第18図 沢田遺跡 出土遺物(5)

遺構外出土遺物



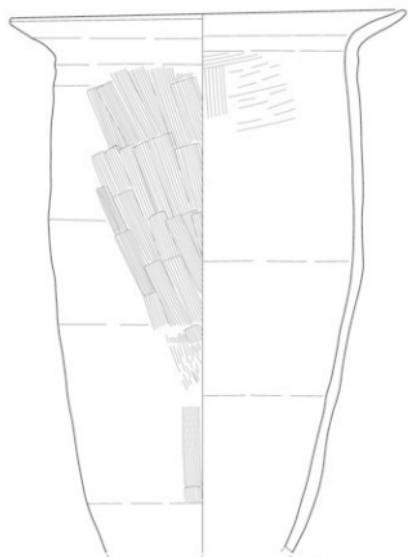
第19図 沢田遺跡 出土遺物(6)

遺構外出土遺物

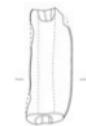
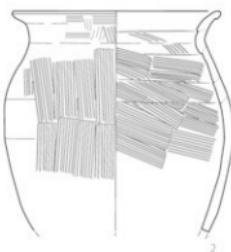


第20図 沢田遺跡 出土遺物 (7)

道模外出土遺物



参考資料（調査区外出土）



0 10 cm
1.3

第21図 沢田遺跡 出土遺物 (8)

表2 沢田遺跡 遺物観察表（1）

回復 種別	種 別	器 種	登録 計測値 (mm)				調整接法	内 面	底 部	出土地点	備 考
			番号	番号	口径	直径	高さ	厚さ			
1	須恵器	壺	RP6	110	42	40	5	ロクロ・ケズリ	ロクロ	回転ヘラ切・ケズリ	ST1 床面 画面漆書「X」内面墨痕
2	土師器	壺	604	(120)	-	-	5	ケズリ	ミガキ	-	ST1F1
3	黒色土器	有段壺	RP3	160	46	38	6	ミガキ・ケズリ・ハゲメ	ミガキ	ケズリ	ST1 床面
4	黒色土器	壺	646	(136)	-	-	7	ミガキ・ハゲメ	ミガキ	-	ST1EP5F1
5	黒色土器	有段壺	380	(150)	-	-	6	ハゲメ→ミガキ	ミガキ	-	ST1F1
6	黒色土器	有段壺	519	(140)	-	-	6	ミガキ	ミガキ	-	ST1EP5F1
7	黒色土器	丸底壺	500	-	(90)	-	10	ケズリ	ミガキ	ケズリ	ST1F2
8	黒色土器	壺	340	-	-	-	8	ミガキ・ケズリ	ミガキ	ケズリ	ST1F1
9	須恵器	蓋	530	-	-	-	5	ロクロ→ケズリ	ロクロ	-	ST1 床面
10	土師器	蓋	383	(110)	-	-	4	不明	不明	-	ST1EP5F1 焼成不良
11	須恵器	壺	389	-	-	-	5	ロクロ→タタキ	ロクロ→アテ	-	ST1EP5F1 焼成良好・器壁薄
12	須恵器	甕	339	-	-	-	12	タタキ	アテ	-	ST1F1
13	須恵器	甕	619	-	-	-	12	タタキ	アテ?	-	ST1F1
14	須恵器	甕	481	-	-	-	8	カキメ	ロクロ	-	ST1F1 回転切閉閉・焼成良好
15	須恵器	壺	-	-	(80)	-	8	ロクロ	ロクロ	高台	ST1F1 焼成良好
16	須恵器	瓶類	482	-	-	-	10	ロクロ・ケズリ	ロクロ	-	ST1 床面 焼成良好
17	土師器	甕	540	-	-	-	8	ハゲメ	ハゲメ	-	ST1F2
1	土師器	甕	RP3	-	(40)	-	7	ハゲメ	不明	不明	ST1F2 底部存孔痕・軸軋用か
2	土師器	甕	388	-	-	-	8	ハゲメ	ハゲメ	-	ST1F2 軸軋跡著
3	土師器	甕 or 甕	616	-	74	-	8	ハゲメ	不明	ケズリ	ST1 床面
4	土師器	甕 or 甕	RP3	-	70	-	8	不明	不明	ケズリ	ST1F2
5	土師器	甕 or 甕	353	-	(48)	-	10	ハゲメ	ハゲメ	ケズリ	ST1 確認面
6	須恵器	円腹鏡	343	95	88	15	14	ロクロ	ロクロ→ケズリ	ケズリ	ST1F1 上面に些少使用痕・墨痕
7	須恵器	筋縫車	-	42	-	-	14	ケズリ・指ナデ	-	-	ST1 確認面 六中直径 4 mm の鉄棒残存
8	黒色土器	壺	436	-	-	-	6	ハゲメ	ミガキ	-	SK18F1
9	土師器	壺	428	(140)	-	-	6	ハゲメ	ハゲメ	-	SK18F1 軸軋跡著・焼成不良
10	須恵器	甕	413	-	-	-	11	ロクロ	ロクロ	-	SK18F1 口端部に波状紋
11	須恵器	甕	RP1	-	-	-	10	タタキ	アテ	-	SK1F1 内面火はね跡著
12	土師器	甕	RP2	136	56	167	6	ハゲメ	不明	ケズリ	SK1 床面 内外面磨滅顕著
13	弥生土器	甕	RP7	(140)	-	-	7	ハゲメ→ミガキ	ミガキ	-	P32F1 赤色加工有
14	土師器	小型甕	RP7	(106)	32	105	5	ハゲメ	ハゲメ?	ケズリ	P32 床面 被熱膜・君城・コケ附着
15	土師器	小型土器	654	-	44	-	6	ハゲメ	ハゲメ	ハゲメ	P32F2
1	須恵器	壺	-	(130)	-	-	3	ロクロ	ロクロ	-	SD1
2	須恵器	壺	-	-	(80)	-	4	ロクロ	ロクロ	回転系切	SD1
3	須恵器	壺	-	-	60	-	6	ロクロ	ロクロ	回転系切	SD2
4	須恵器	壺	-	-	(60)	-	4	ロクロ	ロクロ	回転系切	SD2
5	須恵器	壺	-	-	(60)	-	6	ロクロ	ロクロ	回転系切	SD2
6	須恵器	壺	-	-	(130)	-	4	ロクロ	ロクロ	-	SD2
7	須恵器	壺	-	-	(74)	-	4	ロクロ	ロクロ	-	SD2
8	黒色土器	壺	-	-	(66)	-	7	ロクロ	ミガキ	回転系切	SD2
9	土師器	甕	-	-	(100)	-	10	ハゲメ	不明	不明	SD2
10	須恵器	長脚瓶	-	-	-	-	6	ロクロ	ロクロ	-	SD3 焼成良好
11	土師器	丸底壺	287	(130)	-	-	7	不明	ミガキ	-	SD5F1
12	黒色土器	有段壺	315	-	(144)	-	5	ミガキ	ミガキ	-	SD5F2
13	土師器	高壺	256	-	-	-	12	ハゲメ	ハゲメ	-	SD6 確認面 内部スス付着
14	黒色土器	有段壺	-	-	-	-	7	ケズリ	ミガキ	-	SD6
15	黒色土器	有段壺	283	-	-	-	7	ミガキ	ミガキ	-	SD7 確認面
16	土師器	蓋	297	-	-	-	5	ロクロ	ロクロ	-	SD7F1
17	土師器	壺	293	-	80	-	10	ハゲメ	不明	木葉痕	SD7F1 磨滅痕有
18	須恵器	壺	262	-	(70)	-	6	ロクロ	ロクロ	回転系切	SD8 確認面 体部打欠痕?
19	須恵器	壺	721	-	(72)	-	6	ロクロ	ロクロ	回転系切	SD8F1 滑付着?
20	土師器	壺	307	(140)	-	-	5	ハゲメ	ハゲメ	-	SD8F1 化粧土一部残存
21	須恵器	蓋	262	(98)	(66)	27	6	ロクロ→ケズリ	ロクロ	ナデ	SD8 確認面 TK10 刻道須恵器
22	須恵器	蓋	691	-	-	-	8	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	SD8 体部打欠痕?

表 3 沢田遺跡 遺物観察表（2）

回復 種別 器種	登録番号	測定番号	測定値 (mm)				調整技法	出土地点	備考
			口径	底径	高さ	厚さ			
1 潜器	高台杯	-	-	(66)	-	4 ロクロ	ロクロ	回転系切	SK1 底部高台内に自然釉
2 潜器	縦幅	-	-	-	7 ロクロ	ロクロ	-	-	SK1 燃成良好
3 潜器	杯	-	-	(70)	-	6 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	SK7
4 土師器	甕	569	-	70	-	9 不明	不明	木葉痕	EB1 体部打欠窓か
5 弱生土器	壺	-	(132)	-	-	7 三ガキ	三ガキ	-	造模外 口縁部刮み・縋文・穿孔
6 弱生土器	壺	-	(190)	-	-	5 三ガキ	三ガキ	-	HZTP20 平成2年度試掘出土
7 土師器	高杯	-	-	-	-	7 三ガキ	三ガキ	-	造模外 赤色加工
8 土師器	高杯	-	-	-	-	24 不明	-	-	造模外 外面磨滅顯著
9 土師器	高杯	-	-	-	-	10 三ガキ	三ガキ	-	造模外 外面赤色加工
10 土師器	高杯	-	-	-	-	12 三ガキ	三ガキ・ハケメ	-	造模外 外面白色化粧土残存
11 黒色土器	高杯	164	-	-	-	8 ハケメ	三ガキ	-	造模外
12 黒色土器	高杯	-	-	-	-	7 ケズリ	三ガキ	-	造模外
13 黒色土器	高杯	137	-	-	-	6 ハケメ	三ガキ	-	造模外
14 黒色土器	高杯	98	-	-	-	8 ケズリ	ペラ	-	造模外
15 土師器	壺	-	(150)	-	-	6 三ガキ	三ガキ	-	造模外 外面白色化粧土残存
16 土師器	壺	-	(230)	-	-	7 ハケメ	ハケメ	-	造模外
17 土師器	壺	96	(160)	-	-	8 三ガキ	三ガキ	-	造模外 赤色加工・折返し口縁か
18 土師器	壺	-	(140)	-	-	7 不明	不明	-	HZTP13 磨滅顯著・平成2年度試掘
19 土師器	壺・甕	180	-	(72)	-	10 不明	不明	ケズリ	造模外 使用による磨滅
20 土師器	壺・甕	101	-	72	-	8 ハケメ	ペラ	ケズリ	造模外
21 土師器	蓋	-	-	-	-	5 三ガキ	コナデ	-	造模外 白色化粧土残存
1 潜器	杯	-	(140)	-	-	5 ロクロ	ロクロ	-	造模外
2 潜器	杯	-	-	(82)	-	8 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	造模外 燃成不良
3 潜器	杯	-	(140)	(76)	39	4 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	造模外
4 潜器	杯	-	-	(84)	-	4 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	造模外
5 潜器	杯	-	-	(70)	-	4 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	造模外
6 潜器	杯	-	-	(80)	-	7 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	造模外 磨滅顯著
7 潜器	杯	106	-	(80)	-	6 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切→ケズリ	造模外 底部ペラケズリ調整
8 潜器	杯	-	-	(38)	-	8 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	造模外
9 潜器	杯	99	-	(80)	-	5 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	造模外
10 潜器	杯	-	-	(36)	-	6 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	造模外 底部麻孔か
11 潜器	杯	101	-	(70)	-	5 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	造模外
12 潜器	杯	-	-	(78)	-	6 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	造模外
13 潜器	杯	-	(150)	(60)	45	4 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外
14 潜器	杯	-	-	70	-	9 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外 燃成不良
15 潜器	杯	-	-	(70)	-	7 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外
16 潜器	杯	-	-	(64)	-	5 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外
17 潜器	杯	-	(136)	60	44	4 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外 底部火はね・焼成不良
18 潜器	杯	152	-	(66)	-	5 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外
19 潜器	杯	-	-	60	-	5 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外 体部打欠窓か
20 潜器	杯	-	-	(60)	-	6 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外 体部打欠窓か
21 潜器	杯	-	-	60	-	4 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外 体部打欠窓か
22 潜器	杯	-	-	(62)	-	6 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外 体部打欠窓か
23 潜器	杯	-	-	(60)	-	5 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外
24 潜器	杯	-	-	(44)	-	4 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外 燃成良好
25 潜器	杯	-	-	(48)	-	4 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外
1 潜器	高台杯	-	-	(94)	-	8 ロクロ	ロクロ	-	造模外 体部打欠窓か
2 潜器	高台杯	-	-	(100)	-	4 ロクロ	ロクロ	-	造模外
3 潜器	壺	721	-	-	-	3 ロクロ	ロクロ	-	造模外
4 潜器	高台杯	-	-	76	-	6 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外
5 潜器	高台杯	181	-	38	-	7 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外 体部打欠窓か
6 潜器	高台杯	-	-	(56)	-	6 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外
7 潜器	縦幅	-	-	-	-	8 ロクロ・ケズリ	ロクロ	回転ヘラ切	造模外 燃成良好
8 潜器	高台杯	-	-	-	-	6 ロクロ	ロクロ	回転系切	造模外
9 潜器	縦幅	100	-	-	-	7 ロクロ	ロクロ	-	造模外 燃成不良
10 土師器	有線杯	-	-	-	-	6 三ガキ・ケズリ	三ガキ	-	造模外

表4 沢田遺跡 遺物観察表（3）

回収 番号	種別	器種	登録 番号				計測値 (mm)		調整技法		出土地点	備考
			口径	底径	器高	器厚	外 面	内 面	底 部			
11	土師器	有段坏	-	-	-	8	ミガキ・ハケメ	ミガキ	-	遺模外		
12	土師器	坏	180	-	(76)	10	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切→ケズリ	遺模外	底部削除後へ書き「×」	
13	土師器	坏	-	-	58	-	5 ロクロ	不明	回転系切	遺模外	磨滅顕著	
14	土師器	坏	-	-	(60)	-	5 ロクロ	ロクロ	回転系切	遺模外		
15	土師器	坏	561	-	56	-	5 ロクロ	ロクロ	回転系切	遺模外	磨滅顕著	
16	土師器	坏	-	-	50	-	4 ロクロ	ロクロ	回転系切	遺模外	体部打欠痕か	
17	土師器	坏	-	-	(46)	-	5 ロクロ	ロクロ	回転系切	遺模外		
18	黒色土器	有段坏	104	(138)	-	6	ミガキ	ミガキ	-	遺模外		
19	黒色土器	有段坏	181	(148)	-	7	不明	ミガキ	-	遺模外		
20	黒色土器	坏	-	-	(80)	-	6 ミガキ	ミガキ	回転系切	遺模外	磨滅顕著	
21	黒色土器	坏	-	-	(56)	-	4 ロクロ	ミガキ	回転系切	遺模外	体部打欠痕か	
22	黒色土器	坏	-	-	(48)	-	5 ロクロ	ミガキ	不明	遺模外	磨滅顕著	
1	須恵器	蓋	-	-	(176)	-	5 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	遺模外		
2	須恵器	蓋	65	(144)	(66)	38	7 ロクロ	ロクロ	-	遺模外	体部打欠痕か	
3	須恵器	坏	16	(160)	-	5 ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	遺模外			
4	須恵器	蓋	-	-	-	15 ロクロ	ロクロ	-	遺模外			
5	須恵器	蓋	32	-	-	10 ロクロ	ロクロ	-	遺模外	内面転用した形跡有		
6	須恵器	蓋	-	(100)	-	7 ケズリ	アテ	-	遺模外			
7	土師器	蓋	-	(100)	-	4 ロクロ	ロクロ	-	遺模外			
8	黒色土器	蓋	181	-	-	9 ミガキ	ミガキ	-	遺模外			
9	須恵器	縹	171	-	-	12 タタキ	アテ	-	遺模外			
10	須恵器	蓋	125	-	-	7 タタキ	アテ	-	遺模外	焼成不良		
11	須恵器	縹	2	-	-	16 タタキ	アテ	-	遺模外			
12	須恵器	縹	100	-	-	10 ロクロ	ロクロ	-	遺模外			
13	須恵器	委類	-	-	-	10 ロクロ	ロクロ	-	遺模外			
14	須恵器	瓶頸	-	-	-	7 ロクロ・タタキ	ロクロ	-	遺模外			
15	須恵器	瓶	-	-	-	10 ロクロ・ケズリ	ロクロ	-	遺模外			
16	須恵器	蓋	-	-	(100)	8 ロクロ	ロクロ	ケズリ・ユビナデ	遺模外	体部打欠痕か		
17	須恵器	こね跡	-	-	(96)	14 ロクロ	ロクロ	ケズリ	遺模外	使用による磨滅		
1	土師器	縹	-	(146)	-	6 ハケメ	ハケメ	-	参考遺物	試掘時出土・使用痕有		
2	土師器	小型縹	-	130	-	5 ハケメ	ハケメ	-	参考遺物	焼成良好・外面部付着		
3	土師器	縹	-	-	-	7 ロクロ・ハケメ	ロクロ	-	遺模外			
4	羽口	-	-	-	-	- 不明	不明	-	遺模外	被熱による損傷大		
5	結石	-	91	-	-	- -	-	-	遺模外	長63・幅38・厚21(mm)		

3. 小 結

平成元年度に調査された沢田遺跡は、吉野川扇状地の自然堤防上の微高地に立地する遺跡で、住居跡・溝跡・土坑などが検出され、弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代の遺物が出土した。

ここではこの遺跡の時代ごとに状況をとらえ、それとともに県教育委員会調査の沢田遺跡の成果と合わせながら考察したい。

弥生時代 弥生時代の土器は出土したものの、遺構底面から出土した遺物はない。しかし、弥生時代後期の天王山式並行期の土器の破片が出土していることから、弥生時代後期にこの地が人々の生活圏であったことが推定出来る。

古墳時代 古墳時代について、明らかに古墳時代の遺構とわかるものはピット1基、後世の掘り込みとの切合いはあるものの古墳時代前期のものとみられる土坑が1基である。いずれも土器が埋設されていて祭祀的様相が窺える。また、遺構外遺物についても古墳時代前期後半～中期中頃の、赤色及び化粧土で表面を加工した壺あるいは高杯など、供獻土器である要素の強いものが比較的多い。そのため古墳時代この場所は住居としてではなく祭祀に使用されていた可能性が考えられる。

そして前述の通り特異な形状をもつ高杯17-7について、环部と脚部との接着のほかに、中実棒状の脚部を持つという畿内の要素を持つものの、据部との間に稜が無いという畿内の要素とは異なる特徴も合わせもつ（註2）。これは山形県内や近隣でも類例が見られない形状であるため、この土器の起源と流通ルートを今後も検証する必要がある。

古代 古代においては、7世紀末から8世紀初頭にかけての郡山の集落が形成されつつある時期の状況を窺うことの出来る良好な資料が発見された。

ST1 からは焼失した竪穴住居跡から当時使用していたと思われる土器の一括資料が出土した。焼失家屋の場合、偶発的火災と意図的に焼き払った場合の2通りの状況が考えられるが、ST1 の場合それに関してはどちらであるか立証できる痕跡は確認出来なかった。しかし、カマド周辺から环・甕などの食器・調理器類が集中して出土しているため（第7図）、ほぼ日常生活に近い状態で

焼失した可能性は十分考えられる。なお、遺物ごとの出土レベルは第7図に示した通りである。

また、無脚円面硯と内面に墨跡の残る須恵器環に注視してみる。この2点の遺物により、ある程度の識字能力を持つ人物、あるいは郡衙の官吏がここに居住していたことが想像できる。住居跡は真北を軸としていることから、条里制の地割に則って住居を造っていた可能性が考えられる。

また古代の溝について、SD5とSD4が水平に、SD7はそれに対して直角に位置している。これらはN-5°～Wの方向を向く。またSD2とSD6も南北方向に併走している。そのため、これらの水平・垂直の関係にある溝について、それぞれ同時代の区画溝の可能性、あるいは竪穴住居の周溝の可能性もある。しかし、遺物からそれを考察した場合（第16図）、SD5は8世紀前半、SD7は7世紀末～8世紀初頭と若干の時間差を感じられる（SD4は出土遺物無し）。SD2とSD5に関して、SD2は9世紀第2～3四半期とみられるが、SD5は7世紀末～8世紀初頭と思われる。しかしそれぞれ出土した層位が覆土であるため、遺物による遺構の年代決定は難しいと思われる。またSD3も7世紀末～8世紀初頭の区画溝のひとつとみられる。

これらのことを総合すると、沢田遺跡は平成元年度調査区では弥生時代後期・古墳時代前期～中期、7世紀末～9世紀後半という期間、人々が生活した痕跡が残されているといえる。

県教育委員会調査・沢田遺跡について

ところで、これ以前の昭和59年山形県教育委員会により沢田遺跡が調査されている。JR赤湯駅の東約1.5～2kmの周辺である（第2図）。発掘調査報告書（佐藤・名和1985）においては弥生時代中期・後期（円田式・天王山式並行期）、古墳時代中期（南小泉II式）、国分寺下層式並行期、奈良～平安期の遺跡とされている。

今回、この報告書を作成するにあたり、この調査の出土遺物を再検証した。特に古墳時代南小泉II式並行期に位置づけられたST6出土遺物を再検証したところ、高杯22-1・2について、环部の底径が小さく身が深い、口縁がほぼ直行し环部下方に段があることから漆町9群併行期、山形県内では山形市今塚遺跡ST702（須

賀井・植松 1993) や同市馬洗場 B 遺跡 ST1209 (高橋 2004) と同時期ではないかと思われる。壺 22-5 については直行口縁と「くの字」に折れた頸部、球胴の体部をもつこと、壺 22-3、4 についても折返しや有段などの装飾はあるものの基本的に直行する口縁と「くの字」に折れている頸部をもつことから古墳時代前期後半に属すると思われる。しかし住居床面から漆町 13 並行期とみられる高环が出土し、これらの遺物は覆土中から出土したため直接 ST6 の年代を示す遺物ではない可能性は高いが、古墳時代前期中頃～後半にこの調査区周辺で人々の活動が行われていたことを示唆するものであろう。

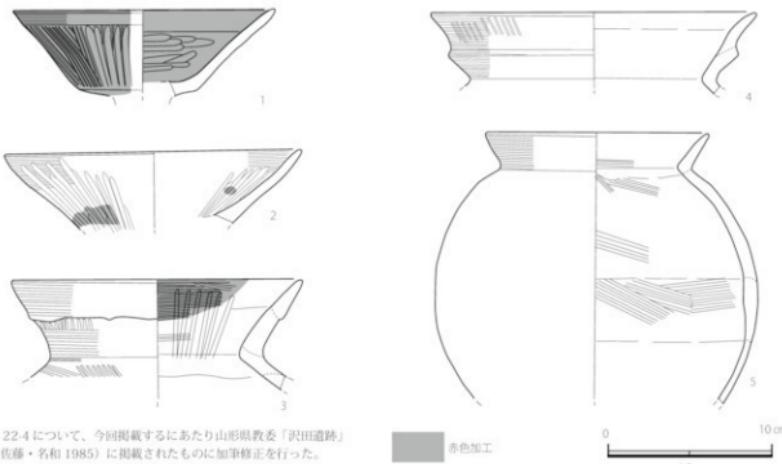
また、県教育委員会発掘調査区では 7 世紀末～8 世紀初頭の竪穴住居跡 ST2、8 世紀前半の竪穴住居跡 ST1 と

同時期の掘立柱建物跡も検出されている。つまりこの時期この場所が人々の生活の場所として使用されていたことが窺える。

広い範囲をもつ沢田遺跡は発掘調査の成果が出ているのはまだほんの一端の「点」のみである。しかし、今後も沢田遺跡の範囲は広がる可能性、あるいは隣接する遺跡との連続する可能性は十分に考えられる。そして今回報告した調査区はこれまで沢田遺跡の遺跡範囲外とされていた地区である。この調査は「沢田遺跡」の範囲の見直しや遺跡の広がりの見直しを行う上でも重要な調査であったと言えよう。加えて郡山郡衙の解明が進む成果を得た調査としたい。

註

- 1) 山形県埋蔵文化財センター考古主幹（兼）課長補佐 伊藤邦弘氏のご教示による。
- 2) 山形県埋蔵文化財センター調査研究員 菊池玄輝氏のご教示による。



* 22-4 について、今回掲載するにあたり山形県教委「沢田遺跡」(佐藤・名和 1985) に掲載されたものに加筆修正を行った。

第 22 図 調査沢田遺跡（昭和 59 年度） ST6 出土遺物

2 西原東遺跡

西原東遺跡は南陽市JR赤湯駅から南西方向、直線距離にして約1.4kmに位置する遺跡である（第2図）。住宅街と水田に囲まれた場所に所在する。南北約30m、東西約6mの調査区である。調査区内では土坑28基、溝3本、炉跡1基、そして掘立柱建物跡2棟、柱列2本が検出された。

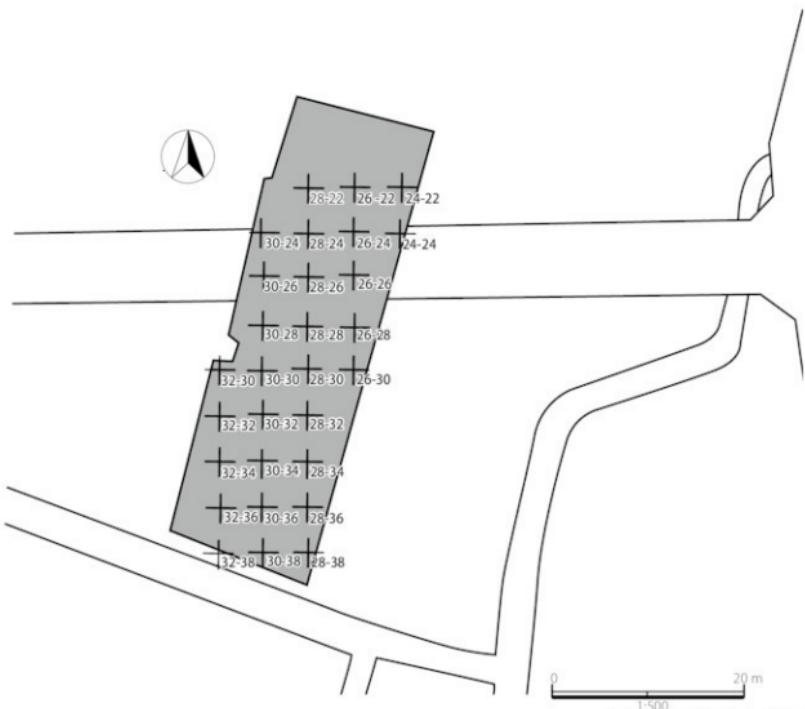
1 検出遺構

調査区内で土坑が28基検出されているが、そのうち4基が掘立柱建物跡の柱穴とみられる。

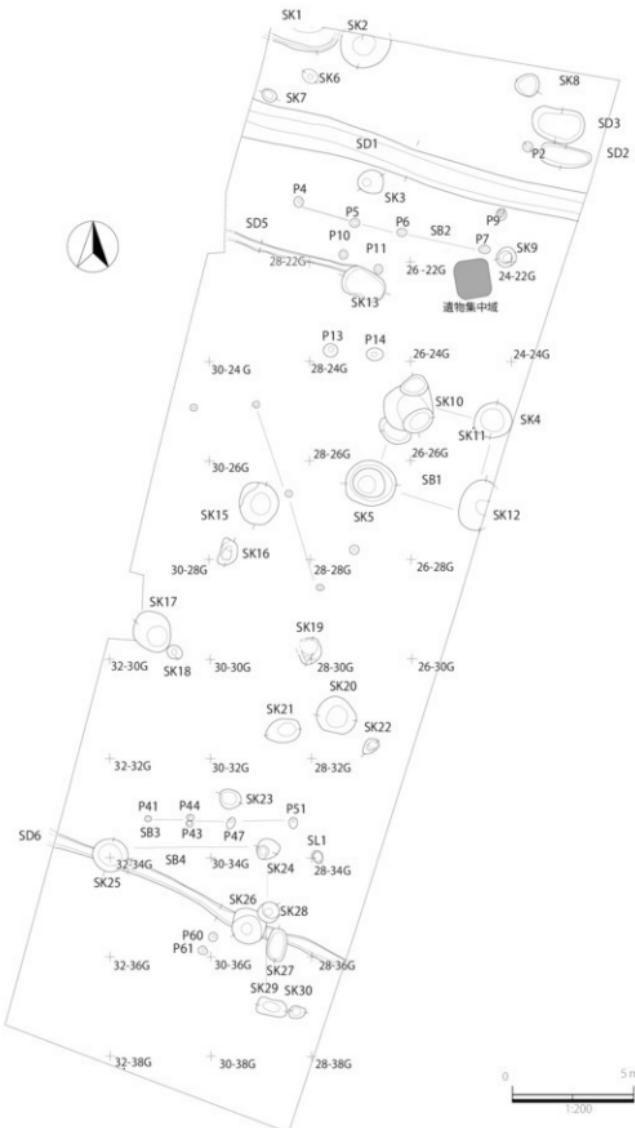
SB1（第25図）掘立柱建物跡 調査区中ほどとのSB1について、SK4・SK10・SK5・SK12で構成されている東西

1間×南北1間以上の建物とみられる。いずれも円形で、箱型に近い形に掘り込んでいる。遺構の直径は1.5～2m、深さ0.2～0.7mと大型である。ただしSK4は覆土上層に礫・回転糸切底部の高台壺・陶器甕が混入している。またSK10から縄文土器破片1点が出土しているのみで、そのため遺構の時期は不明としておきたい。いずれの土坑にも柱痕は検出できなかった。この調査で検出できたのは1間×1間の柱間であるが、調査区外東方向へ広がる可能性はあり得る。

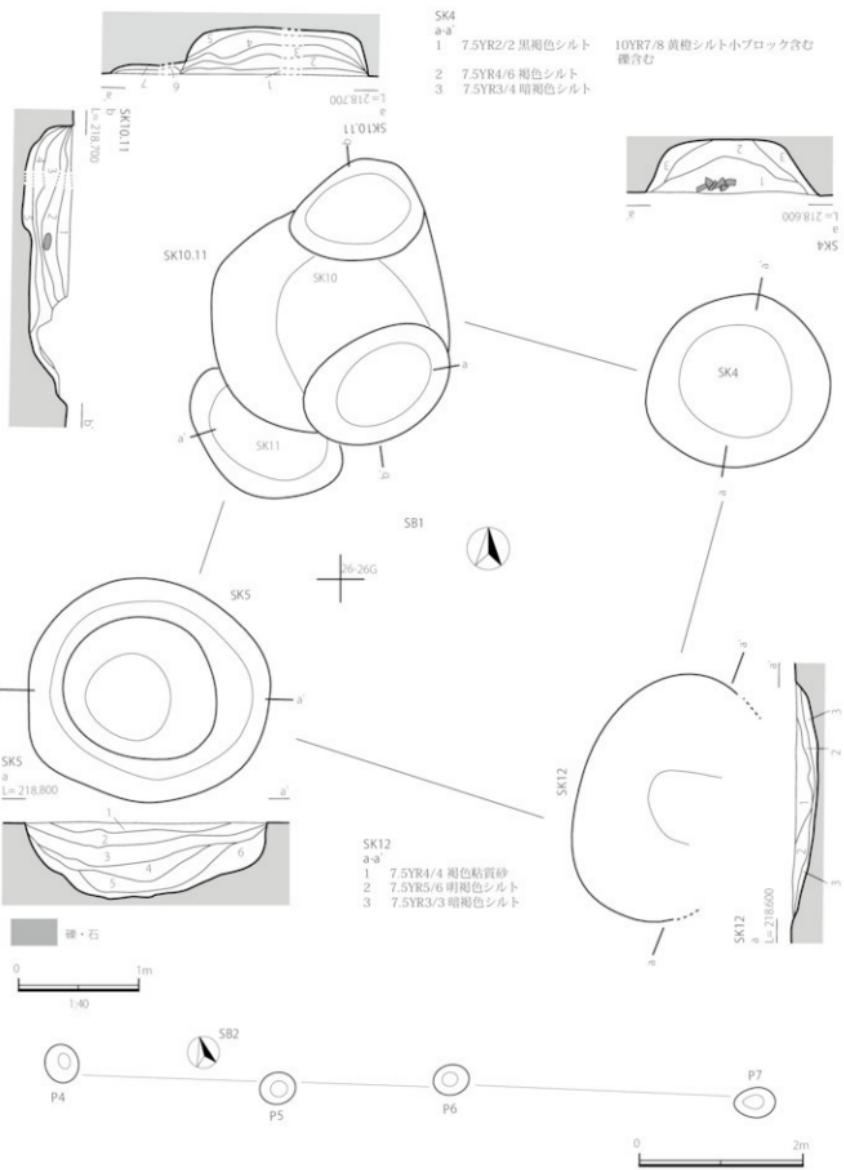
SB2柱列（第25図） SB2（P4・P5・P6・P7）はいずれも直径20cm程度の小さな柱穴の東西方向への並びであるが、ほぼ直線的に並んでいる。それらのことから目隠し棚などの柱列の可能性が考えられる。溝SD5と平行に走っているため建物群の構成する一部である可能性も



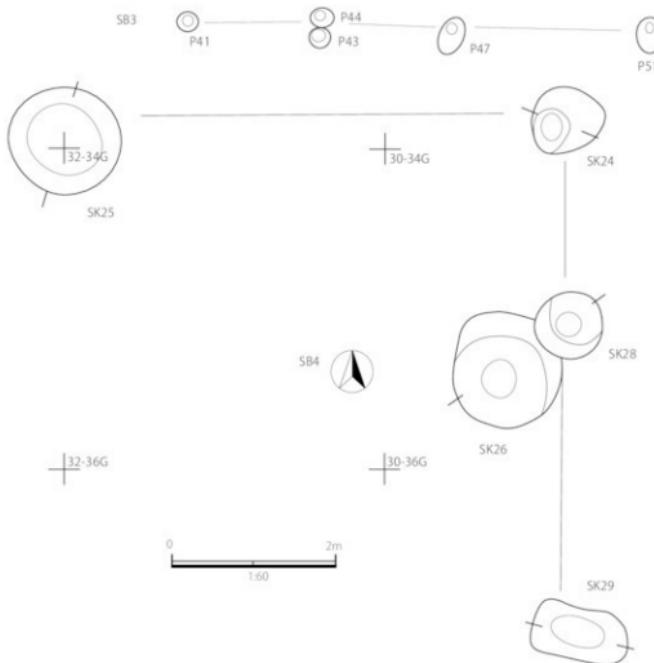
第23図 西原東遺跡 概要図



第24図 西原東遺跡 遺構配置図



第25図 西原東遺跡 掘立柱建物跡 (1)



第26図 西原東遺跡 挖立柱建物跡(2)

考えられる。ところでP6からは粘板岩製の模造石斧が出土しているものの、覆土中からのため遺構の時期を示すものとは考えづらい。そのため時期は不明としたい。

SB3・4 挖立柱建物跡（第26図） SB3（P41・43・44・45・51）はいずれも直径20cm程度の小さな柱穴の東西3間の並びであるが遺物は出土していない。SB4はSK25・24・26・29から構成されている東西1間×南北2間の掘立柱建物跡である。いずれも径1.2~1.4m、深さ0.1~0.4mの楕円形でU型あるいは緩やかなV字型の底を呈している。遺物はそれぞれ須恵器、土師器、黒色土器環、寛永通宝など様々な時期に属する遺物が出土しているため、時期の特定が困難である。

SB4の柱列はほぼ真北向き、この調査では1×2の柱間が確認されている。そしてその北側約1mにSB4とほぼ平行にSB3の柱列が存在する。しかし目隠し塀とし

ては建物と接近しすぎているため、SB4の庇柱の可能性が高いとみられる。

SK1 土坑（第27図） 調査区北端にあり南半のみの検出であるが、検出面の直径2.8m、深さ0.4mである。遺物の緩やかに掘り込まれた土坑である。覆土は自然堆積とみられる。遺物の出土はなかったため時期は不明である。

SK2 土坑（第27図） 調査区北端にあり南半のみの検出である。直径2m、深さ0.7mの円形で深い箱型の底を呈した土坑である。覆土は人為的に埋められた様子が窺える。遺物の出土はないため時期は不明である。

SK3 土坑（第27図） 直径約1m、深さ0.1mのやや不整形な円形で浅いレンズ状の底を呈した土坑である。覆

土は自然堆積とみられる。遺物の出土はないため時期は不明である。

SK6 土坑（第27図） この遺構は長径0.7m、深さ0.1mの楕円形で浅いレンズ状の底を呈した土坑である。覆土は自然堆積とみられる。遺物の出土はないため時期は不明である。

SK7 土坑（第28図） この遺構は長径0.7m、深さ0.1mの楕円形で浅いレンズ状の底を呈した土坑である。覆土は自然堆積とみられる。古墳時代前期の高環脚部が出土している。

SK8 土坑（第28図） この遺構は直径1m、深さ0.1mの円形で浅い箱型の底を呈した土坑である。覆土は自然堆積とみられる。遺物の出土はないため時期は不明である。

SK9 土坑（第28図） この遺構は直径0.9m、深さ0.2mの円形で浅いややV字型の底を呈した土坑である。覆土は自然堆積とみられる。遺物の出土はないため時期は不明である。

SK15 土坑（第28図） この遺構は直径1.7m、深さ0.5mの円形で浅いU字型の底を呈した土坑である。遺構からは片口のすり鉢の破片1点と砥石一部が出土している。

SK16 土坑（第28図） この遺構は長径1m、深さ0.25mの不整形でW字型の底を呈した土坑である。覆土には礫が混入している。8世紀第2～3四半期の須恵器環が1点出土している。

SK17 土坑（第28図） この遺構は直径1.6m、深さ0.2mの浅い円形で箱型の底を呈した土坑である。須恵器環3点、高台環1点、蓋2点、黒色土器環1点、甕口縁部1点が出土し、环の形状から8世紀第4四半期～9世紀第1四半期頃のものと思われる。

SK18 土坑（第28図） この遺構は長径0.6m、深さ0.2mの円形でU型の底を呈した土坑である。遺物の出土は

ないため時期は不明である。

SK19 土坑（第28図） この遺構は長径1.1m、深さ0.1mの不整形な円形でやや崩れた箱型の底を呈した土坑である。遺物の出土はないため時期は不明である。

SK20 土坑（第28図） この遺構は長径1.6m、深さ0.4mの円形でU型の底を呈した土坑である。須恵器環1点と須恵器蓋1点が出土し、环の形状から9世紀第1～2四半期のものと思われる。

SK21 土坑（第29図） この遺構は長径1.3m、深さ0.1mの楕円形で浅いレンズ型の底を呈した土坑である。土師器甕口縁1点、高環脚部1点、高環脚部1点、須恵器甕口縁～体部1点出土している。そのため遺構の時期の特定には検証が必要である。

SK22 土坑（第29図） この遺構は長径0.8m、深さ0.2mの楕円形で不整形なU型の底を呈した土坑である。須恵器甕1点が出土しているが、詳細な時期は不明である。

SK28 土坑（第29図） この遺構はSK26は直径1.5m、深さ0.5mの円形で緩やかなV型の底を呈している。隣接するSK28よりも古い。遺物は出土していないため、遺構の時期は不明である。

SK27 土坑（第29図） この遺構は直径1.3m、深さ0.1mの隅丸方形で箱型の底を呈した土坑である。土師器高環脚部1点、土師器環1点、土師器甕底部3点が出土し、これらは古墳時代中期とみられる。

SK30 土坑（第29図） この遺構は長径0.6m、深さ0.3mの不整形な円形でU型の底を呈した土坑である。覆土は自然堆積とみられる。遺物が出土していないため遺構の時期は不明である。

SK13 土坑（第30図） この遺構は長径1.8m、深さ0.2mの不整形な隅丸方形で箱型の底を呈した土坑である。覆土は自然堆積とみられる。遺物が出土していないため遺

構の時期は不明である。

SD1 溝跡（第 31 図） この遺構は長さ 3.7m、幅 0.8m の溝である。須恵器高台環 2 点が出土し、底部は回転糸切であるため 9 世紀以降のものとみられる。

SD2 溝跡（第 30 図） この遺構は長さ 2m、幅 0.8m、深さ 0.2m の箱型の底を呈した溝である。須恵器環 2 点が出土している。2 点ともに底部は回転ヘラ切した後ナデ調整をしている。形状からも考えると 8 世紀第 2 ~ 4 四半期のものとみられる。

SD3 溝跡（第 30 図） この遺構は長さ 2m、幅 1.2m、深さ 0.2m の緩やかな U 字型の底を呈した溝である。土師器甕破片 1 点が出土している。遺構の時期は不明である。

SD5 溝跡（第 30 図） この遺構は長さ 4.5m、幅 0.3m、深さ 0.1m の緩やかな U 字型の底を呈した溝である。遺物の出土はなく、遺構の時期は不明である。

SD6 溝跡（第 31 図） この遺構は長さ 6.4m、幅 0.2 ~ 0.4m、深さ 0.05m の緩やかな箱型の底を呈した溝である。高环脚部が出土し、形状から 7 世紀末 ~ 8 世紀初頭とみられる。

SL1 炉跡（第 31 図） この遺構は長径 0.5m、深さ 0.1m の箱型の底を呈した地床炉である。覆土は焼土で構成されている。遺構の覆土には、土師器壺口縁部 1 点、須恵器環 1 点が含まれている。それに加えて SL1 の周辺には土器がつぶれた状態で出土しており、土師器甕 1 点、黒色土器壺 1 点、支脚 1 点が出土している。

22-24G 土器集中域 調査区北東部、遺構面から 0.1m 挖り下げた面から土器が集中して出土している区域がある（第 24 図）。面的に掘り下げを行い、結果遺構は確認出来なかったが、古墳時代前期～中期の土器を中心にして古代の土器を含め大量に土器を廃棄したとみられる土器集中域であることがわかった。

2 出土遺物

西原東遺跡では、縄文土器から近世の寛永通宝まで出土している。

（1）縄文時代

SK10 土坑（第 32 図） この遺構から縄文土器の破片 1 点が出土している。縦 4 条の沈線紋が施され、破片のため詳細な時期は不明であるが縄文後期に属すると思われる。後世での覆土への混入の可能性が高い。

（2）古墳時代

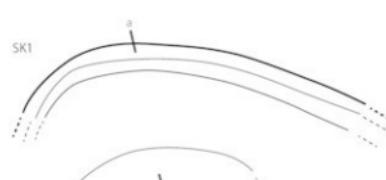
古墳時代の遺構とみられる土坑がある。

SK27 土坑（第 33 図） この遺構からは土師器環・土師器高環・土師器甕底部が出土しているが环と高环については古墳時代中期に属するものとみられる。甕については全体の形状が不明なため断定は出来ないが、33-12・13 については古墳時代中期の可能性が高い。环 33-11 は口唇が外反するタイプで、山形市下柳 A 遺跡 ST3（尾形・小畠 1996）にみられるタイプである。高环 33-11 についても同遺構から出土している高环と同様のタイプであるといえよう。おそらく漆町 13 群併行期の土器とみられる。

SK7 土坑（第 32 図） この遺構からは高环 32-3 の 1 点のみであるが、これも 33-11 と同時期とみられる。

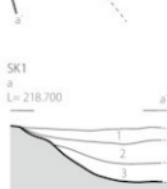
SK21 土坑（第 32 図） この遺構から出土した壺口縁部 32-18、高环环部 32-19 は古墳時代前期のものとみられるが、高环脚部 32-20 は古墳時代中～後期、須恵器甕 32-21 は 9 世紀以降のものとみられる。

22-24G 土器集中域（第 34・35 図） この土器集中域について、古墳時代中期の土器に、古代須恵器が混入している。34-4 の环部は口縁が直行し、比較的身が深く、下方にやや丸みを帯びた稜があり、器壁がやや肥厚している。それらの特徴から 5 世紀代のものと思われる。また 34-6 については环部の口縁がやや外反しながらも直行するタイプではあるが、32-19 と同様のタイプで時期も変わらないと思われる。34-4 ~ 35-3 は土師器の小型丸底甕、甕類とみられ、概ね古墳時代中期とみられる。



SK1	a-a'
1	7.5YR3/3 暗褐色シルト
2	7.5YR3/4 暗褐色シルト
3	7.5YR4/4 褐色シルト

粘性あり
炭化物含む
粘性あり



SK2

a-a'

1	7.5YR2/2 黒褐色シルト	10YR7/8 黄褐色シルト小ブロック含む
2	7.5YR3/2 黒褐色シルト	10YR7/8 黄褐色シルト小ブロック含む
3	7.5YR3/2 黑褐色シルト	10YR7/8 黄褐色シルト小ブロック含む
4	7.5YR2/2 黑褐色シルト	10YR7/8 黄褐色シルト小ブロック含む
5	7.5YR2/2 黑褐色シルト	10YR7/8 黄褐色シルト小ブロック含む
6	7.5YR3/2 黑褐色シルト	10YR7/8 黄褐色シルト小ブロック含む
7	7.5YR3/3 暗褐色シルト	10YR7/8 黄褐色シルト小ブロック含む
8	7.5YR3/3 暗褐色シルト	10YR7/8 黄褐色シルト小ブロック含む

SK3

a-a'

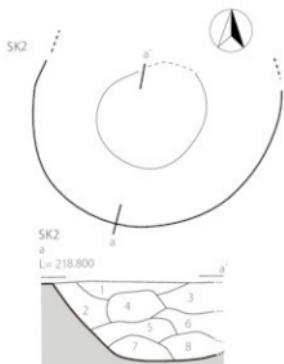
1	7.5YR3/3 暗褐色シルト	粘性あり しまりあり
2	7.5YR3/4 暗褐色シルト	粘性あり しまりあり
3	7.5YR3/4 暗褐色シルト	粘性あり ややしまりあり

SK6

a-a'

1	10YR3/1 黑褐色粘質砂
2	10YR3/2 暗褐色粘質砂
3	10YR3/3 暗褐色粘質砂

10YR6/6 暗褐色土ブロック含む



SK7

a-a'

1	10YR3/1 黑褐色粘質砂
2	10YR3/2 暗褐色粘質砂
3	10YR3/3 暗褐色粘質砂

SK8

a-a'

1	7.5YR4/3 褐色シルト	砂含む 粘性あり
2	7.5YR5/6 明褐色シルト	粘性あり

SK9

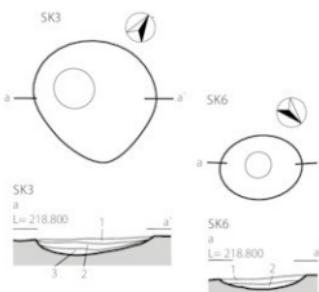
a-a'

1	10YR4/4 褐色シルト	10YR2/1 黑色シルト小ブロック含む
2	7.5YR4/4 褐色シルト	10YR2/1 黑色シルト小ブロック含む
3	7.5YR3/4 褐色シルト	10YR2/1 黑色シルト小ブロック含む

SK10・11

a-a'・b-b'

1	7.5YR3/3 暗褐色微砂質	粘性あり
2	7.5YR4/4 褐色シルト	粘性あり
3	7.5YR3/4 暗褐色シルト	粘性あり
4	7.5YR3/4 暗褐色シルト	10YR2/1 黑色シルト小ブロック含む
5	7.5YR4/3 褐色シルト	粘性あり
6	7.5YR4/3 褐色シルト	粘性あり
7	7.5YR4/3 褐色シルト	粘性あり



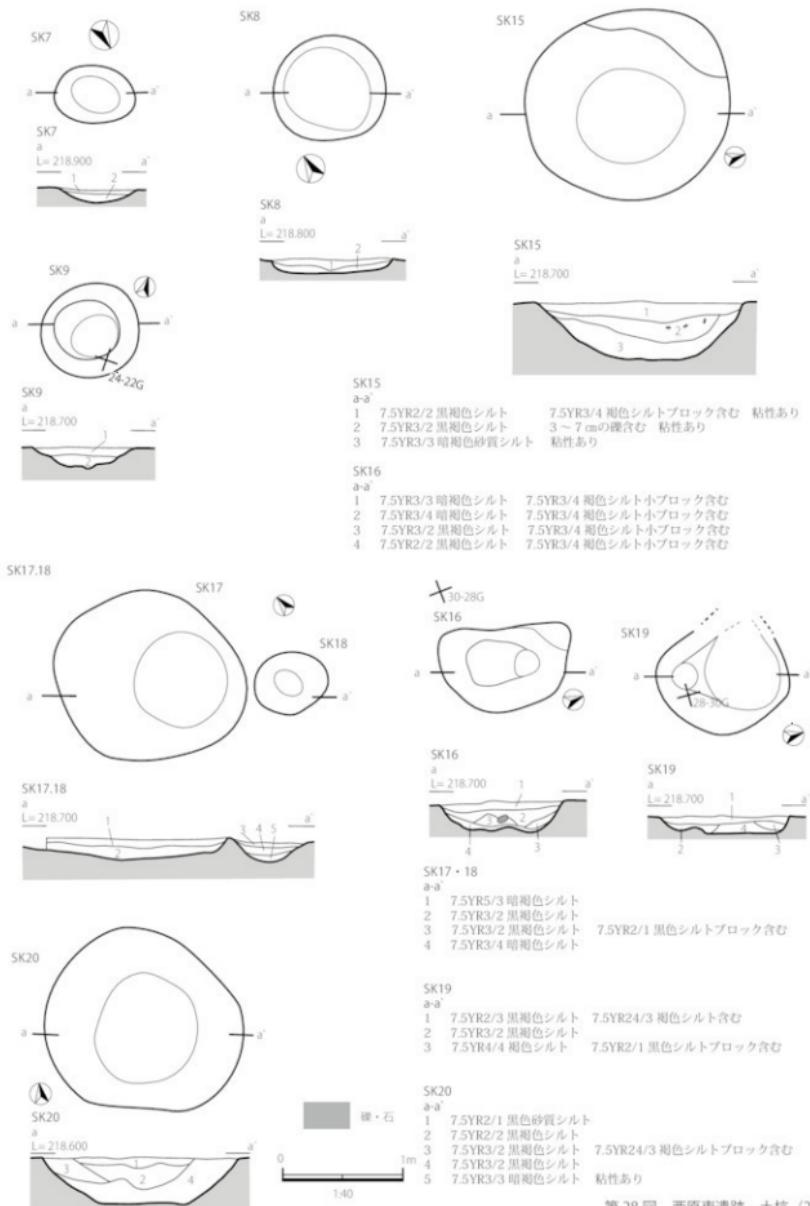
SK5

a-a'

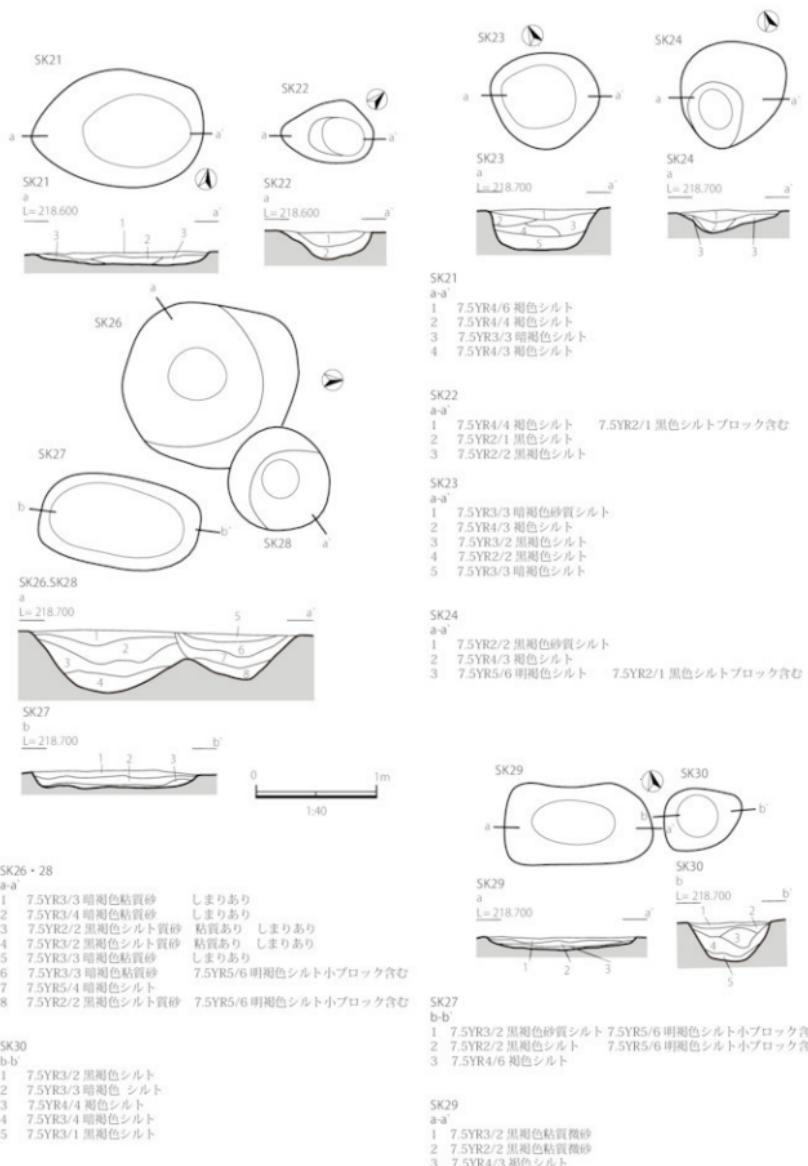
1	10YR3/4 暗褐色シルト	10YR7/8 黄褐色シルト小ブロック含む しまりあり
2	10YR2/3 黑褐色シルト	10YR7/8 黄褐色シルト小ブロック含む しまりあり
3	10YR3/2 黑褐色粘質シルト	10YR7/8 黄褐色シルト小ブロック含む しまりあり
4	10YR3/2 黑褐色シルト	10YR7/8 黄褐色シルト小ブロック含む しまりあり
5	10YR3/3 暗褐色シルト	10YR7/8 黄褐色シルト小ブロック多く含む しまりあり
6	10YR2/3 黑褐色シルト	砂多く含む 粘性やあり



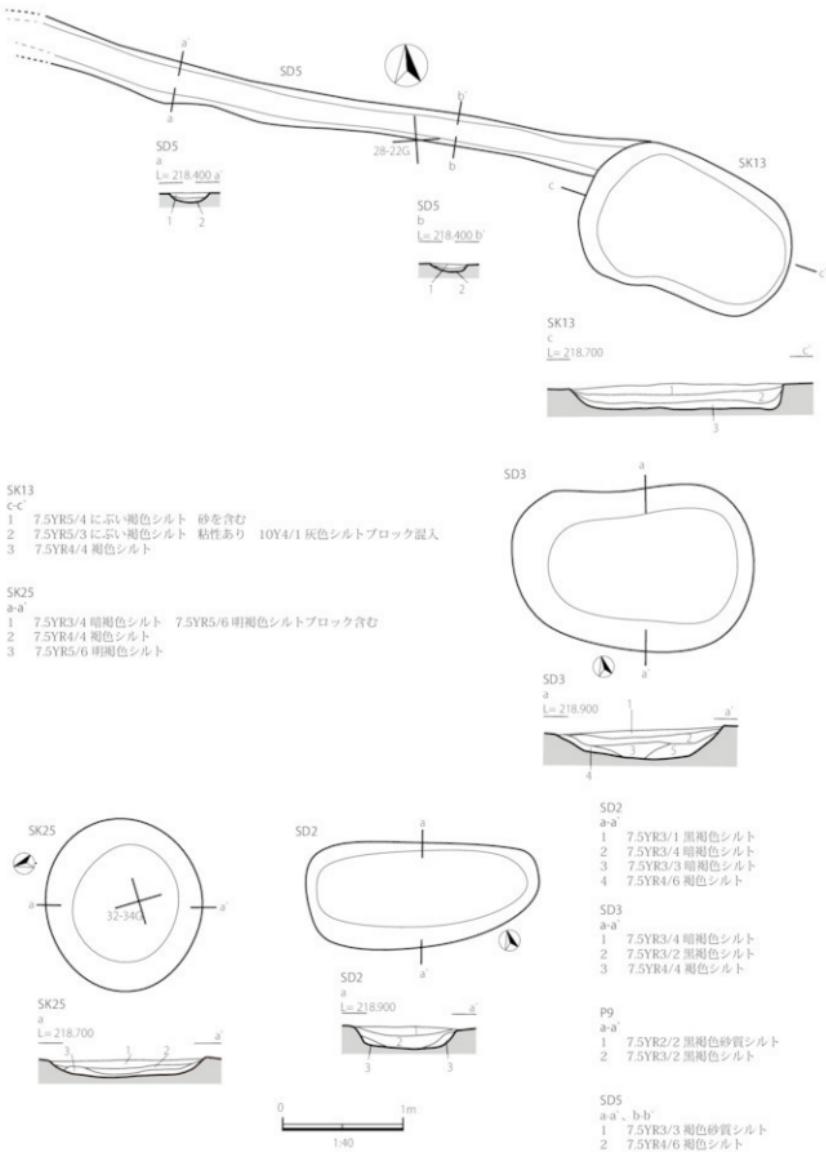
第27図 西原東遺跡 土坑（1）



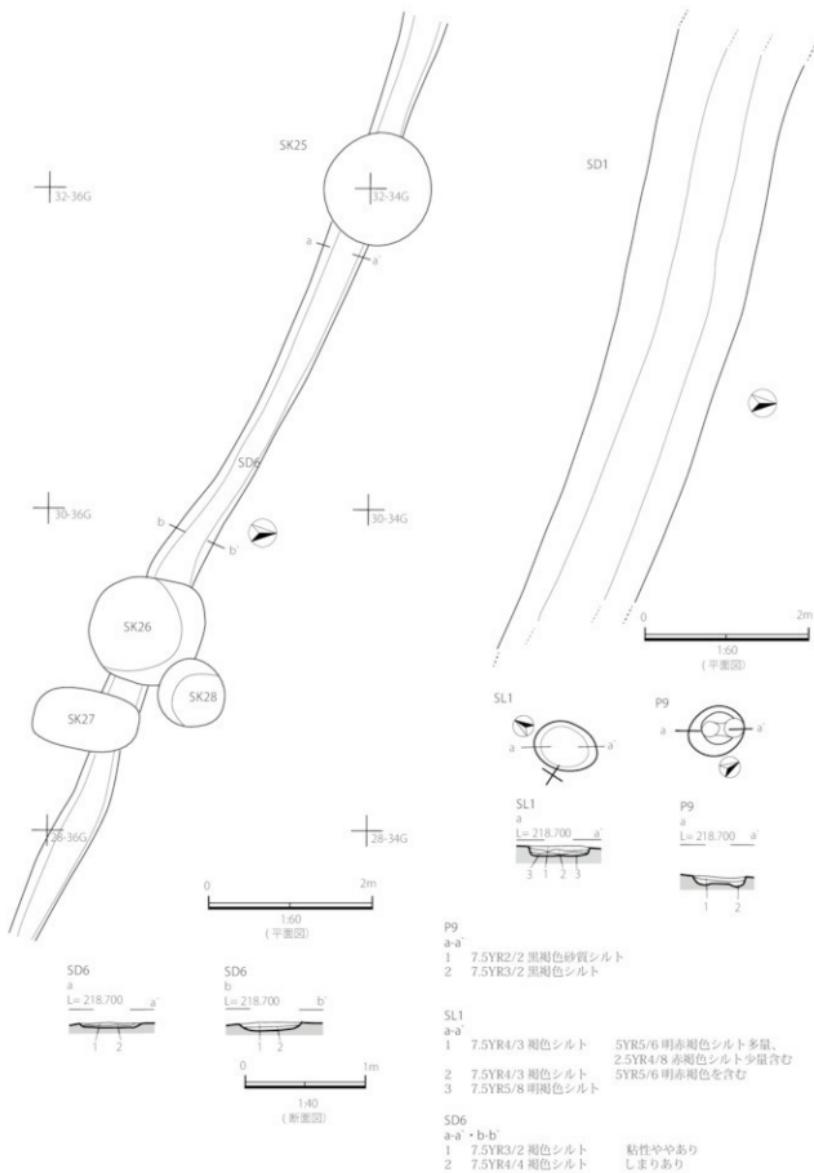
第28図 西原東遺跡 土坑(2)



第29図 西原東遺跡 土坑(3)



第30図 西原東遺跡 土坑・溝



第31図 西原東遺跡 溝・柱穴

35-4～10は土師器环である。これらは下柳A遺跡などに類例を求める古墳時代中期に属するものとみられるが、この時期の环については同時期に様々な類型をもつ环が出土するため（阿部・吉田 2002）本報告での分類は割愛するが、本遺跡では口唇が外反するもの、そして比較的大型なものが多い。また 35-9については底部穿孔の痕跡がみられる。また共伴している須恵器蓋は天井部が丸く高い、体部に三角形の凸帯状の稜が貼りつけられているのが特徴である。南陽市百刈田遺跡 SK13でも類例が出土している（高桑・佐藤ほか 2010）。

その他 遺構外出土土器では、古墳時代中期の高环脚部 35-17～19や単孔の懸底部 35-20などが出土している。石斧 37-17について、粘板岩製の斧の石製模造品とみられる。古墳時代中期頃に属するものであろう。

（3）古代

この遺跡において多くを占めているのは古代の遺物である。

SK16 土坑（第32図） この遺構から出土している須恵器环 32-7は底部回転ヘラ切後に、体部側面をケズリ調整・底部をナデ調整している。9世紀1～2四半期のものとみられる。

SK17 土坑（第32図） この遺構からは須恵器环 3点、須恵器高环 1点、須恵器蓋 2点、黒色土器环 1点、小型甕口縁 1点が出土している。32-8は回転ヘラ切した後ユビナデ調整、32-9～11は回転糸切である。これらは 32-8・9は8世紀第2～3四半期、32-10・11は8世紀第4四半期～9世紀第1四半期に入るとみられる。黒色土器环 32-12に関しては9世紀代のものとみられる。須恵器蓋 32-13・14に関しては8世紀代のものとみられる。特に 32-13は天井部を回転ヘラ切した後にユビナデ調整を行っている。しかし 32-15に関しては古墳時代中期に属するとみられる。

SK20 土坑（第32図） この遺構からは須恵器环 1点と蓋 1点が出土している。須恵器环 32-16は回転ヘラ切後

ユビナデ調整を行っている。やや底径が小さいため9世紀代に属するとみられる。須恵器蓋はやや器高が高いとみられるためやはり9世紀代と思われる。

SK22 土坑（第32図） この遺構からは須恵器環 33-1の一部が出土しているが、破片のため時期決定は難しい。

SK25 土坑（第33図） この遺構からは須恵器环 1点、須恵器小瓶 1点、土師器甕 1点、黒色土器 1点が出土している。須恵器环 33-2は底径が大きく底部回転ヘラ切後にナデ調整を行っている。小瓶 33-3は破片のため詳細は不明である。甕 33-4は底部に木葉痕が残っている。黒色土器环 33-5については無段で底部がやや平らになっている。33-2・5ともに8世紀第1四半期頃の土器の特徴を持つとみられる。

SK26 土坑（第33図） この遺構からは古墳時代後期の脚部 33-7も出土しているが、須恵器环 33-8と須恵器蓋 32-9が出土している。33-8は回転ヘラ切であるが破片のため断定は難しいが、須恵器 2点は9世紀第1四半期の範疇に収まるであろう。

SD1 溝跡（第33図） この遺構からは高台环の2点 33-16・17が出土している。底部は回転糸切であるものの、底径は比較的大きい。9世紀前半に属すると思われる。この2点の特徴として底部に沿って体部を意図的に打ち欠いている痕跡が見られる点である。

SD2 溝跡（第33図） この遺構からは須恵器环の2点 33-18・19が出土している。2点とも回転ヘラ切で、33-18は底部の切離し後ナデ調整している。32-18は8世紀第3～4四半期、19は8世紀末～9世紀初頭に属すると思われる。

SD3 溝跡（第33図） この遺構からは土師器甕 33-20の口縁部から体部にかけての破片が出土しているが、時期などの詳細は不明である。

SD6 溝跡（第33図） この遺構からは高环脚部 33-21

が出土している。形状から7世紀末～8世紀初頭のものと思われる。

SL1 爐跡（第33図） この遺構からは古墳時代前期のものと思われる壺口縁部33-22とともに、須恵器環33-23が出土している。底部は回転糸切であるが、やや底径が大きいため9世紀第1四半期に属するものと思われる。内部にはススが付着している。

またSL1の周辺には土器がつぶれた状態で出土している。土師器壺34-1は口縁部は欠損しているものの体部はほとんど残存しており、体部が細身で胴長である。支脚34-2はコップ型あるいは筒型とみられるがやや肉厚で輪積み痕が明確に残り、被熱による使用痕も残っている。遊佐町吹浦遺跡（渋谷1984）・筋田遺跡（阿部1993）・東田遺跡（齋藤1991）に出土例があり、官衙関係の遺跡から出土することが多いとみられている（渋谷・吉田2001）。黒色土器環34-3の1点が出土している。非ロクロ内外面ミガキである。高畠町堂の下遺跡ST1（1994伊藤・氏家）、高畠町山の神1号墳（渋谷1987）に出土例が見られることから8世紀後半に属するとみられる。

遺構外出土遺物 これらについて、その多くが須恵器環で占められる。環でみた場合、底部回転ヘラ切環が10点に対し回転糸切底部環が4点、という出土割合となっている。また8世紀後半にその出現がほぼ限定するとされる、金属器を模した稜塊36-19～22（渋谷・高桑2004）が一定数出土している。それらのことからこの遺跡から出土する須恵器環について、古代でも奈良時代的様相の印象を与えられる。なお稜塊は南陽市内の場合、西中上遺跡（氏家・吉田2007）・中落合遺跡（氏家・高桑2008）などで出土している。

須恵器環切離し後調整について、10点がユビナデやヘラケズリなどで調整を行い、36-6は体部側面もケズリ調整を施している。また注視したいのは36-10で底部に細い器具を使用して焼成前穿孔しているが、その目的は不明である。時期としては8世紀第4四半期から9世紀第1四半期ものとみられる。加えて底部の周囲を打ち欠いているのも特徴的である。

高台環は36-12～18について、すべて回転糸切底部

である。36-12は底部を焼成後穿孔したと思われる痕跡がある。8世紀第4四半期～9世紀第3四半期と時期幅がある。36-19～22は稜塊に分類されるであろう。8世紀第4四半期～9世紀第1四半期のものと考えられる。

土師器36-23は8世紀後半、黒色土器環36-24・25は7世紀末～8世紀前半の範疇に収まるであろう。

蓋について、須恵器は37-1の1点と37-2～4の3点が出土している。須恵器は8世紀末～9世紀初頭とみられ、土師器はドーム型の天井をもったタイプであり、時期は不明である。

壺についてはほとんどが破片のため時期は不明である。しかしこの遺跡の特徴として、37-15・16のように土師器底部を円盤状に打ち欠いたものが出土している。使用目的は不明である。

（4）中世

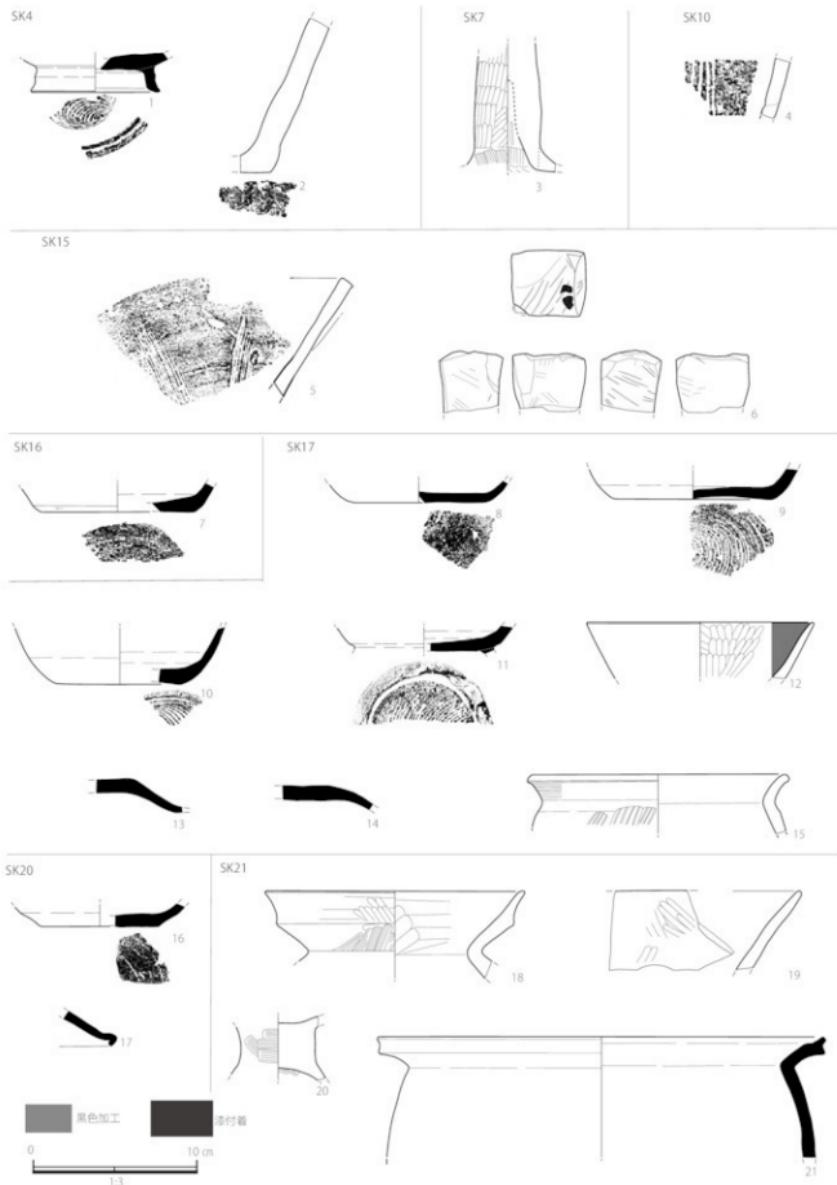
SK26 土坑（第33図） この遺構から中国製青磁碗の一部が出土しているが、被熱しているためかやや色が飛び、表面の釉薬が劣化している。

3 小 結

西原東遺跡は旧吉野川河川道の自然堤防上に位置している。西原東遺跡では、縄文土器から近世の寛永通宝までの遺物は出土しているが、実際遺物の出土状況から見て、古代を中心とする遺構で構成された遺跡であり、それに加えて古墳時代遺構と遺物も散見される。

遺構 最初に遺構から見ていく。土坑・柱穴・溝で遺跡が構成されているが、それからいくつかの掘立柱建物跡や塀などを見出すことができる。

まずはSD1・SD5・SB1・SB2がほぼN-15°-E方向で配置されていることである。ただしこれらの遺構は極めて遺物が少なく、出土遺物の年代にもばらつきがあり同時代の遺構と断定することはやや難しい。特にSB1について4基の土坑がいずれも1.5～2mと大型であり、掘立柱建物跡とした場合大型建築物となるであろうが、それ以上柱穴となりうる遺構確認が無いため詳細は不明である。

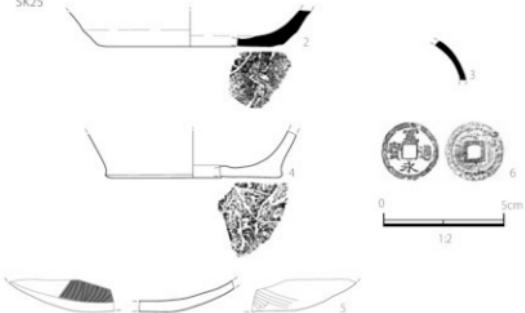


第32図 西原東遺跡 出土遺物(1)

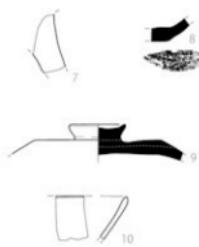
SK22



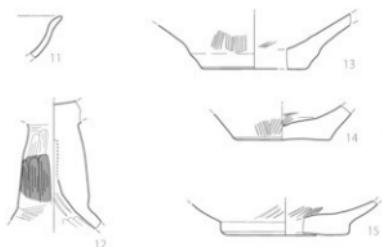
SK25



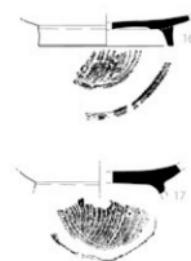
SK26



SK27



SD1



SD2



SD3



SD6



SL1



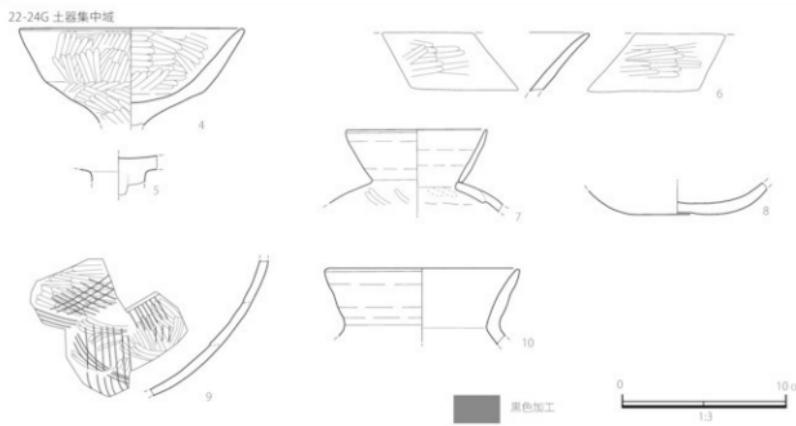
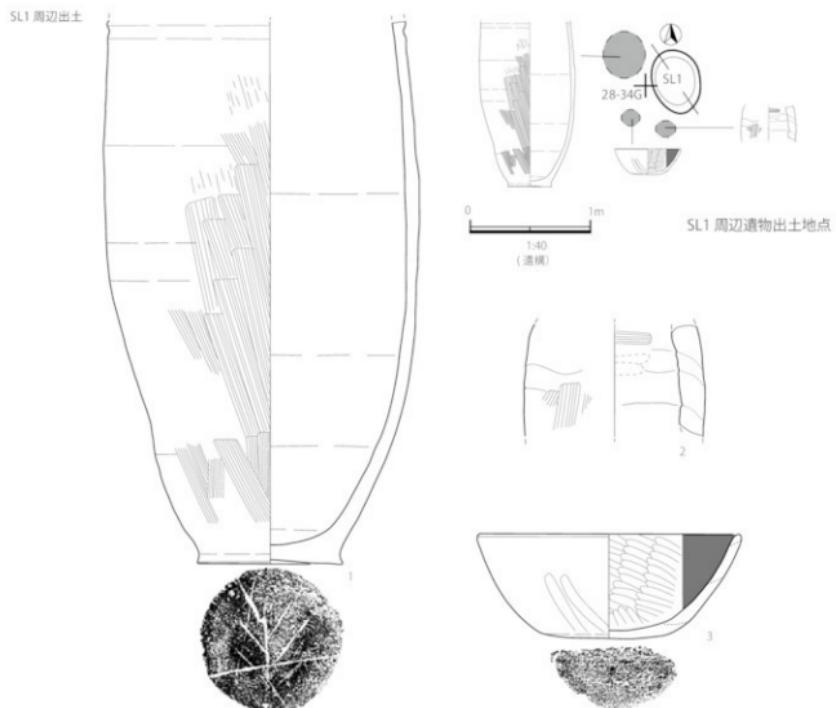
0
1:3
10 cm

赤色加工

黒色加工

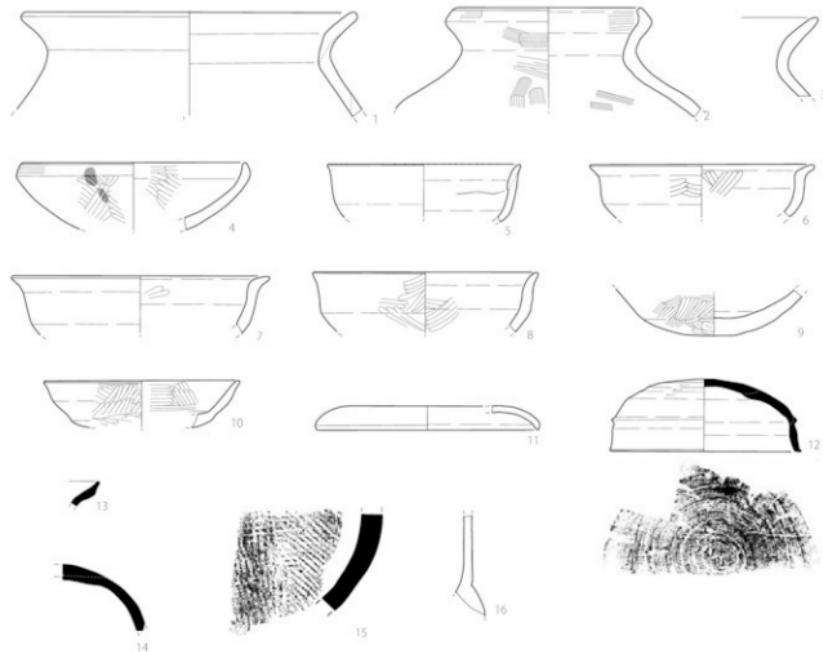
保付着

第33図 西原東遺跡 出土遺物（2）

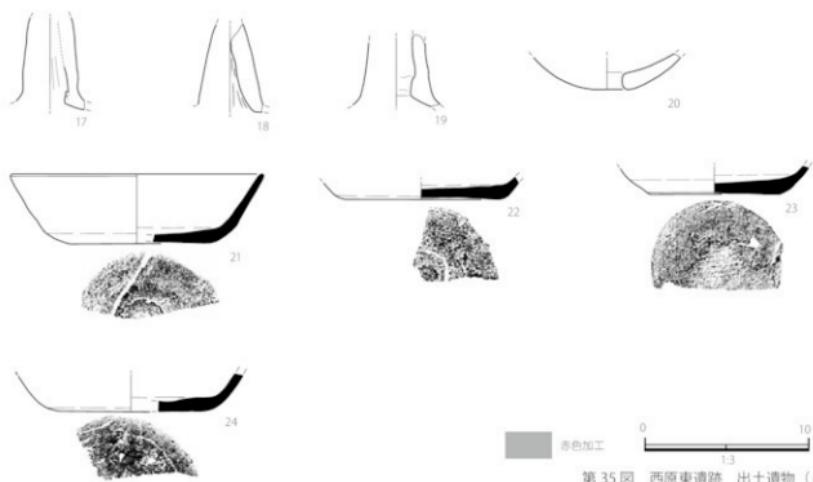


第34図 西原東遺跡 出土遺物 (3)

22-24G 土器集中域

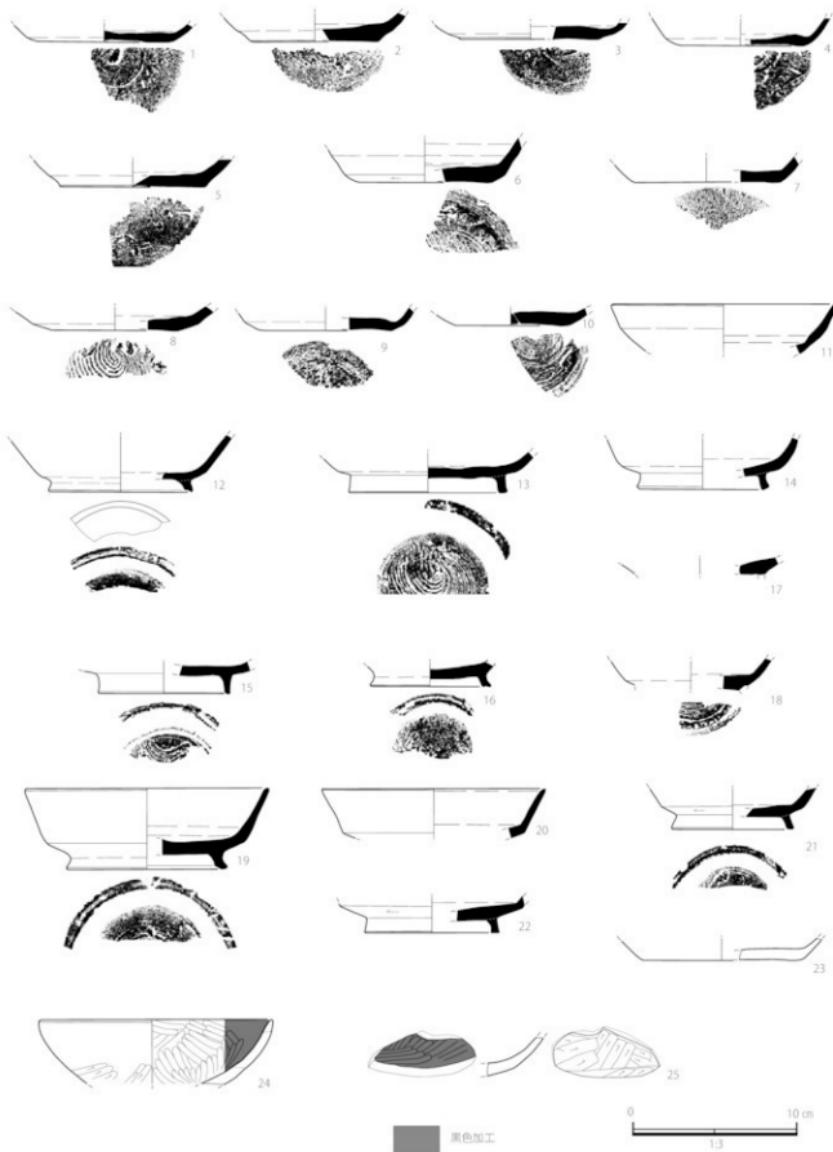


遺構外出土遺物



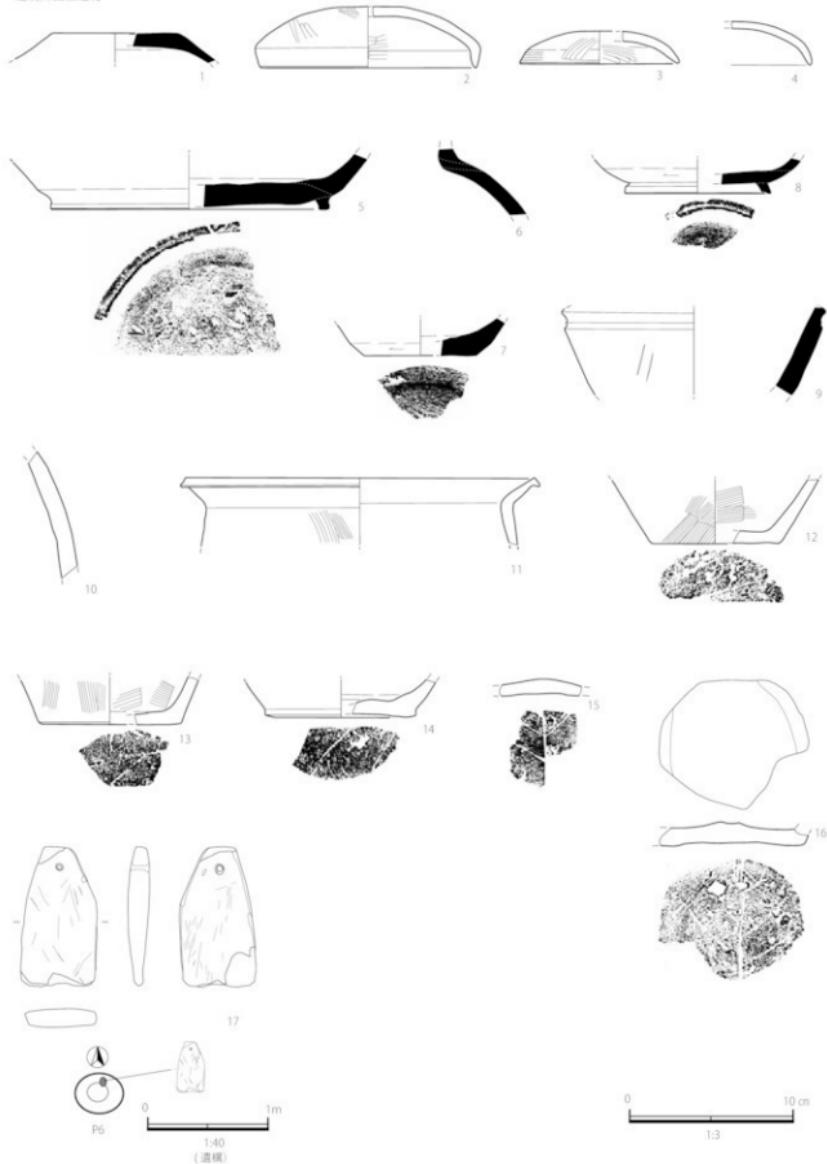
第35図 西原東遺跡 出土遺物(4)

遺構外出土遺物



第36図 西原東遺跡 出土遺物 (5)

遺構外出土遺物



第37図 西原東遺跡 出土遺物（6）

表5 西原東遺跡 遺物観察表（1）

回復 種別	器種	登録 計測値 (mm)				調整技法		出土地点	備考		
		番号	番号	口径	底径	高さ	器厚	外 面	内 面	底 部	
1 漆器	高台环	-	-	80	-	9	クロ	ロクロ	回転系切	SK4	
2 陶器	甕	-	-	-	-	14	ハケメ	ハケメ	ケズリ	SK4	
3 土師器	高环	-	-	-	-	17	ミガキ	ハケメ	-	SK7	
4 黒色土器	不明	-	-	-	-	ナデ	ナデ	-	SK10	沈線紋	
5 陶器	すり鉢	-	-	-	-	8	ロクロ	ロクロ	-	SK15	外被熱度著しい
6 石製品	砾石	-	-	-	-	42	36	-	-	SK15	少量付着
7 漆器	环	-	-	(84)	-	7	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	SK16	
8 漆器	环	-	-	80	-	6	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	SK17	底部ヘラ切→指ナテ調整
9 漆器	环	-	-	98	-	7	ロクロ	ロクロ	回転系切	SK17	
10 漆器	环	-	-	(76)	-	5	ロクロ	ロクロ	回転系切	SK17	
11 漆器	高台环	-	-	-	-	7	ロクロ	ロクロ	回転系切	SK17	
12 黒色土器	环	-	(141)	-	-	5	不明	ミガキ	-	SK17	外黒磨滅著しい
13 漆器	甕	-	-	-	-	9	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	SK17	上部切離部ナテ調整
14 漆器	甕	-	-	-	-	9	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	SK17	
15 土師器	小型甕	-	(163)	-	-	6	ハケメ	ハケメ	-	SK17	使用痕有
16 漆器	环	-	-	(73)	-	5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	SK20	底部ヘラ切→調整消
17 陶器	甕	-	-	-	-	5	ロクロ	ロクロ	-	SK20	
18 土師器	甕	-	(162)	-	-	8	ミガキ	ハケメ	-	SK21	
19 土師器	高台环	-	-	-	-	6	ハケメ	ミガキ	-	SK21	
20 土師器	高环	-	-	-	-	24	ハケメ	-	-	SK21	胎土に赤色粒・砂粒多量混入
21 漆器	甕	-	(280)	-	-	7	ロクロ	ロクロ	-	SK21	
1 漆器	甕	-	-	-	-	16	タスキ→ケズリ	ハケメ	ケズリ	SK22	丁寧な調整
2 漆器	环	-	-	(104)	-	7	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	SK25	底部ヘラ切→切離調整
3 漆器	甕	-	-	-	-	3	ロクロ	ロクロ	-	SK25	胎土薄手 小型舌か
4 土師器	甕	-	-	(110)	-	6	ナデ	ハケメ	木葉痕	SK25	
5 黒色土器	环	-	-	-	-	6	ミガキ	ミガキ	-	SK25	
6 古鏡	寛永通宝	104	(138)	-	-	2	-	-	-	SK25	
7 土師器	高环	-	-	-	-	-	不明	不明	-	SK26	
8 漆器	环	-	-	-	-	5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	SK26	
9 漆器	甕	-	-	-	-	-	ロクロ	ロクロ	-	SK26	
10 中空製青磁	碗?	-	-	-	-	4	ロクロ	ロクロ	-	SK26	被熱痕あり・釉変定色
11 土師器	壇	-	-	-	-	3	不明	不明	-	SK27	磨滅跡著
12 土師器	高环	-	-	-	-	-	ケズリ	ミガキ	-	SK27	脚部空洞 表面赤彩有
13 土師器	甕	-	-	(64)	-	7	ハケメ	ハケメ	不明	SK27	使用痕有
14 土師器	甕 or 甕	-	-	(30)	-	7	ハケメ	ハケメ	(磨滅)	SK27	底部使用による磨滅
15 土師器	甕 or 甕	-	-	80	-	5	ハケメ	ハケメ	ケズリ	SK27	
16 漆器	高台环	-	-	(84)	-	4	ロクロ	ロクロ	回転系切	SD1	打欠割か?
17 漆器	高台环	-	-	-	-	7	ロクロ	ロクロ	回転系切	SD1	打欠割か?
18 漆器	环	-	(140)	(82)	39	5	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	SD2	底部ヘラ切→ナテ調整
19 漆器	环	-	-	(78)	-	8	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	SD2	
20 土師器	甕	-	-	-	-	7	ハケメ	ハケメ	-	SD3	
21 土師器	高环	-	-	-	-	10	ミガキ	ナデ	-	SD6	
22 土師器	甕	-	-	-	-	7	ハケメ	不明	-	SL1	内面火はね著しい
23 漆器	环	-	-	(70)	-	4	ロクロ	ロクロ	回転系切	SL1	底部外周ケズリ・内部スス付着
1 土師器	甕	RP9	-	(90)	-	8	ハケメ	不明	木葉痕	SL1付近	
2 土師器	支脚	RP11	-	-	-	16	ハケメ	ハケメ	指ナテ	SL1付近	被熱痕頭著
3 黒色土器	环	RP1	166	78	115	6	ナデ	ミガキ	不明	SL1付近	磨滅頭著
4 土師器	高环	-	-	142	-	10	ミガキ	ミガキ	-	22-24G	
5 土師器	高环	-	-	-	-	8	不明	不明	-	22-24G	脚部と脚部のジョイント凸部
6 土師器	高环	-	-	-	-	5	ミガキ	ミガキ	-	22-24G	高环の曲部 内面に赤色残る
7 土師器	丸底甕	-	-	-	-	7	ロクロ	ナデ	-	22-24G	口縁部磨滅著しい 回上復元
8 土師器	丸底甕	-	-	28	-	7	不明	不明	ケズリ	22-24G	
9 土師器	丸底甕	-	-	-	-	5	ミガキ→沈線紋	ハケメ?	-	22-24G	
10 土師器	甕	-	(120)	-	-	7	不明	不明	-	22-24G	磨滅頭著
1 土師器	甕	-	(220)	-	-	7	不明	不明	-	22-24G	
2 土師器	甕	-	(114)	-	-	8	ハケメ	ハケメ	-	22-24G	
3 土師器	甕	-	-	-	-	7	(磨滅)	(磨滅)	-	22-24G	磨滅・使用痕頭著

表 6 西原東遺跡 遺物観察表（2）

回収 種別	種類	登録番号	計測値 (mm)				調整接法	出土地点	備考
			口径	底径	高さ	厚さ			
4 土師器	环	-	(140)	-	-	6	ミガキ	ミガキ	-
5 土師器	环	-	(120)	-	-	5	不明	不明	-
6 土師器	环	-	(140)	-	-	6	ミガキ	ミガキ	-
7 土師器	环	-	(160)	-	-	6	不明	ミガキ	-
8 土師器	环	-	(140)	-	-	6	ミガキ	ミガキ	-
9 土師器	环	-	-	-	26	8	ミガキ	ミガキ	ケズリ
10 土師器	有段环	-	(122)	-	-	5	ミガキ→ケズリ	ミガキ→ナデ	-
11 土師器	蓋	-	(138)	-	15	4	不明	不明	-
12 漆器器	蓋	-	(120)	-	45	4	クロ	クロ	回転ヘラ切
13 漆器器	蓋	-	-	-	5	クロ	クロ	-	22-24G 小型漆口縁部
14 漆器器	蓋	-	-	-	5	クロ	クロ	-	22-24G 円錐閉接法
15 漆器器	横瓶	-	-	-	16	タダキ	アテ直?	-	22-24G 内面に自然釉多量
16 漆器器	支脚?	-	-	-	5	ハケメ	ハケメ	-	22-24G 雜なつくり
17 土師器	高环	-	-	-	10	不明	不明	-	遺模外
18 土師器	高环	-	-	-	10	不明	ナデ	-	遺模外
19 土師器	高环	-	-	-	12	不明	不明	-	遺模外
20 土師器	單孔瓶	-	-	20	-	10	不明	不明	遺模外
21 漆器器	环	-	(156) (94)	38	4	クロ	クロ	回転ヘラ切	遺模外 使用痕・磨滅頭著
22 漆器器	环	-	-	(100)	-	5	クロ	クロ	遺模外 底部切離後コビナデ調整
23 漆器器	环	-	-	82	-	4	クロ	クロ	遺模外 底部切離後ケズリ 打欠割痕
24 漆器器	环	-	-	(90)	-	5	クロ	クロ	遺模外 底部切離後ヘラケズリ調整
1 漆器器	环	-	(80)	-	4	クロ	クロ	回転ヘラ切	遺模外 使用痕・磨滅頭著
2 漆器器	环	-	-	(70)	-	7	クロ	クロ	遺模外 底部切離後ヘラナデ調整
3 漆器器	环	-	-	(86)	-	4	クロ	クロ	遺模外 底部切離後ヘラ切
4 漆器器	环	-	-	(74)	-	4	クロ	クロ	遺模外 底部切離後ヘラナデ調整
5 漆器器	环	-	-	(90)	-	7	クロ	クロ	遺模外 底部切離調整 打欠割痕
6 漆器器	环	-	-	(84)	-	6	クロ	クロ	遺模外 底部切離有
7 漆器器	环	-	-	(90)	-	6	クロ	クロ	遺模外 底部切離後ケズリ 打欠割痕
8 漆器器	环	-	-	(80)	-	6	クロ	クロ	遺模外 底部切離有
9 漆器器	环	-	-	(80)	-	6	クロ	クロ	遺模外 底部切離後ヘラナデ調整
10 漆器器	环	-	-	(70)	-	6	クロ	クロ	遺模外 底部に貫通孔有(焼成前穿孔)
11 漆器器	环	-	(140)	-	-	7	クロ	クロ	-
12 漆器器	高台环	-	-	(90)	-	5	クロ	クロ	回転糸切 遺模外 底部中央に穿孔痕
13 漆器器	高台环	-	-	(98)	-	5	クロ	クロ	遺模外
14 漆器器	高台环	-	-	(82)	-	5	クロ	クロ	遺模外
15 漆器器	高台环	-	-	(82)	-	5	クロ	クロ	遺模外 打欠割痕
16 漆器器	高台环	-	-	(75)	-	7	クロ	クロ→調整痕	遺模外 底部切離調整 打欠割痕
17 漆器器	高台环	-	-	-	-	7	クロ	クロ	遺模外 底部中央に丁寧な穿孔痕
18 漆器器	高台环	-	-	-	-	4	クロ	クロ	遺模外
19 漆器器	矮碗	-	150	100	50	3	クロ	クロ	回転糸切 遺模外
20 漆器器	矮碗	-	138	-	-	4	クロ	クロ	-
21 漆器器	矮碗	-	-	(76)	-	5	クロ	クロ	回転糸切 遺模外
22 漆器器	矮碗	-	-	(42)	-	6	クロ→ケズリ	クロ	-
23 土師器	环	-	-	100	-	4	クロ	クロ	回転ヘラ切 遺模外 磨滅頭著
24 黄色土器	环	-	(140)	-	-	6	ケズリ	ミガキ	-
25 黑色土器	环	-	-	-	-	7	ケズリ	ミガキ	-
1 漆器器	蓋	-	-	(76)	-	5	クロ→ケズリ	クロ	-
2 土師器	蓋	-	(134)	-	38	7	ミガキ	ミガキ	-
3 土師器	蓋	-	100	30	20	6	ミガキ	ミガキ	-
4 土師器	蓋	-	-	-	-	5	不明	不明	遺模外 磨滅頭著
5 漆器器	大型蓋	-	(182)	-	10	クロ	クロ	ナデ	遺模外
6 漆器器	蓋	-	-	-	-	クロ	クロ	-	遺模外 体部斜切り
7 漆器器	蓋	-	-	70	-	8	クロ→ケズリ	クロ	回転糸切? 遺模外 切離後調整
8 漆器器	小型蓋	-	-	(90)	-	6	ケズリ	クロ	回転糸切 遺模外 底部切離調整
9 漆器器	鉢類?	-	-	-	-	11	クロ	クロ	-
10 土師器	蓋	-	-	-	-	10	ハケメ	不明	- 磨滅頭著

表7 西原東遺跡 遺物観察表（3）

回数	種別	器種	登録番号	計測値 (mm)				調整法		出土地点	備考
				口径	底径	高さ	壁厚	外面	内面		
11	土師器	甕	-	(124)	-	-	7	ハケメ	ハケメ	-	遺構外
12	土師器	甕	-	-	(40)	-	7	ハケメ	ハケメ	木葉痕	遺構外
13	土師器	甕	-	-	(90)	-	8	ハケメ	ハケメ	木葉痕	遺構外
37	14-15	甕	-	-	(92)	-	9	ハケメ	ハケメ	木葉痕	遺構外
	15	土師器	甕	-	-	-	10	-	ハケメ	木葉痕	遺構外 円盤状整形 内面に焼成後加工痕
	16	土師器	甕	-	-	-	12	-	-	木葉痕	遺構外 円盤状に整形
	17	石器	石斧	-	87	48	12	-	-	-	P6f1 粘板岩製 玉斧

またSB4としたSK24・28・30なども掘立柱建物跡の可能性が考えられるものの、それに対応する柱列が検出されていないため、断定は出来ない。しかし、この柱列の軸方向がほぼ真北を向いていることは注目したい。古代郡山遺跡群周辺で条里制が施行されていたとすれば、その規格に従って造られた建設物の可能性も考えられよう。

そのことから考えて、古代の掘立柱建物（群）が建てられた時期は2時期あったとみられる。

遺物 続いて遺物について述べる。大別すると古墳時代前～中期と、古代（7世紀末～9世紀代）に分けることが出来る。なお土師器については残存状態が良いとはいえない。

まずは古墳時代について、遺構出土の土器については古墳時代中期の属するとみられるものが大半である。しかしながら、ほとんどの遺構で時期差がある土器が混入している状態にある。

ところで注目すべき点としてあげられるのが22-24G土器集中域についてである。遺物は集中して出土するものの遺構を確認することは出来なかった。ここから壺・甕類と壺類が、一部重ねられるように出土している。壺は叩壊され、壺も一部底部穿孔されている。そのため意図的に土器を破壊し、祭祀的意味で廃棄した可能性が考えられる。

古代の土器については、7世紀末～9世紀代の範疇に取るとみられる。なかでも特徴的なのは、須恵器壺の底部切離し後調整がなされているものが多く出土していることである。底部切離し後、ユビナデ・ヘラナデ・手持ちヘラケズリ・体部側面ケズリなどの調整がなされているものが他の遺跡に比べて格段に多い。またこの調査

区から出土する須恵器は、多少底部切離しは併存するが、比較的底径が大きい段階（9世紀第1四半期）から回転系切の切離しを取り入れている様相が窺える。

また沢田遺跡でもみられた打ち欠きのほかに、底部の中央に丁寧に穿孔した痕を持つ須恵器環36-17・21が出土しており、この底部穿孔も何らかの意味を持つと思われる。また、土師器甕の底部を円盤状に丁寧に打ち欠いた事例37-16も見られる。

この遺跡での古代における一括資料などは確認されていないが、土器の様相から8世紀第4四半期～9世紀第3四半期が主体となる時期とみられる。なお、南陽市内における同時期の遺跡としては西中上遺跡（氏家・吉田2007）・中落合遺跡（氏家・高桑2008）があげられる。

また中世のすり鉢や中国製青磁の破片などが出土しているが、明確な中世に属するとみられる遺構は確認できなかった。

3 沢口遺跡

沢口遺跡は南陽市JR赤湯駅から南南西方向、直線距離にして約1.2km南に位置する遺跡である（第2図）。住宅街及び畠地に囲まれた場所に所在する。南北約4m東西約6mの小規模調査区であるがこの調査では文化層2面を調査している。旧吉野川自然堤防に隣接する後背湿地内に立地する。

1 検出遺構

文化層第I層では溝4基、土坑5基、ピット4基、墓坑1基が確認、第II層では土坑6基、ピット21基、井戸1基が確認されている。文化層第I層は基本層序のIV層、文化層第II層はV層に相当する。

文化層第I層

SP1 ピット（第39図） この遺構は調査区西側に位置する。直径0.2m深さ0.2m、SP2は直径0.3m深さ0.2m、円形で床面の平坦なU字型の遺構の形をしている。遺構の断面には柱痕が確認出来、床面には礎石として使用されたとみられる礎が据えられている。

SD3 溝跡（第39図） この遺構は不整形なL字型で調査区西半に位置する。溝幅0.06～0.5m、深さ0.05m、溝形は緩やかなU字型を呈している。覆土は自然堆積とみられる。遺物の出土はない。

SD4 溝跡（第39図） この遺構はL字型で調査区中央に位置する。溝幅は0.3～0.7m。深さ0.1m、溝形はやや不整形ながらも緩やかなU字型を呈している。覆土は自然堆積とみられる。遺物の出土はない。

SD5 溝跡（第39図） この遺構はSD4西隣に位置する。長さ1.3m、溝幅0.05～0.3m、常に浅い溝である。遺物の出土はない。

SD6 溝跡（第39図） この遺構は調査区西半に位置する。溝幅は0.5～0.7m。深さ0.05m、溝形は緩やかなU字型を呈している。覆土は自然堆積とみられる。遺物

の出土はない。

SK8・9 土坑（第39図） この遺構は調査区中央に位置する。SP8は直径0.4m深さ0.1m、SP9は直径0.5m深さ0.2m、SP8がSP9を切り、SP9がSP8より古いことが窺える。それぞれ円形で床面の平坦なU字型の遺構の形をしているとみられる。遺構の断面には柱痕が確認出来る。

SK10 土坑（第39図） この遺構は調査区中央に位置する。直径0.5m深さ0.2m、S円形で床面の平坦なU字型の遺構の形をしている。遺構の断面には柱痕が確認出来る。

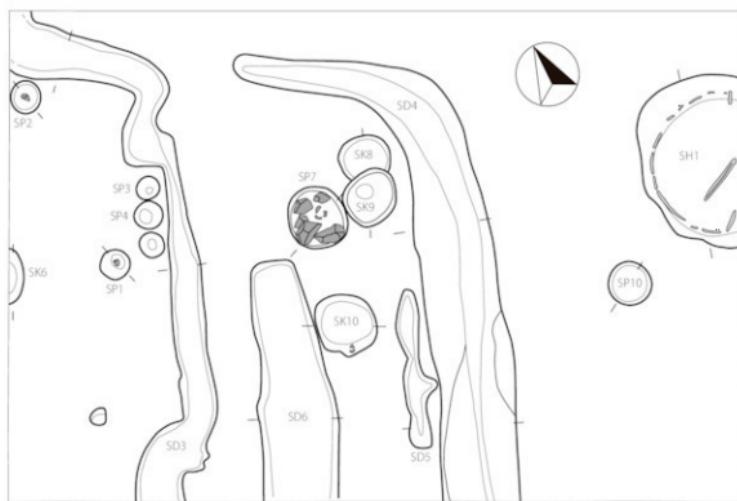
SP7 ピット（第39図） この遺構は調査区中央に位置する。直径0.5m深さ0.2m、円形で床面の平坦なU字型の遺構の形をしている。遺構の断面には柱痕が確認出来る。また遺構底面には礎が多量に据えられていることから柱の礎石及び根固め石として使用された礎が残存していると思われる。

SP10 ピット（第39図） この遺構は調査区東に位置する。直径0.3m深さ0.3m、円形で床面の平坦なU字型の遺構の形をしている。遺構の断面には柱痕が確認出来る。

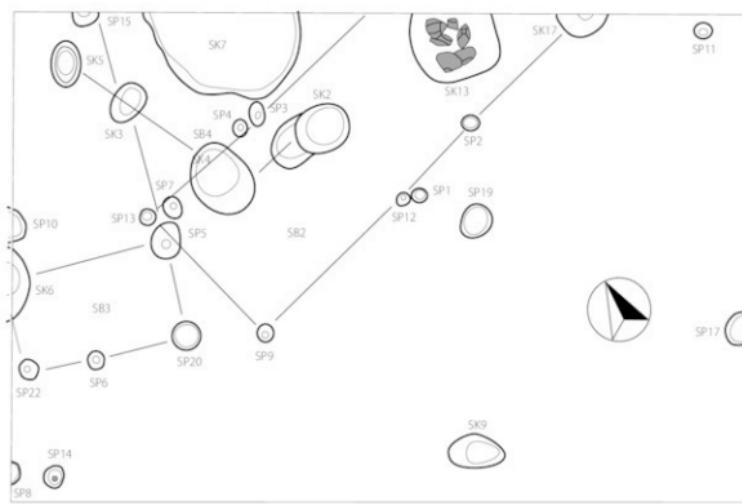
SH1 墓坑（第39図） この遺構は調査区東に位置する。直径1.4m深さ0.4m、円形で床面の平坦な箱型の遺構の形をしている。遺構からは遺構床面とほぼ同じ直径1.1mの桶が出土している。縦に並ぶ側板と^{カバ}、底板が出土していることから、おそらく19世紀代の桶状木棺（早桶）で土葬を行った墓坑とみられる（押切・多田ほか2003）。

文化層第II層

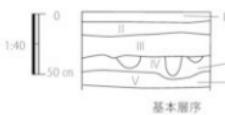
SB2（第40図） 捩立柱建物跡 この遺構は確認出来的柱穴6基（SP3・SP13・SP9・SP12・SP2・SK17）から構成された東西3間×南北1間の擗立柱建物痕であると考えられる。SP17以外の柱穴は直径0.1m、深さ0.1mほ



文化層第Ⅰ層



文化層第Ⅱ層



基本層序



第38図 沢口遺跡遺構配置図・基本層序

どの極めて小さな柱穴でU字型を呈している。断面に柱跡は確認出来ない。SK17のみ直径0.4m、深さ0.2m、箱型を呈し、土層断面には柱痕がみられる。建物軸はN-65°-Eの方向である。SK17については他の柱穴と様相が違うため、SB2に属するかは更なる見当が必要である。

SB3（第40図）掘立柱建物跡 この遺構はSB3は検出された7基のピット（SP15・SK3・SP5・SP20・SK6・SP22・SP14）から構成される、東西1間×南北3間の側柱の掘立柱建物跡と思われる。建物軸はN-5°-Eの方向を向く。またSP6もSB3を構成するピットの1基の可能性はないとは言えない。概ね直径0.2mから0.4m、深さ0.1mの小型ピットで、SP15・SP20・SP22・SP6には土層断面に柱痕があり、SP22は木柱が残っている。建物北側にやや大きな0.3m以上の柱穴が偏っていることから、建物本体を構成するのはSP15・SK3・SP5・SK6で、0.2mほどの南側SP20・SP6・SP22・SP14は細めの庇柱と推測出来るのではないだろうか。

SB4（第40図）掘立柱建物跡 この遺構は3基（SK2・SK4・SK5）の土坑で構成される東西1間×南北2間の掘立柱建物跡と考えられる。SK2は箱型の遺構形を、SK5はU字型の遺構形を呈する。SK2の遺構断面については柱痕が残る可能性はある。建物軸はN-60°-Eの方向を向く。

SK9土坑（第40図） この遺構は長径0.4mの楕円形、深さ0.1mの浅いレンズ状遺構である。覆土も自然堆積とみられ、遺構から遺物は出土していない。

SP11ピット（第40図） この遺構は直径0.2mの円形、深さ0.1mのU字型を呈した遺構である。柱穴の可能性は高い。

SP19ピット（第40図） この遺構は直径0.3mの不整形、深さ0.3mの箱型を呈した遺構である。断面には柱痕が明瞭に残るために柱穴とみられる。

SK7土坑（第39図） この遺構はその半分近くが遺構

外にあるため、直径1.2mの円形と思われ、深さも明確ではないが1.8m程度とみられる。遺構内部には直径0.3m、長さ1.5mの木柱が残存していた。遺構の覆土上層には礫が充填されているため、木柱の根固めとして利用されていたと思われる。この遺跡内で最も掘方が大きく、大型建築物の柱とみられるが、これに対応する柱穴及び木柱はこの調査では発見されていない。

SK13土坑（第40図） この遺構は調査区北端にあり、南半のみの検出である。直径0.8m、深さ0.3mであるが削平された可能性はある。遺構には多量の礫が充填され、その下床面直上からは木片が散かれているような状態で出土している。それ以外に出土遺物は確認出来なかった。木柱は確認出来なかったが、遺構直上にある木片は礎版の可能性、礫は根固め石と考えられる。

2 出土遺物

沢口遺跡では遺物は遺構からの遺物出土は極めて少なく図化できたものは僅少である。そのため遺構外から出土した遺物から遺跡の時期や性格等を分析せざるを得ない。遺物を時代別に分類すると、概ね古墳時代・奈良時代・近世とみられる。

古墳時代について、41-1の甕、41-6石製模造品の円盤が出土している。いずれも中期の所産と思われる。

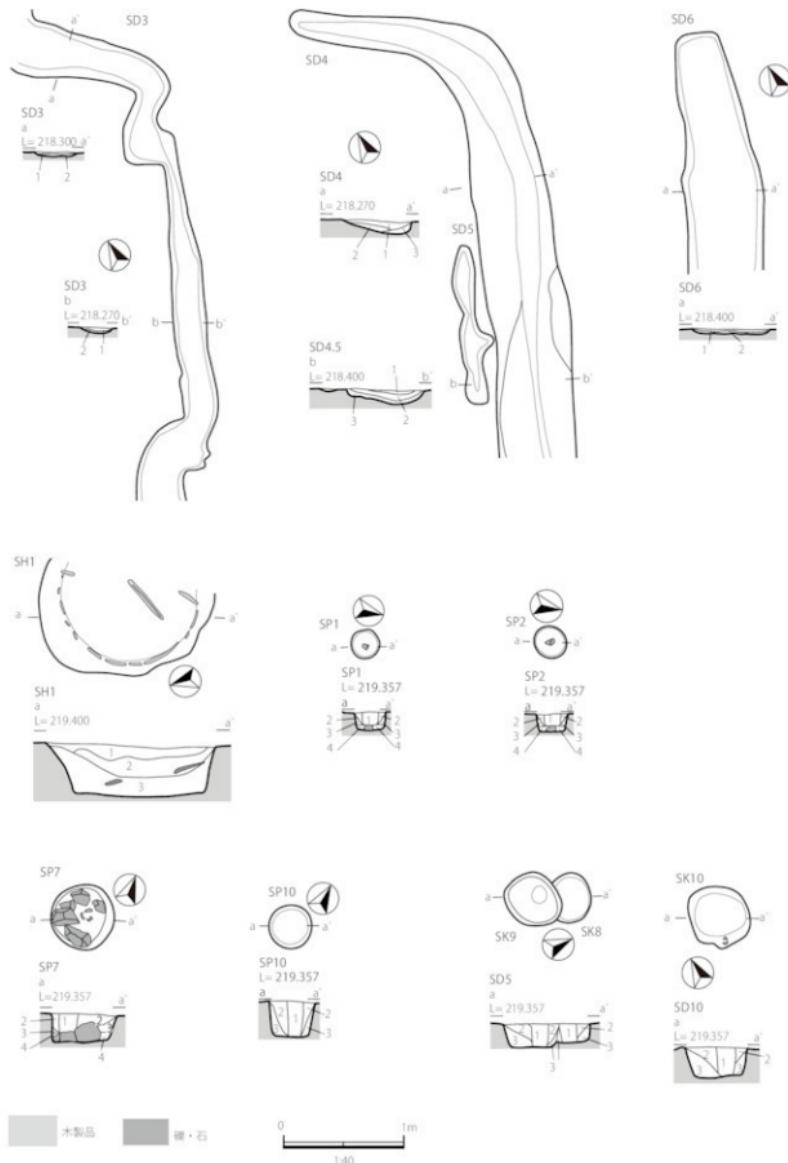
奈良時代は41-2・3の須恵器窯であるがいずれも回転ヘラ切したち底部をナデ調整している。8世紀第4四半期に属するとみられる。

近世については41-4すり鉢の破片が数点出土している。

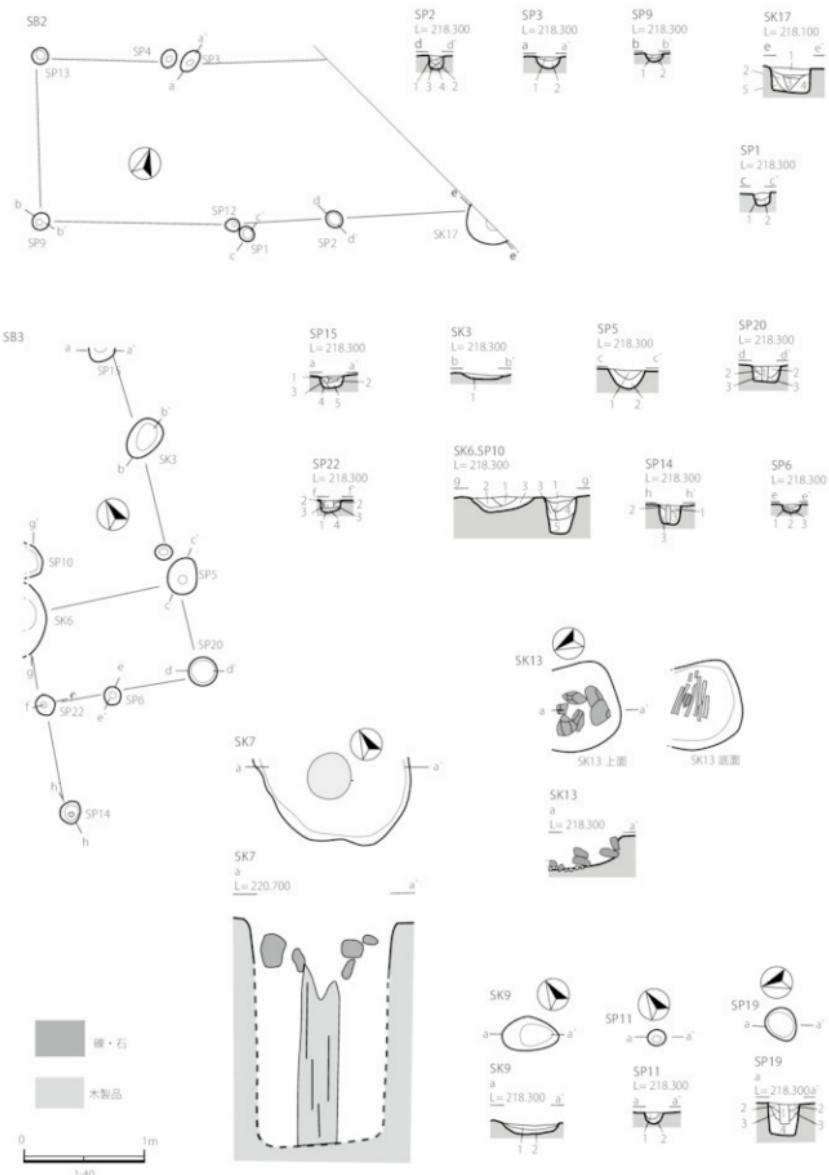
3 小 結

沢口遺跡はごく小さな範囲での調査であり遺物出土も少ないものの、長年にわたって継続して営まれた生活跡であることがわかる。この調査では文化層2面を確認した。

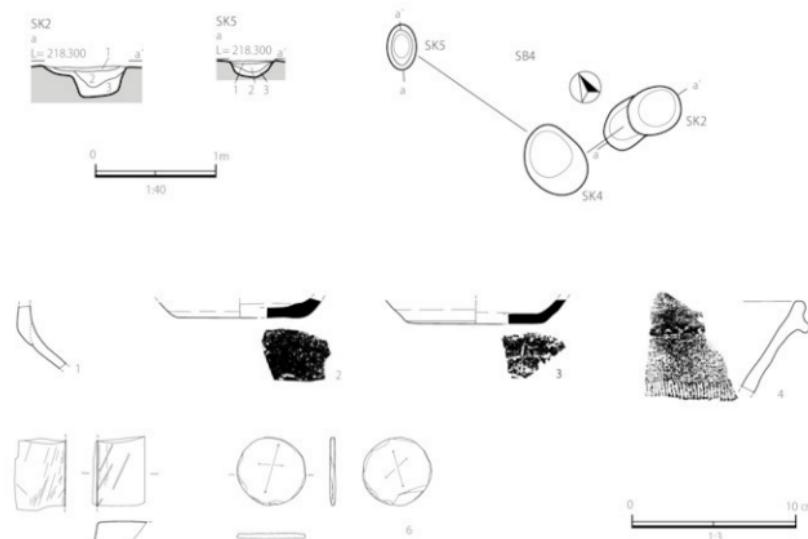
まずは第1層について、柱穴とそれに伴うとみられるL字型のごく浅い溝が存在するが、それらは掘立柱建物跡と雨水溝の組合せと思われる。SD4とSP7（あるいは



第39図 沢口遺跡 第Ⅰ層 溝・土坑・柱穴



第40図 沢口遺跡 第II層 掘立柱建物・柱穴・土坑



第41図 沢口遺跡 第II層 柱穴・土坑 出土遺物

表8 沢口遺跡 遺物観察表

回版	種別	器種	登録 計測値 (mm)				調整技法		出土地点	備考	
			番号	口径	底径	高さ	厚さ	外面	内面	底部	
41	1 玉飾器	蝶	-	-	-	-	6	ハケメ	ハケメ	-	遺構外
	2 漏斗器	环	-	-	(80)	-	6	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	遺構外 切削後コピナテ調整
	3 漏斗器	环	-	-	(80)	-	6	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	遺構外 切削後ナナ調整
	4 陶器	すり鉢	-	-	-	-	6	ロクロ	ロクロ	-	遺構外
	5 石製品	砾石	-	-	-	-	-	-	-	-	遺構外
	6 石製品	円盤状石製品	-	24	24	5	-	-	-	-	遺構外

SK10・SK8か?)、およびSD3とSK6(SP1・SP2は底柱か?)、これら2組あるいは同時期のものか等の可能性が考えられる。柱穴に関しては明確な柱痕および礎石や根固め石が充填されている。そして柱穴としてはあまり大きなものではない。

第II層については、掘立柱建物跡柱穴から建物の立替が3時期はあったことが窺える。ただしSK7の掘方の規格、及び木柱の直径等について他の柱穴と比較して違和感がある。このことからSK7は他の柱穴とは時期差があり、この2面の文化面の下にそれよりも古い文化面の存在を示すのではないかと思われる。

沢口遺跡は4m×6mと狭い調査区であるため、柱穴の組合せが困難である。しかし集落的な堅穴住居群では

なく、掘立柱建物群が古代を通して建設された地区であること、1基ではあるが大きな木柱が出土していることから、ある程度大きな掘立柱建物跡が存在した痕跡と思われる。

沢口遺跡について、西村眞次が郡衛推定地として提唱したが(西村1938)、その根拠のひとつに、沢口遺跡範囲内にある「ヒョンノメ(兵司目)」の地名について、「兵衛の住むところ=郡衛」ではないかと論じている。もしその木柱の存在が大型掘立柱建物跡の痕跡とすれば、その根拠のひとつになりえる可能性はあると思われる。

4 島貫遺跡

島貫遺跡は南陽市JR赤湯駅から西方向、直線距離にして0.9～1kmに位置する遺跡である（第2図）。A区は島貫遺跡推定地内に位置するが、B区に関しては沢田遺跡寄りに位置する。畠地に所在する。島貫遺跡についてはトレンチによる試掘調査を行った。A区・B区ともに旧吉野川河川道自然堤防上に立地している。

1 検出遺構

トレンチ調査で遺構が確認されたのはA区のBトレンチのSK1のみである。

SH1（第42図） この遺構は長辺0.9m、短辺0.7m、深さ0.3mの隅丸長方形とみられる遺構である（遺構の一部はトレンチ外）。緩やかなU字型を呈している。床面上には焼土面、その上に木炭や骨が確認出来るところから、火葬墓坑とみられる。遺物の出土は確認出来なかった。

2 出土遺物

遺構は確認出来なかったものの、トレンチの一部から遺物が出土した。

A区 古代の須恵器9点、黒色土器1点が出土した。まず、須恵器5点について43-1・2・4は回転ヘラ切後底部調整が施されている。これらは底径から8世紀第4四半期～9世紀第1四半期の範囲のものと思われる。43-5は回転糸切、43-3は底部が欠損しているものの9世紀第3～4四半期に属するようである。43-6須恵器高台壺についても9世紀第3～4四半期と考えられよう。黒色土器43-7については回転糸切底部で底径が小さいことから9世紀第4四半期～10世紀第1四半期とみられる。須恵器蓋43-8はややドーム型の形状で古めの様相を呈する。8世紀第2～3四半期のものであろうか。43-9小瓶は製作技法を観察すると体部内側に頸部絞切の痕跡が残る。小型器のため一般的な瓶類と一概に比較出来ないが、9世紀以降のものと考えられる。

B区 B区に関してBトレンチとCトレンチから遺物が出土している。

Bトレンチは黒色土器2点、小瓶2点破片1点が出土している。43-11・12は非ロクロ、深身の大型環で、2点ともに8世紀第4四半期に属するとと思われる。須恵器小瓶43-13は破片のため時期は不明。

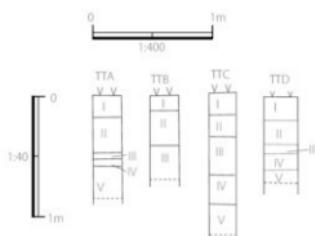
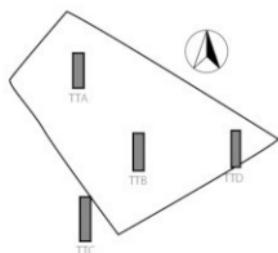
Cトレンチは須恵器环1点、土師器环1点、須恵器盤1点である。須恵器环43-14・須恵器盤43-15は回転ヘラ切で8世紀第2～3四半期に属するとみられる。また土師器环43-16も非ロクロであるものの全体の器形がわからないことから8世紀代に属するとしておく。

3 小 結

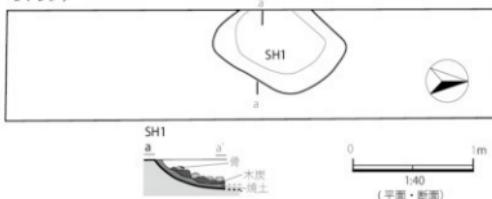
島貫遺跡はトレンチ調査のため、遺構・遺物の確認数が僅少であり、時期を特定するような明確な状況は確認出来なかった。しかし遺物等から、奈良時代を中心とした遺跡であることが窺える。

また、火葬墓坑についてはこのような方形あるいは梢円形の類例が多いことから中世後半のものとされている（山口・吉田2002）。なお、A区には「島貫の無銘六面鏡」があったとの証言がある。

A区



B トレンチ



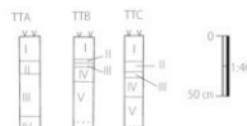
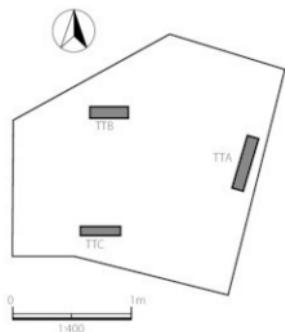
TT1
I 表土（耕作土）
II 暗褐色粘土質砂（盛土）
III 暗灰褐色粘土質砂
IV 褐色粘土（旧水田か）
V 灰褐色粘土

TT2
I 表土（耕作土）
II 暗褐色粘土質砂（盛土）
III 暗灰褐色粘土質砂

TT3
I 表土（耕作土）
II 黒褐色粘土質砂（盛土）
III 暗褐色粘土質砂
IV 暗黃褐色粘土質砂 錫含む
V 暗黃褐色砂質粘土 錫含む

TT4
I 表土（耕作土）
II 暗褐色粘土質砂（盛土）
III 暗褐色砂質粘土
IV 黑褐色粘土（旧水田か）
V 暗黃褐色粘土質砂

B 区



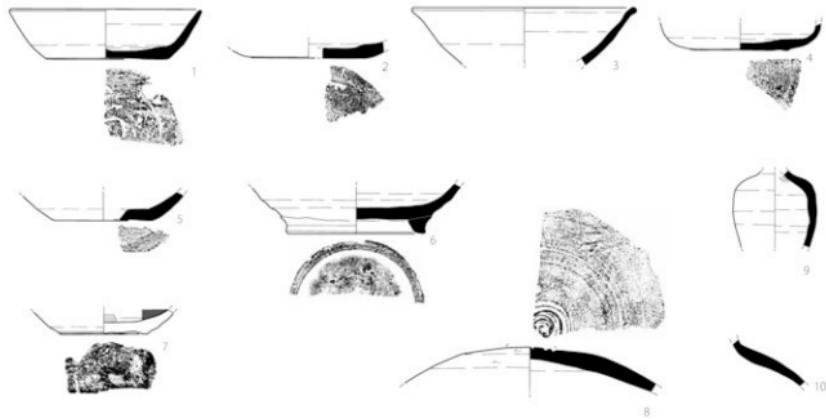
TT1
I 表土（耕作土）
II 黒褐色砂質粘土
III 暗灰褐色粘土 砂少量含む

TT2
I 表土（耕作土）
II 暗褐色砂質粘土
III 暗褐色粘土 砂少量含む
IV 黑褐色粘土 砂少量含む
V 暗灰褐色砂質粘土

TT3
I 表土（耕作土）
II 暗褐色砂質粘土
III 暗褐色粘土 砂少量含む
IV 黑褐色粘土 砂少量含む
V 暗灰褐色砂質粘土

第 42 図 島貫遺跡 概要図・基本層序

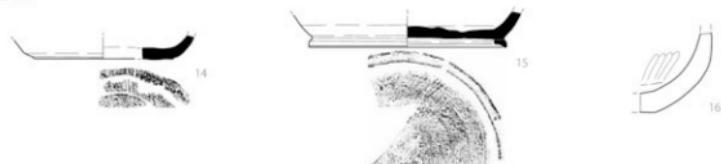
A 区 TTA



B 区 TTB



B 区 TTC



調査区外出土（表探）



黒色加工



第43図 島貫遺跡トレンチ調査 出土遺物

表9 島貫遺跡 遺物観察表

回復 種別	種 別	器 種	番号	計測値 (mm)					調整技法	出土地点	備 考	
				口径	底径	高さ	西高	外 面				
				内 面	底 部							
13	酒器	环	-	(118)	(76)	31	4	口クロ	口クロ	回転ヘラ切	A 区 ATT	切離し後ヘラケズリ調整
	酒器	环	-	-	(58)	-	6	口クロ	口クロ	回転ヘラ切	A 区 ATT	切離し後調整、打ち欠き痕有
	酒器	环	-	(140)	-	-	4	口クロ	口クロ	-	A 区 ATT	
	酒器	环	-	-	(66)	-	4	口クロ	口クロ	回転糸切	A 区 ATT	切離し後調整、打ち欠き痕痕
	酒器	环	-	-	(60)	-	7	口クロ	口クロ	回転糸切	A 区 ATT	
	酒器	高台环	-	-	84	-	5	口クロ	口クロ	回転ヘラ切	A 区 ATT	打ち欠き痕有
	黄色土器	高台环	-	-	56	-	5	口クロ	三ガキ	回転糸切	A 区 ATT	
	酒器	盖	-	-	-	7	口クロ・ケズリ	口クロ	-	-	A 区 ATT	打ち欠き痕有
	酒器	小瓶	-	-	-	6	口クロ	口クロ	-	-	A 区 ATT	頭部斜切技法
	酒器	瓶	-	-	-	8	口クロ	口クロ	-	-	A 区 ATT	
	黄色土器	丸底碗	-	(150)	-	-	4	ケズリ	三ガキ	-	B 区 BTT	
	黄色土器	壺	-	-	(70)	-	6	ケズリ	三ガキ	ケズリ	B 区 BTT	
	酒器	小瓶か?	-	-	-	-	6	縦割・ナデ	ナデ	-	B 区 BTT	
	酒器	环	-	-	(88)	-	5	口クロ	口クロ	回転ヘラ切	C 区 BTT	
	酒器	盤	-	-	(122)	-	6	口クロ	口クロ	-	C 区 BTT	
	土師器	环	-	-	-	-	11	不明	三ガキ	ケズリ	C 区 BTT	外裏磨滅著
	土師器	高环	-	-	-	-	16	不明	不明	-	表探	
	酒器	环	-	-	(80)	-	7	口クロ	口クロ	回転ヘラ切	表探	切離し後調整有
	黄色土器	高台环	-	-	50	-	5	口クロ	三ガキ	回転糸切	表探	磨滅顯著
	土師器	甕	-	-	(78)	-	8	ハケメ	ハケメ	木葉痕	表探	

5 中央第一土地区画整理事業地内調査

昭和 59 年度（1984）郡山地区の区画整理を行うにあたり、郡山遺跡範囲内にある区画整理事業地について試掘調査を行った。対象となる郡山地区にメッシュを設定し、5か所のテストトレーナー（TT）、翌年昭和 60 年度（1985）には 130 か所のテストピット（TP）による試掘調査を行った。なお、メッシュは 5m × 5m に設定している。

昭和 59 年度調査（第 44 図）では、TT 2において柱痕の残る大型で礎石の残る柱穴を確認、須恵器等（第 45 図）が出土している。そのうち須恵器环 45-2～6 の 5 点が回転糸切底部切離しで 9 世紀第 3 ～ 4 四半期に属するものと思われる。しかし、稜塊 45-7、壺 45-8 のような 8 世紀第 4 四半期頃の様相を持つ須恵器も出土している。また TT1 では古墳時代中期のものと思われる高環脚部が出土した。

昭和 60 年度調査（第 46 図）においては、遺物出土数を地図上に表した結果（原形が不明なものも含む）、調査地区的南西側（西 15m 南 30m）に、あるいは南東側（東 5m 南 20m）に集中している。それとは対照的に調査範囲の中央部分の遺物出土点数はごく僅少である。昭和 40 年代の圃場整備で大規模に削平されている可能性があるが、その一方で遺物出土数の多い地点に関しては条里制の名残りであるかのように現在の土地区画線軸がほぼ南北方向を向いているという傾向もみられる。

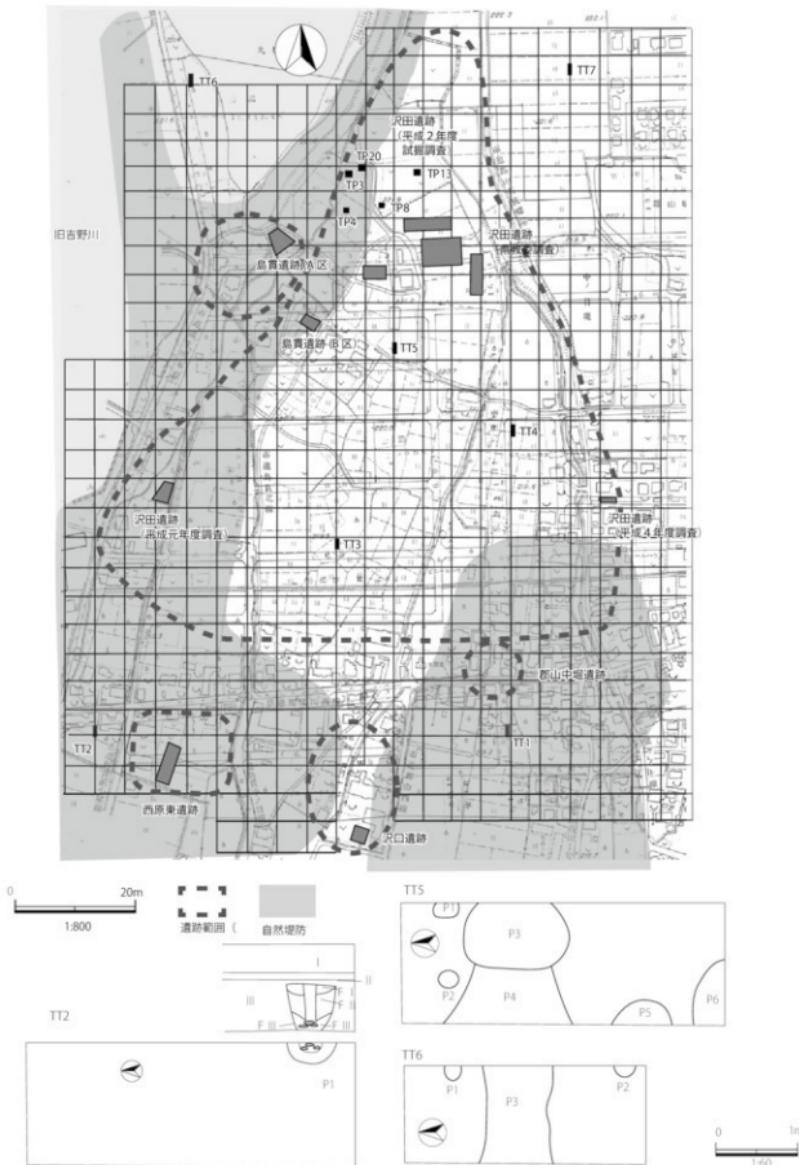
そして遺物の出土結果を図化し、地形図と重ね合わせてみた（第 46 図）ところ、対象となった中央第一地区は旧吉野川の後背湿地がその約 7 割の面積を占める。後背湿地はその名の通り湿地帯で建造物を造るには適していない筈であったろうが、調査地区内でも自然堤防縁辺及び自然堤防に囲まれた後背湿地に遺物出土数の比較的多い TT と TP が多く存在し、自然堤防から遠い調査地区中央付近では遺物出土が僅少な TP が多い。一方で TT2 付近においては大型の掘方と柱痕及び須恵器环数点が確認されたことから、自然堤防上に沢口遺跡～西原東遺跡～西中上遺跡と連続する集落跡があるのではと推測される。

遺物についてテストピット調査にて出土した遺物点数であるが、器種不明の破片を含めた点数であり、図示出

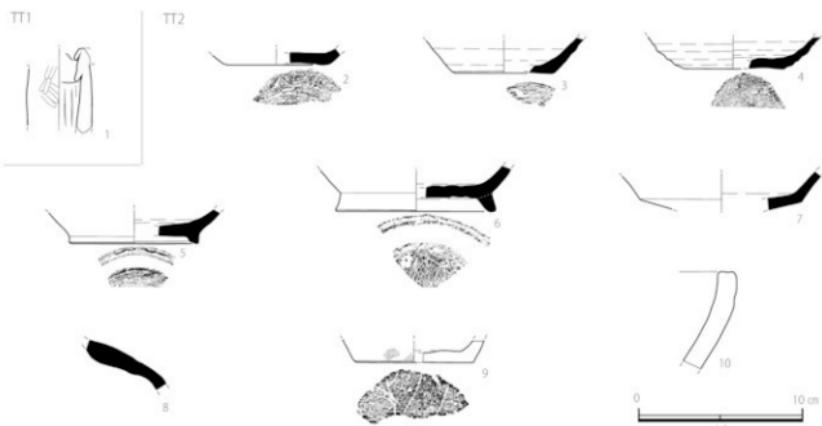
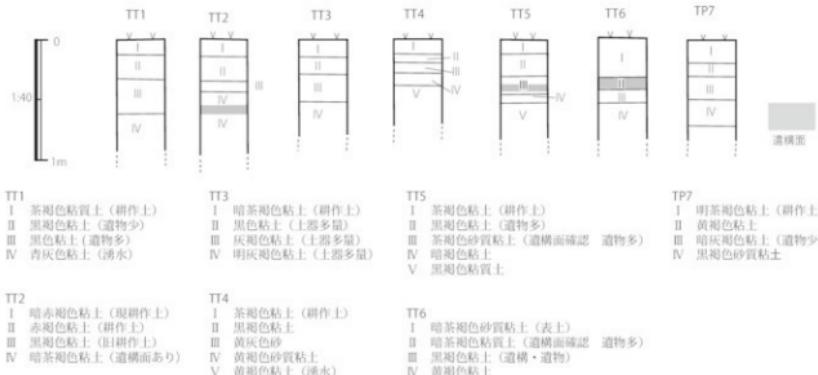
来た遺物も限定されたため、正確な抽出の結果とはいえない。しかし、古墳時代前期～中期、7 世紀末～9 世紀末の遺物、なかでも 8 世紀第 4 四半期～9 世紀末の遺物を主体としている傾向は郡山遺跡群全体の傾向とほぼ一致している。また調査区西端地域、沢田遺跡から島貫遺跡にかけて自然堤防地その縁辺の後背湿地内 15m 付近まで、ある程度連続した集落が存在したと考えた方がよいであろう。その他の後背湿地についても水田として利用した可能性は十分にある。

また自然堤防上の 2 遺跡において出土が途切れるとと思われた 8 世紀前半の遺物が、TP17 (48-15)・18 (49-1) から出土している（第 48・49 図）。県教委調査の沢田遺跡の結果からしても、郡山周辺は 7 世紀末以降途切れることなく集落が営まれたとみられる。

この地域はすでに開発が進んでいるため、今後広範囲での発掘調査は困難であると思うが、今後この地域の歴史を紐解く上でこの試掘調査の結果は重要なデータとなるであろう。これらのことと踏まえて郡山遺跡群全体の地形の様相を考えた場合、郡山地内でも遺構・遺物の検出の濃度の差は存在するが、ある程度連続して存在した遺跡であること、そして地形、後世の削平によってその差異が生じる可能性がある。



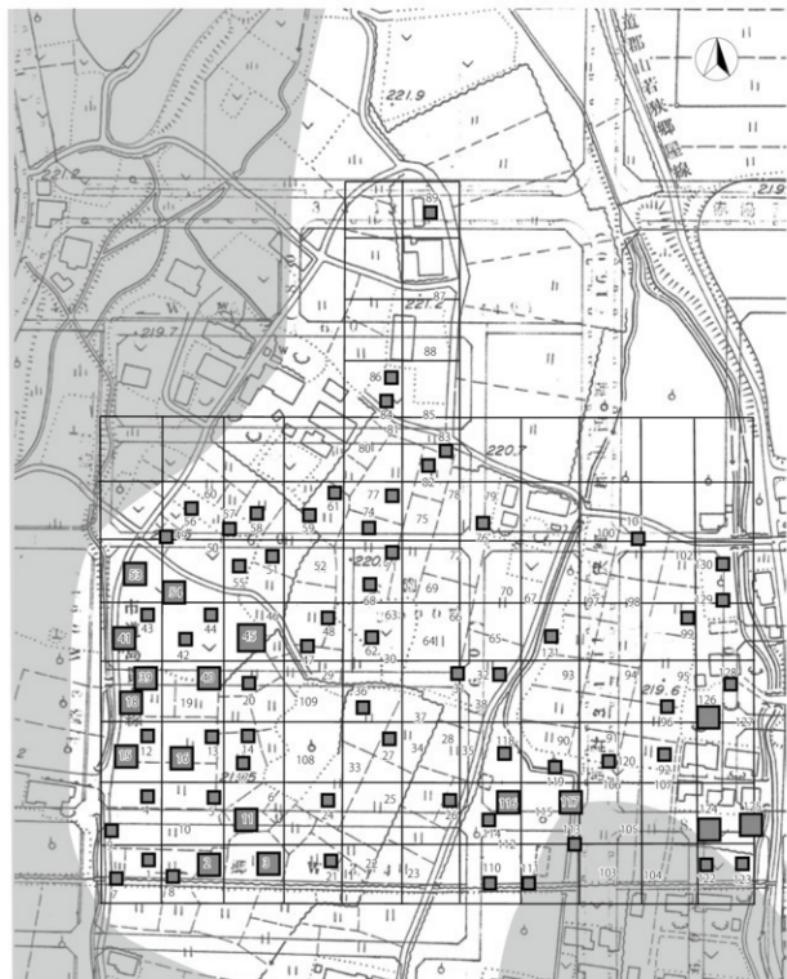
第 44 図 中央第一土地区画整理事業地内 遺跡発掘調査図（昭和 59 年度）



第45図 中央第一土地区画整理事業地内 遺跡基本層序 出土遺物（昭和59年度）

表10 中央第一土地区画整理事業地内 遺物観察表(1)

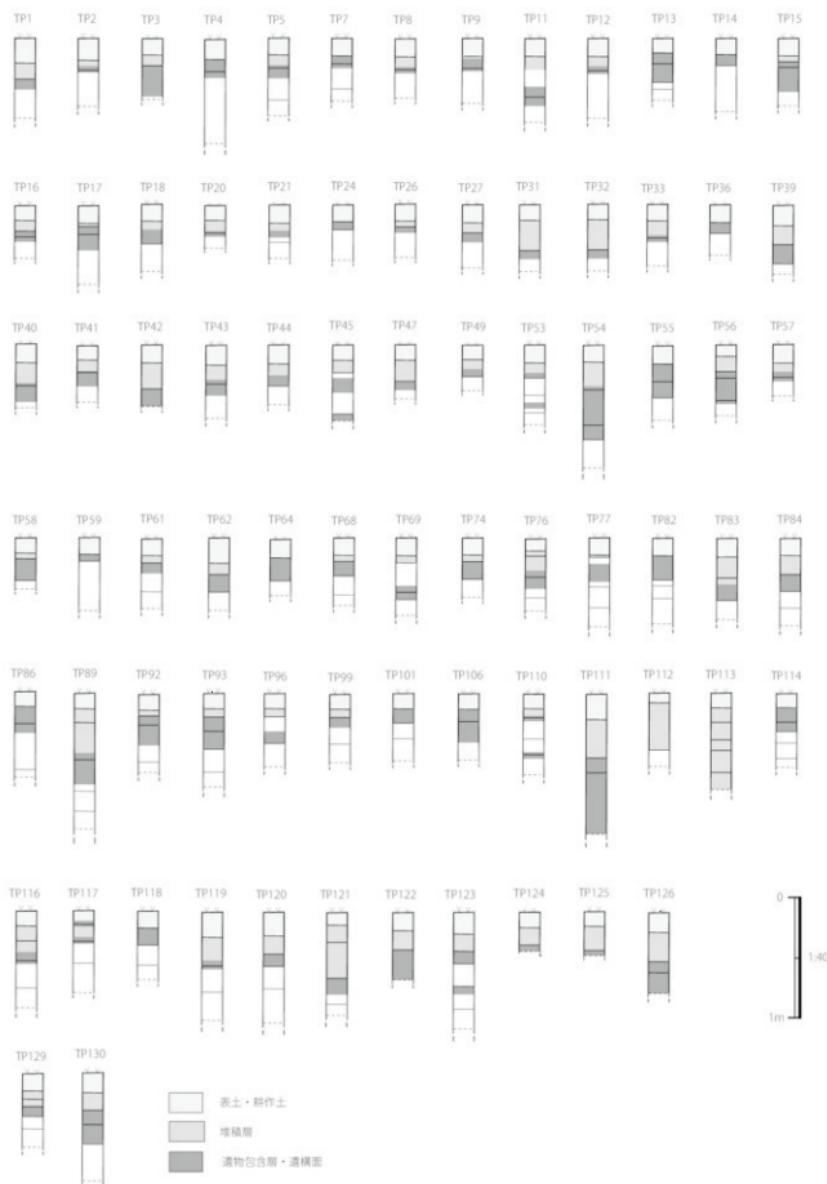
回取番号	種別	器種	登録番号	計測値 (mm)				調査法		出土地点	備考
				口径	底径	高さ	底厚	外面	内面		
1 土師器	高环	-	-	-	-	7.3	万キ	ナデ	-	TT1	
2 漏斗器	环	-	-	(80)	-	6	口クロ	口クロ	回転系切	TT2	
3 漏斗器	环	-	-	(62)	-	4	口クロ	口クロ	回転系切	TT2	底部中央に刺突痕有
4 漏斗器	坪	-	-	(50)	-	5	口クロ	口クロ	回転系切	TT2	打ち欠き痕有
5 漏斗器	高台坪	-	-	(80)	-	6	口クロ	口クロ	回転系切	TT2	焼成良好 底部穿孔有
6 漏斗器	高台坪	-	-	(100)	-	6	口クロ	口クロ	回転系切	TT2	
7 漏斗器	横筒	-	-	-	-	6	口クロ	口クロ	-	TT2	
8 漏斗器	壺	-	-	-	-	10	口クロ	口クロ	-	TT2	
9 土師器	小型甕	-	-	(74)	-	6	ハケメ	不明	木屋底	TT2	
10 陶器	すり鉢	-	-	-	-	12	口クロ	口クロ	-	TT2	



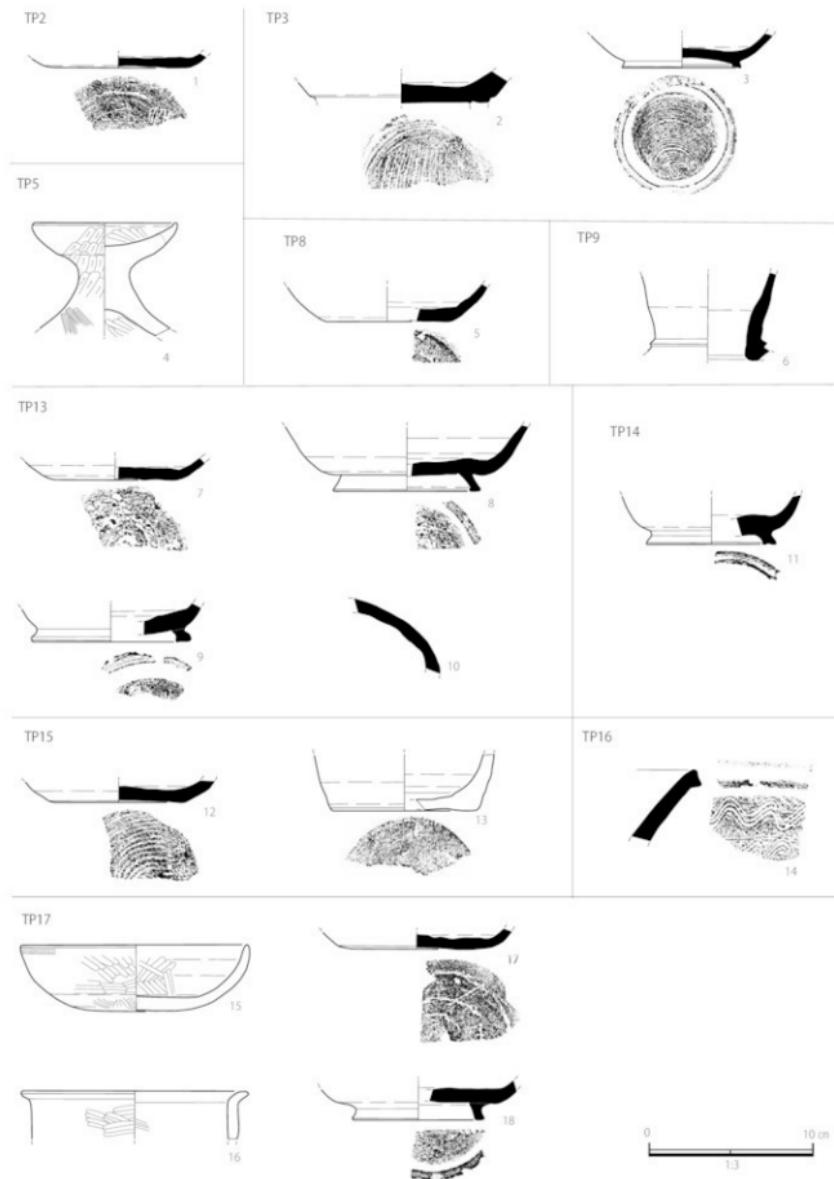
試掘坑別遺物出土量（破片数）

0
10m
1:400

第46図 中央第一土地区画整理事業地内 遺跡試掘地点図（昭和60年度）



第47図 中央第一土地区画整理事業地内 遺跡試掘坑基本層序（昭和60年度）



第48図 中央第一土地区画整理事業地内 出土遺物（1）

TP18



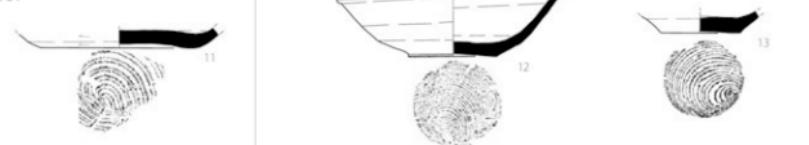
TP20



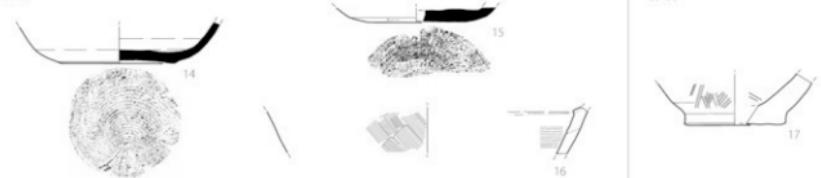
TP27



TP31



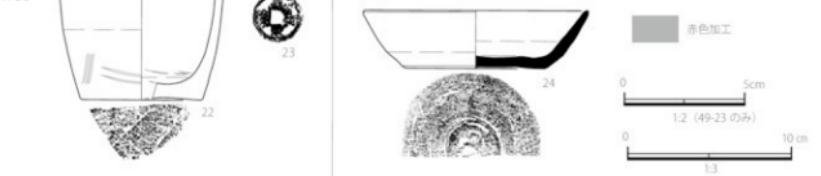
TP40



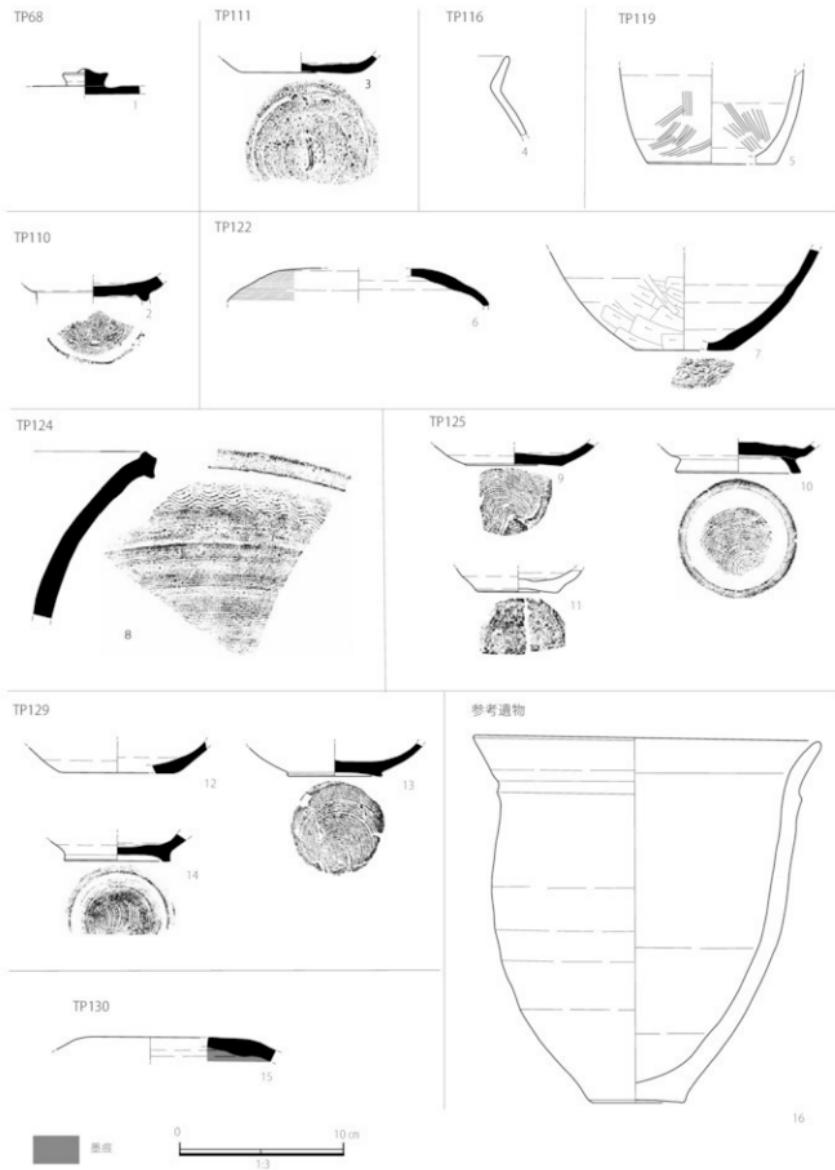
TP45



TP56

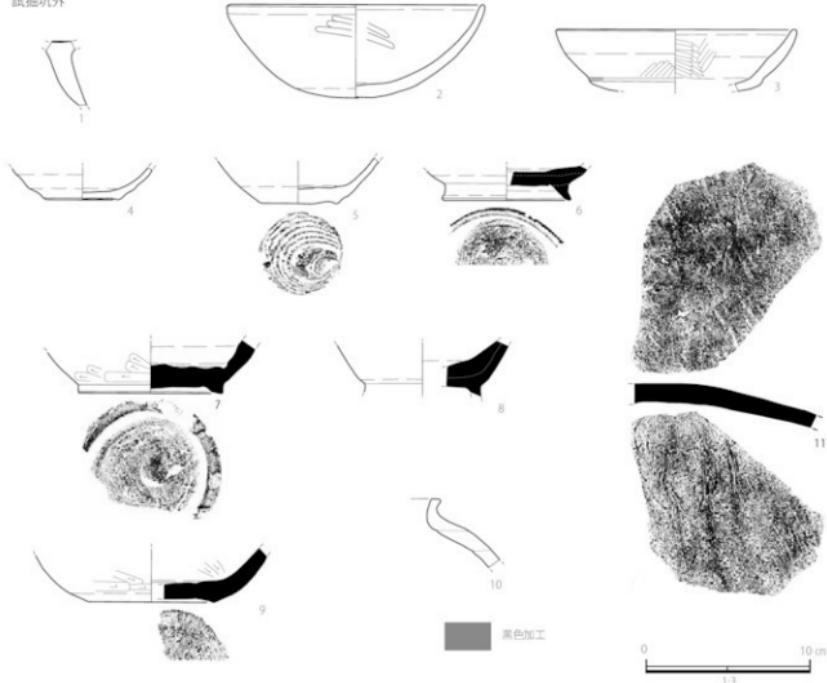


第49図 中央第一土地区画整理事業地内 出土遺物(2)



第50図 中央第一土地区画整理事業地内 出土遺物(3)

試掘坑外



第51図 中央第一土地区画整理事業地内 出土遺物(4)

表11 中央第一土地区画整理事業地内調査 遺物観察表(2)

器名 番号	種別	器種	登録番号	計測値 (mm)	調整技法			出土地点	備考
					外 面	内 面	底 部		
1 漏斗器	环	-	-	(88)	-	6 口クロ	口クロ	回転ヘラ切	TP2 切離し後調整痕
2 漏斗器	瓶	-	-	-	12 口クロ	口クロ	-	静止系切	TP3
3 漏斗器	高台环	-	-	74	-	5 口クロ	口クロ	回転系切	TP3
4 土師器	高环	-	(86)	-	10 ハケメ・ケズリ・ミガキ	ミガキ	-	-	TP5
5 漏斗器	环	-	-	(78)	-	5 口クロ	口クロ	回転ヘラ切	TP8 磨成良好
6 漏斗器	長頸瓶	-	-	-	8 口クロ	口クロ	-	-	TP9 凸帯付
7 漏斗器	环	-	-	(76)	-	5 口クロ	口クロ	回転ヘラ切	TP13 切離し後簡易なナナ調整
8 漏斗器	高台环	-	-	(90)	-	6 口クロ	口クロ	-	TP13 磨成良好
9 漏斗器	瓶類	-	-	(96)	-	6 口クロ	口クロ	-	TP13
10 漏斗器	瓶	-	-	-	6 口クロ	口クロ	-	-	TP13
11 漏斗器	瓶類	-	-	(80)	-	8 口クロ	口クロ	-	TP14
12 漏斗器	环	-	-	(82)	-	8 口クロ	口クロ	回転系切	TP15
13 土師器	甕	-	-	(90)	-	8 口クロ	口クロ	ナデ	TP15 外面磨減剥離

表 12 中央第一土地区画整理事業地内調査 遺物観察表（3）

回復 種別	器種	登録番号	計測値 (mm)				調整技法	出土地点	備考
			口径	底径	高さ	器厚			
48	14 漏斗器	甕	-	-	-	9 ロクロ	ロクロ	-	TP16 口縁部波状紋
	15 土師器	甕	-	(142) (54)	-	6 三万キ	三ガキ	ハケメ	TP17
	16 土師器	甕	-	(142)	-	7 三万キ	ハケメ	-	TP17 磨滅頭著
	17 漏斗器	甕	-	-	(80)	4 ロクロ	ロクロ	回転へラ切	TP17 切削後ユビナテ調整
	18 漏斗器	高台甕	-	-	(102)	6 ロクロ	ロクロ	-	TP17
49	1 黒色土器	有段甕	-	(150)	-	6 三万キ	三ガキ?	TP18	
	2 漏斗器	甕	-	-	(60)	6 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP18 磨成良好
	3 陶瓶	手り鉢	-	-	-	12 ロクロ	ロクロ	-	TP18
	4 漏斗器	甕	-	(200)	-	7 ロクロ	ロクロ	-	TP18
	5 土師器	高甕	-	-	-	6 三万キ	三ガキ	-	TP20 外面赤色加工有
	6 土師器	高甕	-	-	-	8 不明	不明	-	TP20 磨滅頭著
	7 土師器	高甕	-	-	-	8 三万キ	不明	-	TP20 外面赤色加工有
	8 漏斗器	甕	-	-	(80)	6 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP27
	9 土師器	甕	-	-	(90)	4 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP27
	10 漏斗器	甕	-	(176)	-	6 ロクロ	ロクロ	-	TP27
	11 漏斗器	甕	-	-	(98)	9 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP31 外面に紐コケ痕
	12 漏斗器	甕	-	(142)	58	42 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP36
	13 漏斗器	甕	-	-	50	8 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP36 打ち欠き割り痕
	14 漏斗器	甕	-	-	70	4 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP40 やや磨滅
	15 漏斗器	甕	-	-	(60)	8 ロクロ	ロクロ	回転へラ切	TP40 打ち欠き痕有り
	16 土師器	甕	-	-	-	7 ハケメ	ハケメ	-	TP40
	17 土師器	甕	-	(64)	-	11 ハケメ	ハラ	木葉痕	TP41
	18 漏斗器	矮甕	-	(140)	-	6 ロクロ	ロクロ	-	TP45
	19 漏斗器	甕	-	(64)	-	5 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP45 切削後調整
	20 漏斗器	甕	-	-	(110)	5 ロクロ	ロクロ	-	TP49
	21 土師器	甕	-	(160)	-	6 ハケメ	ハケメ	-	TP51
	22 土師器	甕	-	-	(76)	6 ハケメ	ハケメ	木葉痕	TP56 磨滅頭著
	23 古鏡	寛永通宝	-	-	-	1 -	-	-	TP56 磨滅頭著
	24 漏斗器	甕	-	(140) (86) 36	6 ロクロ	ロクロ	回転へラ切	TP59	切削後簡易なナド調整
	1 漏斗器	甕	-	-	-	5 ロクロ	ロクロ	回転へラ切	TP68
	2 漏斗器	高台甕	-	-	-	7 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP110 内面使用痕頭著
	3 漏斗器	甕	-	-	(74)	5 ロクロ	ロクロ	回転へラ切	TP111 切削後ユビナテ調整
	4 土師器	甕	-	-	-	4 ハケメ	ハケメ	-	TP111 外面白色化粧土残り
	5 土師器	甕	-	-	(80)	6 ハケメ	ハケメ	木葉痕	TP119 磨滅頭著
	6 漏斗器	甕	-	-	-	7 カキメ	ロクロ	-	TP122
	7 漏斗器	甕	-	(60)	-	6 ケズリ	ロクロ	ケズリ	TP122
	8 漏斗器	甕	-	-	-	10 ロクロ	ロクロ	-	TP124 口縁部波状紋
	9 漏斗器	甕	-	(60)	-	5 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP125 磨成良好
	10 漏斗器	高台甕	-	-	(77)	4 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP125
	11 土師器	甕	-	-	(50)	6 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP125
	12 漏斗器	甕	-	-	(60)	4 ロクロ	ロクロ	不明	TP129 磨滅頭著
	13 漏斗器	甕	-	-	58	4 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP129 打ち欠き割り痕
	14 漏斗器	高台甕	-	-	66	6 ロクロ	ロクロ	回転系切	TP129 高台内に墨痕有（文字不明）
	15 漏斗器	甕	-	-	-	8 ロクロ	ロクロ	ケズリ	TP130 磨成良好・内面転用痕の痕跡
	16 漏斗器	甕	116	60	227	10 不明	不明	不明	参考資料（昭和10年発見）
51	1 黒色土器	高甕	-	-	-	11 ケズリ	不明	-	表探
	2 土師器	丸底甕	-	(160) (36) 575	6 三万キ	三ガキ	ケズリ	表探	磨滅頭著
	3 土師器	有段甕	-	(150)	-	6 三万キ	三ガキ	-	表探
	4 土師器	甕	-	-	66	4 ロクロ	ロクロ	回転系切	表探 打ち欠き痕有
	5 土師器	甕	-	-	50	4 ロクロ	ロクロ	回転系切	表探
	6 漏斗器	高台甕	-	-	(80)	8 ロクロ	ロクロ	回転へラ切	表探 打ち欠き痕有
	7 漏斗器	甕	-	-	90	10 ロクロ	ロクロ	-	表探
	8 漏斗器	甕	-	-	-	11 ロクロ	ロクロ	-	表探
	9 漏斗器	甕	-	-	-	6 ロクロ・ケズリ	ロクロ・ケズリ	-	表探
	10 土師器	甕	-	-	-	8 不明	不明	-	表探
	11 漏斗器	横甕	-	-	-	11 ロクロ	ロクロ	-	試掘坑外

IV まとめ

前章までに郡山周辺の沢田・西原東・沢口・島貫の4遺跡及び中央第一土地区画整理事業地内調査を含めた郡山遺跡群について調査報告を行った。その結果について過去の発掘調査を含めて南陽市郡山地区周辺の調査結果をまとめてみたい。

郡山遺跡群研究史に簡単にふれると、昭和13年西村真次が「置賜盆地の古代文化」において沢口遺跡範囲内にある「ヒョンノメ（兵司目）」の地名を「兵衛の目」あるいは「評の目」すなわち郡衛ととらえ、沢口遺跡周辺を郡衛推定地として提唱した（西村1938）。

昭和55年以降南陽市教育委員会の表面踏査などにより郡山周辺に多数の遺跡が存在することは確認されていたが、昭和57年南陽市史編纂事業に係る郡衛推定地調査の結果、郡山地内の沢田遺跡は新規遺跡として確認され（佐藤・佐藤1990）、続く58年には郡山矢ノ目館遺跡で、古代の条里制に基づき造成されたと思われる大規模な道路状遺構が検出されている（吉野1984）（註3）。59年には山形県教育委員会による緊急発掘調査で弥生～古代・近世の遺跡であることが判明した（1985佐藤・名和）。また、郡山周辺の弥生時代・古墳時代・奈良～平安時代・中世の様相を解明する重要な成果を得た、国道113号線赤湯バイパス改築事業に係る発掘調査が平成15年から19年まで山形県埋蔵文化財センターによって行われた。

そして今回掲載する遺跡発掘調査及び範囲確認のための試掘調査の結果により、郡山周辺の各遺跡の範囲がそ

れまで認識されていたものより広まった。これらを踏まえ、掲載した郡山遺跡群の4遺跡だけではなくこれまで調査を行った遺跡の成果を含めて広く沖鷲地区周辺の遺跡の集落の様相やその性格を時代別に考察していく。

弥生時代 沢田遺跡では後期（天王山式）の土器が遺構外あるいは遺構の覆土への混入はあるが出土している。また県教委調査の沢田遺跡においても中期中葉（円田式）及び後期の土器が出土している。

郡山遺跡群では弥生時代の様相を示す遺構・遺物は確認出来なかった。しかし、こより1km南に位置する百刈田遺跡では弥生中期の墓壙19基が確認され、出土した中期後葉桜井式並行期の壺外面に稻耕痕が確認されている（高桑・佐藤ほか2010）。これまでにも旧吉野川対岸の萩生田地区で桜井式並行期の石包丁が出土していることから、郡山遺跡群周辺では弥生時代中期には集落が形成され稻作が行われていたことが推測できる。

古墳時代 沢田遺跡、県教委・沢田遺跡、西原東遺跡で各々古墳時代前期中葉～中期中葉および後葉までの土器が確認されている。特に沢田遺跡では遺構出土の土器は少ないものの祭祀行為を目的とした土器の埋設遺構がみられる。また赤色加工や化粧土による加飾が施された供獻土器と思われるもの、あるいは有段加飾口縁甕・壺の比率が高く、供獻土器と思われることから祭祀に使用したのであろう。また西原東遺跡では古墳時代中期～後

表13 郡山遺跡群 出土遺物時期推移表



半に环を一括廃棄行為したと思われる土器集中域が存在する。祭祀行為の可能性もあるが、断定できない。

以上のように、郡山遺跡群の調査では明確な日常生活のための遺構・遺物は確認出来なかった。この周辺には、北東方向丘陵に蒲生田山古墳群、西方向平地に旧古野川西岸の大塚遺跡・中落合遺跡・天王遺跡の平地型古墳

(群)の周溝、そして南東方向に大型の前方後円墳である稲荷森古墳など、4世紀中頃～後半の古墳が多数確認されている。これまでこれらの古墳と時期の対応する4世紀代の集落が発見されていないため、その存在と位置が課題となってきたが、今回の調査でも古墳時代前期の集落と確実にいえる痕跡は確認出来なかった。また、県教委・沢田遺跡では4世紀代後半の土器は確認されているが、床面直上の遺物から考えると5世紀代の住居跡の覆土に混入したものではないかと思われる。しかし、4世紀代後半にこの場所に人の生活があり、引き続き5世紀代にも人々が集落を作っていた可能性はある。

古代 古墳時代中期末以降やや空白の時期があるが、7世紀第4四半期の遺構と遺物が沢田遺跡と県教委・沢田遺跡で、遺物は西原東遺跡、島貫遺跡で確認された。これらの遺跡では8世紀第4四半期から9世紀第2～3四半期までを主体に、そして10世紀初頭までの遺物が確認されている。なお島貫遺跡は今回はトレンチ調査による非常に狭い範囲での調査であったため、表13では出土遺物の時期が間欠的になっているが、実際はもっと連続的である可能性は十分考えられる。

まず、平成元年度調査沢田遺跡の7世紀末～8世紀初頭のものとみられる焼失家屋ST1出土一括資料では、無脚円面鏡が多くの日常什器や炭化材とともに出土している。方向軸が真北であるこの竪穴住居跡は、条里制の地割に則って造られたと思われる。大宝律令が制定された(701年)前後に居住していたこの家の住人は、遺構状況や出土遺物から身分が限定されると思われ、官吏の可能性も考えられるであろう。沢田遺跡で確認された竪穴住居跡は1棟のみであるが、住居跡周辺の溝の性格を区画溝と考えれば、この場所にある程度まとった集落が形成されていたのではないだろうか。なおこの時期置賜郡衙は高畠町小郡山遺跡に配置されたと推定されており(佐藤・佐藤1990)、併行してこの郡山遺跡周辺に

条里制に沿った形で集落が形成され始めた痕跡とも言えるかもしれない。なお小郡山遺跡について小規模発掘調査がほとんどであり遺跡全体の様相は不明確であるが、発掘調査の結果河川跡から7世紀末から8世紀前半の遺物が出土した大在家遺跡(植松・植2006)から小郡山遺跡の一部が垣間見られる。

ところで、郡山遺跡群において多くを占める遺構・掘立柱建物跡の柱穴に目を向けると柱穴の底面には礎石(一部礎板か?)が目立ち、場合によっては根固め石が柱穴に充填されている。特に沢口遺跡においてその傾向が顕著である。沢口遺跡は後背湿地上に位置しているので、軟弱な地質上必要な措置であったのか、あるいは軟弱な地質でもそこに建てなければならぬ理由があったのかは不明である。だが、第44図をみると「沢口」という字名が地形や地質を表現しているかのように湿地への入り口のような地形であることが理解できる。

その後、郡衙は9世紀末には川西町道伝遺跡へと遷されたとしているが、これは道伝遺跡出土木簡「寛平八年(896)」の記述を根拠としている。^{どうやら}

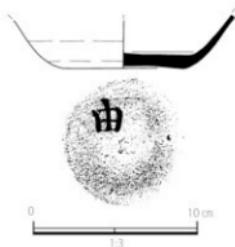
なお置賜郡衙の変遷史について現在までにいくつかの説が発表されている。佐藤庄一は南陽市史(佐藤・佐藤1990)において、高畠町小郡山遺跡→米沢市大浦B遺跡→南陽市郡山遺跡→川西町道伝遺跡の三遷説を唱えている。その根拠として大浦B遺跡出土の具注墨の漆紙文書「延暦廿三年(804)」の記述を根拠とし、その時期まで大浦B遺跡付近に官衙が存在したとしている。また川崎利夫は「置賜地域における郡衙の変遷について」(2003川崎)にて、小郡山遺跡→郡山遺跡→大浦B遺跡→道伝遺跡の順で郡衙が変遷したとしている。その後2010年に佐藤鎮雄が小郡山遺跡→郡山遺跡→道伝遺跡の二遷説ならびに郡山遺跡が8世紀後半から9世紀末まで100年以上にわたって郡衙として機能していたとの説を提唱している(佐藤2010)。その根拠として官衙的な区画施設と掘立柱建物跡群が確認された中落合遺跡など郡山周辺の遺跡の存在と、それらの遺跡から出土する稜塊など特徴的な須恵器を含む出土遺物から考えて、郡山遺跡群周辺には8世紀後半には郡衙が郡山周辺に存在したのではないかと述べている。加えて大浦B遺跡周辺には「郡山」など郡衙を連想させる地名が残ってない点を理由にあげている。

次に遺物についてであるが、郡山周辺遺跡出土の須恵器環の特徴として稜塊が一定数出土していることは西原東遺跡の項などでも述べたが、それに加えて無高台の須恵器環について底部切離し後調整が施されている割合が多いことが目立つ。このような傾向は西原東遺跡の西方向約400mに位置する西中上遺跡でもみられる。また、須恵器環について比較的底径が大きな段階で回転糸切底部切離しを導入していることに着目したい。なお、8世紀第4四半期から9世紀前半の遺物が大量に出土した西中上遺跡の溝SD3は、方向軸を真北とする旧吉野川からの取水溝と報告されている。よって、この周辺が集落として機能したのはその時期であること、溝が条里制の地割に則り造成されたことは想像に易い。

古代の郡山遺跡群全体から出土する土器は8世紀末～9世紀中頃に属するものがピークとみられ、特に遺物がまとまって出土している沢田遺跡・西原東遺跡でみた場合、8世紀第4四半期から9世紀第3四半期に属する須恵器環の出土が主体である。出土した土器年代観から鑑みれば郡山遺跡群は少なくとも8世紀末から9世紀後半まで集落として機能を果たしていたと言える根拠となりえる。

ところで、道伝遺跡から墨書「由」と書かれた环が数点が出土している（手塚・藤田1981）が、郡山矢ノ目館遺跡で土器墨書「由」（吉野1984・第52図）のほか、前述の西中上遺跡SD3・SD5から墨書・刻書「甲」^{註3)}のある須恵器が10点出土している。この2遺跡に挟まれて存在する西原東遺跡及び沢口遺跡は、上記2遺跡との関係性を考える必要があると思われる。

遺跡の連続性について、立地の観点からすれば郡山遺跡群の南側では東方向から矢ノ目館遺跡～沢口遺跡～西原東遺跡～西中上遺跡と旧吉野川河岸まで連続すると思われる集落跡が存在する。また旧吉野川東岸の自然堤防上に北方向から島貫遺跡～沢田遺跡まで連続する集落の



郡山矢ノ目館跡遺跡出土墨書土器は
今回報告書掲載のため実測した。

第52図 郡山矢ノ目館跡遺跡出土 墨書土器

存在も窺える。そして、区画施設と掘立柱建物跡群を持つ中落合遺跡まで郡山都衙の広がりを考慮すべきであろう。近世初頭まで島貫～高梨地区を南流していた旧吉野川を大動脈として郡山遺跡群が形成され、水田の灌漑水確保及び最上川や日本海へ繋がる輸送・交通のための水路が確保されていたとみられる。これらは生産・流通・統治には欠かせない条件となるであろう。これらの遺跡が連続的に存在することによって、官衙として成立する要素が揃うことであり、中央との繋がりと東国支配・開発という目的が進められる環境であったと読み取れるのではないだろうか。そして郡山矢ノ目館遺跡の南北方向を軸とする道路状遺構が、この地で条里制に則り都市計画を行ったことを示す可能性がある。

冒頭でも述べたとおり郡山遺跡群内ではまだ郡衙の郡庁と確定出来る遺構は確認されていないが、これらの成果によって郡衙推定地としての郡山遺跡群の資料が増加していることは確実である。そして9世紀末以降郡山遺跡周辺の集落は縮小していく傾向が窺えることから、郡山遺跡群周辺から道伝遺跡への郡衙の機能が移転した裏付けともなるであろう。

註

3) 郡山矢ノ目館遺跡報告書中では「畦畔状遺構」としているが、本書では「道路状遺構」とする。
また、佐藤綱雄は郡山矢ノ目館遺跡条里制遺構を「沖縄条里制遺構」と改称している（本編Ⅱ章）。

4) 西中上遺跡報告書では筆跡から「由」ではなく「甲」としている。

引用・参考文献

- 阿部明彦・黒坂雅人 1987 「矢跡A 遺跡・矢跡B 遺跡・清水新田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書 127集
- 阿部明彦 1993 「箭田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第 187集
- 阿部明彦・水戸弘美 1999 「山形県の古代土器編年」『第 25 回古代城柵官道跡検討会資料』
- 阿部明彦・吉田江美子 2002 「山形県における古墳時代中期の土器様相(1)」「山形考古第 7 卷第 2 号」山形考古学会
- 阿部明彦・吉田江美子 2004 「出羽の土器とその編年」『出羽の古墳時代』高志書院
- 井田秀和 1997 「町内遺跡発掘調査報告書(3)」高畠町教育委員会調査報告書第 5 集
- 伊藤邦弘・氏家信行 1994 「南原遺跡・堂の下遺跡・飯塚跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 2 集
- 伊藤邦弘 2004 「山形の須恵器」『出羽の古墳時代』高志書院
- 植松暉彦・槇 綾 2006 「大在冢遺跡第 1 次・2 次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第 153集
- 植松暉彦 2008 「出羽国創建期(7~8世紀)の山形県の土器器の様相」『出羽國ができるころ』
- 氏家信行・吉田江美子 2007 「大冢遺跡・西中上遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター報告書第 158集
- 氏家信行・高桑弘美 2008 「中落合遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター報告書第 168集
- 尾形與典・小関真司 1996 「下柳 A 遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター報告書第 38集
- 押切智哲・多田和弘ほか 2003 「波江遺跡検出の墓域について」『研究紀要創刊号』山形県埋蔵文化財センター
- 押切智哲・須賀井明子 2007 「庚原発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター報告書第 161集
- 齋藤主税 1991 「東田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第 165集
- 佐藤綱雄・佐藤庄一 1987 「南陽市史 考古資料編」南陽市史編さん委員会
- 佐藤綱雄・佐藤庄一ほか 1990 「南陽市史(上巻)」南陽市史編さん委員会
- 佐藤綱雄 2008 「出羽国ができるころー出羽国創建期における南出羽の考古学」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 佐藤綱雄 2010 「平安初頭における置賜郡の官衙とその周辺」『平安初頭の南出羽考古学ー官衙とその周辺ー』
- 山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 佐藤庄一・名和達朗 1985 「浪田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第 88集
- 佐藤庄一・須賀井明子 1998 「平野山古窯跡群第 12 地点遺跡第 2 次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 52集
- 佐藤庄一 2011 「かわにし文化財第 53 号」山形県川西町
- 渋谷孝雄 1984 「吹浦遺跡第 1 次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第 82集
- 渋谷孝雄ほか 1987 「分布調査報告書(14)」山形県埋蔵文化財調査報告書第 110集
- 渋谷純子・吉田江美子 2001 「山形県内出土の製塙土器について」『庄内考古学第 21 号』庄内考古学研究会
- 渋谷純子・高桑弘美 2004 「平安時代における信仰関連遺物集成」『研究紀要第 2 号』山形県埋蔵文化財センター
- 須賀井新人・植松暉彦 1993 「今塙遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 7 集
- 高桑弘美・佐竹桂一ほか 2001 「三条遺跡第 2・3 次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 93集
- 高桑弘美・佐藤祐輔ほか 2010 「百刈田遺跡第 1 ~ 4 次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 184集
- 高橋 敏 2004 「馬洗塚 B 遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 123集
- 田嶋明人 1986 「漆町遺跡 I」石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2008 「古墳確立期土器の広域編年 東日本を対象とした検討(その 4)」「西相模考古第 20 号」西相模考古学研究会
- 田嶋明人 2012 「古墳確立期の広域編年 東日本を対象とした検討(その 5)「東生第 1 号」東日本古墳確立期土器検討会
- 次山 淳 1993 「布留式土器における精製器種の制作技法」『考古学研究第 40 卷第 2 号』考古学研究会
- 辻 秀人 1994 「東北南部における古墳出現期の土器編年」東北学院大学論集歴史学・地理学第 26 号
- 手塚孝・藤田宥宣 1981 「道伝遺跡発掘調査報告書」川西町埋蔵文化財調査報告書第 2 集
- 西村眞治 1938 「置賜盆地の古代文化」『郷土研究叢書第八輯』山形縣郷土研究會
- 藤永正明・宮崎泰史ほか 2006 「年代のものさし—陶色の須恵器—」平成 17 年度冬季企画展大阪府近つ飛鳥博物館図録 40
- 長橋 至 1986 「不動木遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財報告書第 100集
- 山口博之・吉田江美子 2002 「谷柏 A 遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 95集
- 吉田江美子 2008 「山形県内の古墳時代前期土器について」『研究紀要第 5 号』山形県埋蔵文化財センター
- 吉野一郎 1984 「郡山矢ノ目館遺跡」南陽市埋蔵文化財調査報告書第 1 集

富貴田遺跡

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

富貴田遺跡は、南陽市宮内地区西南部、フラー長井線宮内町駅西方400mに位置し、遺跡一帯に公告防除特別土地改良事業の実施により昭和61年に山形県教育委員会の緊急調査が実施され、遺物包含層及び遺構が確認された。出土遺物の土師器及び須恵器は奈良時代（8世紀代）及び平安時代（9～10世紀代）のものであることが確認されている。今般、南陽市西工業団地拡張事業（平成元～2年度）にともない、試掘調査を平成2年7月5日から31日にわたり、遺跡範囲の確認とその深度及び時代等の内容について把握することを目的として実施し既知遺跡範囲よりも広いことが確認された。この結果を受けて本調査を平成2年9月25日から10月19日にわたり記録保存を目的として調査を実施した。

2 調査の概要

試掘調査は平成2年7月5日から31日にわたり実施した。調査地約10.0ha内に30m×30mを1単位とするグリッドを配し、試掘地点を試掘穴（1m×1m）134穴、トレンチ（1m×6m）3本を設け試掘を行った。明確に遺構が確認されたのは、試掘穴TP31及びそ

の周辺トレンチ並びに試掘穴TP36だった。他地点と異なり、基層はしまりのよい粘質砂層であり、この層にピット及び溝状のおち込みが確認された。ただし、遺構に直接ともなう遺物は検出されていないことから時代の特定はできなかった。試掘穴TP25及びその周辺は、遺物が比較的多く出土したが、遺構が検出されないことと出土土層から見て二次的堆積によるものと推定した。第1次調査の結果として、全体的に遺構及び遺物が共に少ない傾向があり、今次発見の地区も周知の富貴田遺跡の西限を示すものと推定した。

本調査は平成2年9月25日から10月19日にわたり、富貴田遺跡の南西端部を調査地として実施した。出土遺物の時代は、主として平安時代が多く部分的に中世であった。柱根列が2列検出されたが、明確な遺構はなかった。他に若干の土坑や溝が検出された。試掘調査時にトレンチに溝跡が出たことと鉄滓や異形小溝及びピットが検出された箇所に近接していることから精査地区としたが、表土剥離後、面整理した結果、先の溝跡は暗渠であり、また出土遺物は表面採取のものであることから精査しなかった。



富貴田遺跡 調査状況



富貴田遺跡 作業風景

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

南陽市の地理的景観を簡単に表現すると「北に丘陵、南に沃野」と言える。北の丘陵とは山形県南部の置賜地方の米沢盆地周辺域の北部を限る白鷹山（標高994m）の南に広がる白鷹山系丘陵をさす。白鷹山は新生代第四紀の死火山である。白鷹火山の活動の噴出物を主体とする丘陵が周囲に広がるが、その南部丘陵が南陽市域の北部丘陵である。

白鷹山の麓に源を発する吉野川は、ほぼまっすぐ南流し、上流域の吉野地区・上中流域の金山地区を貫流して宮内地区に至る。宮内地区で山間を抜け出て広大な扇状地を形成する。扇頂部から扇央部が宮内地区、扇央部から扇端部が沖郷地区である。

位置的には、フラー長井線宮内駅の西方である。JR奥羽本線赤湯駅から奥羽本線は東北に進み、東進して赤湯地区北部山麓を大きく廻り山形方面に路線を伸ばす。また、赤湯駅から北進して宮内に至り、さらに西進するフラー長井線が路線を伸ばしている。富貴田はその宮内駅付近である。その南を国道113号線が通り、主要地方道3号線（米沢・南陽・白鷹線）との交差点から北へ入った主要地方道3号線沿いが富貴田である。富貴田一帯に遺跡は拡がるとみられるが、3号線沿線の住宅地域の西側、漆山地区池黒との境目周辺が調査対象区域である。

ところで、吉野川の扇状地は宮内地区西部を南流する上無川、宮内地区西隣の漆山地区を南流する織機川の冲積作用をも複合した合成扇状地である。この扇状地を「宮内扇状地」と呼称している。

宮内扇状地を形成した主力は吉野川であるが、吉野川はかつて宮内東部からまっすぐ南下して沖郷地区内を流れていた。しかし、現在は沖郷地区北部で流路を東南に変えて赤湯地区へ流れる。現在でも沖郷地区蒲生田から萩生田・郡山を経て宮崎に至る旧河道が明瞭にみられる富貴田は池黒との境にある上無川に臨む微高地であり、宮内扇状地でも上無川の影響の強い立地にある。上無川

は北の山麓部に川と言えるほどの流路がなく、周辺の沢水を集めて流れている川である。しかし、かつては結構な水量があつたらしく、富貴田から扇状地内を下るにつれ河川跡が明瞭である。そして、その東岸は宮内、西岸は池黒となっている。下流の池黒矢ノ目で織機川に押され、沖郷地区中落合と西落合の中間を流れ、萩生田の西方を流れて露橋で最上川に合流する。

富貴田周辺より上流部は宮内地区柳町・別所町を経て山麓に至るが、小堰水路が複数あるだけで本流は明確で無い。

富貴田の南半分の東側は、かつて宮内条里を推定した柏倉亮吉の指摘通り「中の坪」地名で、明治的地積図を詳細に検討し中世以前の水田地割が確認されたことから宮内条里制造構の根拠とされている。

今回の調査箇所は富貴田を通る宮内条里の大坪割の基線から外れているが、奈良時代以降の遺跡であれば、条里制施行地内でもあるので何らかの影響はある可能性がある。

なお、富貴田の東部は宮内地区の大清水で、北部の柳町東部境から通じる伏流水が多いことで知られている。大清水の南側も「中の坪」地名である。

したがって、富貴田周辺は宮内扇状地でも扇央部から扇側部にかけての複雑な地形になり、富貴田東部は伏流水に恵まれ、西部は上無川の沖積作用を受けた位置にあると言えよう。

2. 歴史的環境

北は白鷹山系丘陵南端の丘陵、南は宮内扇状地扇頂部から扇央部～扇側部である。

(1) 繩文時代

宮内地区的山麓部に位置する双松公園から熊野神社～宮内小学校にかけては、縄文時代の遺跡が連続する。宮内熊野大社敷地内遺跡は縄文時代中期から後期初頭の遺跡である。双松公園下の久保遺跡は縄文時代中期の集落

遺跡である。熊野大社敷地は山麓部であるが、その直下の宮内小学校敷地内遺跡も縄文時代中期の集落遺跡である。宮内扇状地の扇端部と山麓部は広大な縄文時代中期の集落遺跡であったとみられる。

また、山麓部を熊野大社から西へ行くと別所町であるが、ここでも縄文時代の石器が採集されている。さらに宮内扇状地内の吉野川高位段丘にある六角町でも縄文時代中期の土器が採集され、周辺が集落遺跡であったとみられている。

宮内地区の北部吉野地区や金山地区では、山間地や河川沿いに縄文時代前期から晩期に至るまで多数の遺跡がみられるが、宮内地区は中期から後期初頭の遺跡のみである。なお、富貴田北部の宮内地区別所に隣接する漆山地区池黒は織機川に沿う山麓部もあるが、縄文遺跡は確認されていない。ところが、織機川上流部の大野平遺跡や笹子平遺跡などは縄文時代早期から中期に至る集落遺跡である。山麓部から扇状地の漆山でも縄文時代前期～後期にかけて5遺跡が点在する。

(2) 弥生時代

宮内地区では遺跡はないが、西隣の漆山地区大野平遺跡でアメリカ型石器のみ発見されている。梨郷地区の掛在家遺跡では弥生時代中期の桜井式土器やアメリカ型石器が、砂塚の塩竈前遺跡では環状石斧が発見されている。

宮内地区的南隣の沖郷地区では萩生田遺跡で中期の桜井式期の石包丁が、鳥貫の百刈田遺跡では桜井式土器が、郡山の沢田遺跡では中期の円田式・後期の天王山式の土器が発見され、中期から後期に至る弥生集落が展開していたとみられる。

(3) 古墳時代

宮内地区では古墳時代の遺跡は確認されていないが、宮内の南隣の沖郷地区的郡山遺跡群では古墳時代前期中葉～中期中葉までの遺跡が確認されている。郡山の沢田遺跡はその全時期、鳥貫の百刈田遺跡は中期前中葉に営まれている。なお、宮崎の植木場一遺跡でも中期の古墳が確認され、梨郷地区的天王遺跡では前期の古墳群が、掛在家遺跡では後期の土師器が発見されている。

赤湯地区的長岡山遺跡や稻荷森古墳・諏訪前遺跡などは前期の集落及び古墳である。また、梨郷山中には中期

から後期にかけての古墳群の分布が推定されている。

(4) 飛鳥・奈良・平安時代

飛鳥時代後期の7世紀後半以降の遺跡が宮内扇状地及び臨緑丘陵にみられる。宮内扇状地扇端部の沖郷地区沢田遺跡は7世紀末から営まれた集落遺跡で、周辺にも同様な遺跡の存在が予想される。さらに沖郷地区郡山周辺には8世紀から9世紀まで営まれる遺跡が多数分布する。沢田遺跡や中落合遺跡、漆山地区池黒庚柵遺跡など扇状地扇端部の遺跡を中心に宮内扇状地一帯に分布する傾向を見せる。

また、宮内扇状地の東北側にある臨緑丘陵の蒲生田山～上野山・大沢山～二色根山・秋葉山などの山間に、かつて赤湯古墳群といわれ、その数5百余といわれた小規模古墳群が分布する。これらは径10～20mの横穴石室で数基ぐらいずつ群集をなしている。多くは過去に盜掘されたり破壊されたりして現存するものが少ないので、遺存している出土品や石室の形状から7世紀末から8世紀も第3四半期ころまで築造された終末期古墳である。

これらの古墳が分布する山地の東麓や南麓の赤湯地区には集落が展開できるような場所がなく、西麓の赤湯地区二色根・三間通・上野に集落があるのでないかとみられてきた。しかし、今のところこれら終末期古墳の年代と時期が一致する遺跡は発見されておらず、吉野川を挟んで2kmほど離れた沖郷地区郡山周辺の遺跡群が最も近い。

また、宮内扇状地一帯に条里制遺構が推定され、郡山矢ノ目館遺跡のように大溝を伴う条里制関連の道路状遺構も検出されているが、昭和40年代後半のは場整備で多くが失われたとみられる。推定の根拠は明治の地籍図による水田地割と「坪」「条」「丁」などの条里地名であるが、宮内地区南西部の富貴田周辺は、条里推定の明確な範囲にある。条里制遺構の年代は、水田基盤の場所であるがため、年代決定の根拠となる土器資料が希薄で、宮内条里制遺構でも皆無であり不明である。東北各地の事例から8世紀代の奈良時代とみられる。

宮内扇状地の多くの場所から奈良～平安時代の遺跡が発見されているが、多くは8～9世紀代である。

宮内扇状地付近は出羽国置賜郡宮城郷の推定地域であるが、墨書き土器・刻書き土器が多量に発見されている。中

に県内では少ない「王仁」のように渡来氏族を示すような文字もみられる。全体的には移民を思わせる文字資料が多い。そのような中、秋田県払田柵跡発見の漆紙文書に宮城郷住民が出挙制度の稻を借りたことを示す文書が発見され、9世紀後半の宮城郷住民の暮らしぶりなどが浮上している。

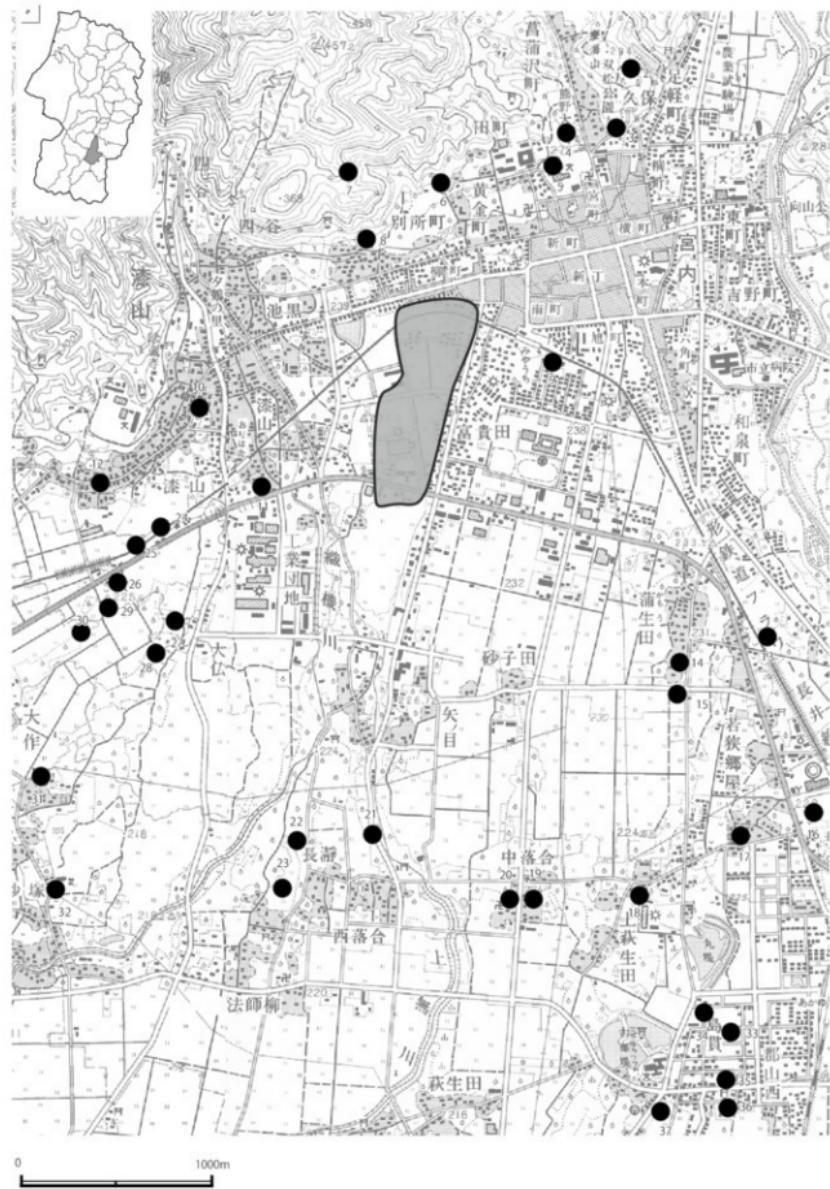
10世紀以降の平安時代の遺跡は少なくなる。しかし、池黒皇太神社はじめ多くの宗教施設等では資料が多い。現在の集落地域と重なって遺跡の発見が少ないのでし
れない。

引用・参考文献

- 菅井敬一郎 1990 「第1章南陽市のおいたち」『南陽市史上巻』南陽市史編さん委員会
 柏倉亮吉 1961 「東北地方の条里制」古代文化VII-4 古代学協会
 佐藤剛雄 1987 「南陽市史 考古資料篇」南陽市史編さん委員会
 佐藤剛雄・佐藤圭一 1990 「南陽市史(上巻)」南陽市史編さん委員会
 角田明行 2001 「南陽市域の条里制及び古墳等について」山形県地城史研究 26号
 川崎利夫編 2004 「出羽の古墳時代」
 佐藤剛雄 2008 「出羽国ができるところ」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
 佐藤剛雄 2010 「平安初頭の南出羽考古学」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
 佐藤剛雄 2011 「やまとがたの古墳時代」山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館

表 14 富貴田遺跡 周辺の遺跡

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	富貴田	集落跡	縄文・奈良	20	中落合	集落跡	奈良～平安
2	双松公園内遺跡	散布地	縄文	21	稚原	集落跡	平安・中世・近世
3	久保	散布地	縄文	22	庚塙	集落跡	縄・弥・古・奈～平
4	宮内熊野大社敷地内	散布地	縄文・平安	23	北前	散布地	縄文
5	宮内小学校敷地内	散布地	縄文・平安	24	大根在家	散布地	平安
6	別所A	散布地	平安	25	西口刈	散布地	縄文
7	別所山経塚	経塚	平安	26	高山原	散布地	縄文・平安
8	別所B	散布地	縄文	27	大仏	散布地	縄文
9	大清水	散布地	平安	28	天王	古墳・集落	古墳・中世
10	漆山	散布地	縄文	29	掛在家	集落跡	縄・弥・古・奈～平
11	東高塙	散布地	平安	30	上大作裏	集落跡	縄文・弥生・奈良
12	前田	散布地	縄文	31	中野	散布地	縄文・平安
13	観音堂	散布地	平安	32	下八ツ口	散布地	縄文
14	薄生田館南	跡跡	縄文・弥生・奈良～平安	33	沢田	集落跡	奈良～平安
15	当時作	散布地	縄文・平安	34	鳥置	集落跡	奈良～平安
16	唐越	散布地	縄文・奈良～平安	35	郡山中堀	散布地	奈良～平安
17	西田	散布地	平安	36	沢口遺跡	集落跡	奈良～平安
18	莊生田	集落跡	奈良～平安	37	西原東	集落	弥・吉・奈～平
19	中落合館	跡跡	中世				



第53図 遺跡位置図(国土地理院発行2万5千分の1地形図「赤湯」「羽前小松」使用)

III 遺跡の概要

富貴田遺跡は北区と南区があり（第53図）、トレンチによる試掘調査の結果を受けて、南区の一部についてのみ本調査を行った。なお、調査期間の関係により、多くの遺構について断面図および平面図の下端について記録を残すことが出来なかった。

1 検出遺構

溝3基、土坑1基、掘立柱建物跡9棟、ピット14基が確認された。

SB1 掘立柱建物跡（第55・57図） 調査区南西に位置する。SP43・SP31・EB10から構成される東西1間×南北1間の掘立柱建物跡とみられる。建物軸の方向はN-70°-Wを向く。

SB2 掘立柱建物跡（第55・57図） 調査区南西端に位置する。SP39・SP34・SP32・EB11・EB12から構成される東西1間×2間あるいは3間の側柱掘立柱建物跡とみられる。建物軸はN-70°-Wを向く。

SB3 掘立柱建物跡（第55・57図） 調査区南中央に位置する。SP41・SP17・SP38・SP36・SP29・SP24・EB5から構成される東西2間×南北2間の総柱の掘立柱建物跡とみられる。建物軸はN-68°-Eを向く。

SB4 掘立柱建物跡（第55・57図） 調査区南中央、SB3と重複している。SB7・EB8・SB9・SP33・EB5・EB1からなる東西2間×南北1間の総柱掘立柱建物跡とみられる。建物軸はN-70°-Eを向く。

SB5 掘立柱建物跡（第55・57図） 調査区南西端に位置している。SP37・SB6・SP30から構成される東西1間×南北1間の側柱掘立柱建物跡とみられるが、調査区南端にあることや、掘方が他の建物より大きいため、それ以上に広がる可能性がある。建物軸は真北を向く。

SB6 掘立柱建物跡（第55・57図） 調査区東側に位置する。SP33・SP11・SP28から構成される掘立柱建物跡あるいは壠の柱列の可能性が考えられる。建物軸はN-55°-Wを向く。

SB7 掘立柱建物跡（第55・57図） 調査区南東に位置する。EB4・SP19・SP24・SP15・SP10・EB2・SP14から構成される東西2間×南北2間の総柱掘立柱建物跡とみられる。建物軸はN-65°-Wを向く。

SB8 掘立柱建物跡（第55・57図） 調査区南東に位置する。SP8・SP6・SP4・SP12から構成されている壠の柱列とみられる。壠の軸方向はN-140°-Wである。

SB9 掘立柱建物跡（第55・57図） 調査区中央に位置しSB5と重複する。SK1・SP25・SP26から構成される壠の柱列とみられる。壠の軸方向はN-50°-Wである。

SD1溝跡（第56図） やや不整形の溝である。長径2.5m、深さ0.3m、底面が平坦である。覆土は人工的に埋めた可能性がある。遺構からは黒色土器壺が出土している。

SD2溝跡（第56図） 長さ1.2mのごく浅い溝である。SP47を切った状態で検出されている。溝の方向はN-40°-Wである。

SD3溝跡（第56図） 長さ1.6mのごく浅い溝である。溝の方向はS-40°-Wである。

SK2土坑（第56図） 不整形な土坑である。長径1.3m、深さ0.1mレンズ状の底面である。遺構からは赤色加工した大型碗が出土している。

2 出土遺物

遺構からの出土は 58-1 ~ 3 のみで、残りは試掘調査時に出土、あるいは遺構外出土の遺物である。そのため各遺構の年代決定は不可能であるが、出土する遺物の傾向で大まかな富貴田遺跡の年代を検討する。

まず、出土遺物の 7 割程度を占めるのが須恵器杯である。うち底部切離して分類した場合回転糸切底部のタイプが若干多い傾向にある。9世紀第1四半期から10世紀初頭にかけてのものが出土しているとみられる。また、58-7 や 59-1 のような底部切離し後ナデ調整を施されたものもいくつかみられる。

一方でトレンチや遺構外からではあるが、瀬戸美濃の端反皿や永楽通宝・すり鉢など中世の遺物も出土している。すり鉢には割れ口を砥石として転用した痕跡が残る（註5）。永楽通宝は県教委調査の沢田遺跡でも 2 点出土している（佐藤・名和 1985）。

3 小 結

遺構 まずは掘立柱建物跡については、おそらく 4 時期にわたって建物が存在していたとみられる。建物軸から考えた場合、1 期として SB1・2・4、2 期として SB3・7、3 期として SB5、4 期として SB6・8・9 の組合せが考えられる。しかし遺構の切り合いが明確ではなく、その新旧関係は不明である。

SD 2 と SD3 について、非常に浅いためあくまでも推

測となってしまうが、この 2 本の溝はほぼ直角の関係にあり、区画溝の可能性が考えられる。軸方向については掘立柱建物跡 4 期と同時期ではないかと思われる。

遺物 遺物について古墳時代、7世紀末、中世などもみられるが、そのほとんどは 9世紀第1四半期から10世紀初頭、特に9世紀後半以降の須恵器杯がその主体となるとみられる。これらの結果は山形県教育委員会が行った昭和 60 年度調査でもほぼ同様の結果を得ている（佐藤ほか 1987）。

また中世の遺物もトレンチや遺構外からではあるが一定数出土し、永楽通宝、すり鉢、瀬戸美濃の端反皿が出土している。陶器についてはいずれも破片のため時期等詳細は不明であるが、中世の後半にこの周辺で集落が形成されたと思われる。

遺跡の全体像について、遺物の出土地点が不明なものも多く遺跡の姿は把握しづらいものの、上無川沿いの沖積地であるこの地に 9 ~ 10 世紀の平安時代前半と中世を主体に集落が形成されたとみられる。しかし平安時代については土師器甕などはほとんどみられず、須恵器杯が遺物のほとんどを占めることから、一般的な集落とはやや様相を異にすると思われる。ここで郡山遺跡群との関連性を考えた場合、郡山遺跡群の主体時期からみて後半時期に富貴田遺跡の出土遺物は主体を置くが、確認された遺構は条里制に則った建物配置ではない。そのため郡衙推定地範囲内とは言い難いが、郡山に郡衙があったとみられる時期に構成された集落のひとつであるということは言えるであろう。

註

5) 山形県埋蔵文化財センター主任調査研究員 香原哲文氏のご教示による。

引用・参考文献

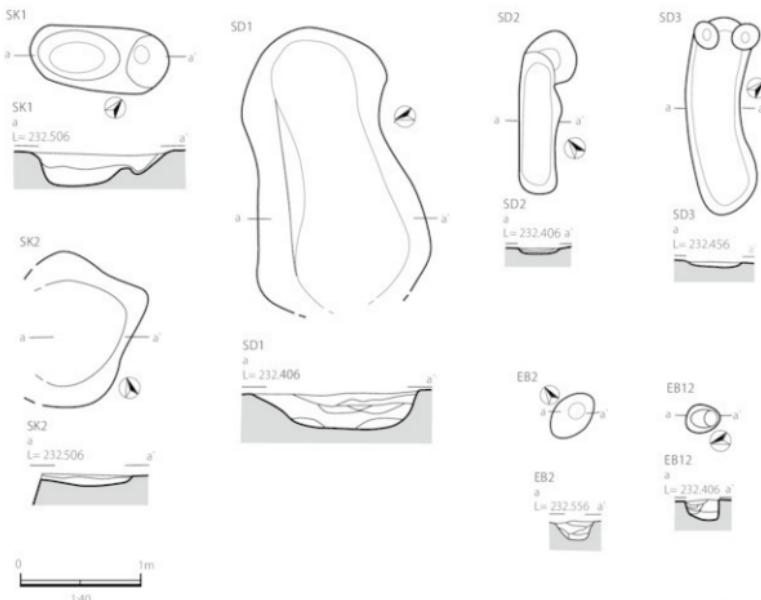
- 阿部明彦・水戸弘美 1999 「山形県の古代土器編年」『第 25 回古代城柵官衙遺跡検討会資料』
- 植松暁彦 2008 「出羽国創建期（7 ~ 8 世紀）の山形県の土師器の様相」『出羽国ができるところ――出羽建国期における南出羽の考古学』山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
- 押切智記・須賀井明子 2007 「夷境発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター報告書 161 集
- 佐藤耕雄・佐藤庄一ほか 1990 「南陽市史（上巻）」南陽市史編さん委員会
- 佐藤庄一・名和達朗 1985 「沢田遺跡発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書第 88 集
- 佐藤庄一ほか 1987 「分布調査報告書（14）」山形県埋蔵文化財調査報告書第 110 集
- 吉田江美子 2008 「山形県内の古墳時代前期土師器について」『研究紀要第 5 号』山形県埋蔵文化財センター



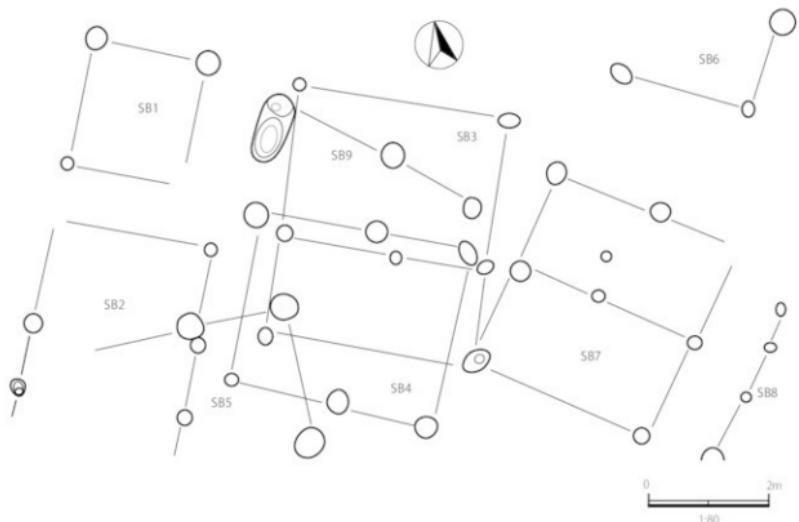
第54図 富貴田遺跡 試掘調査区



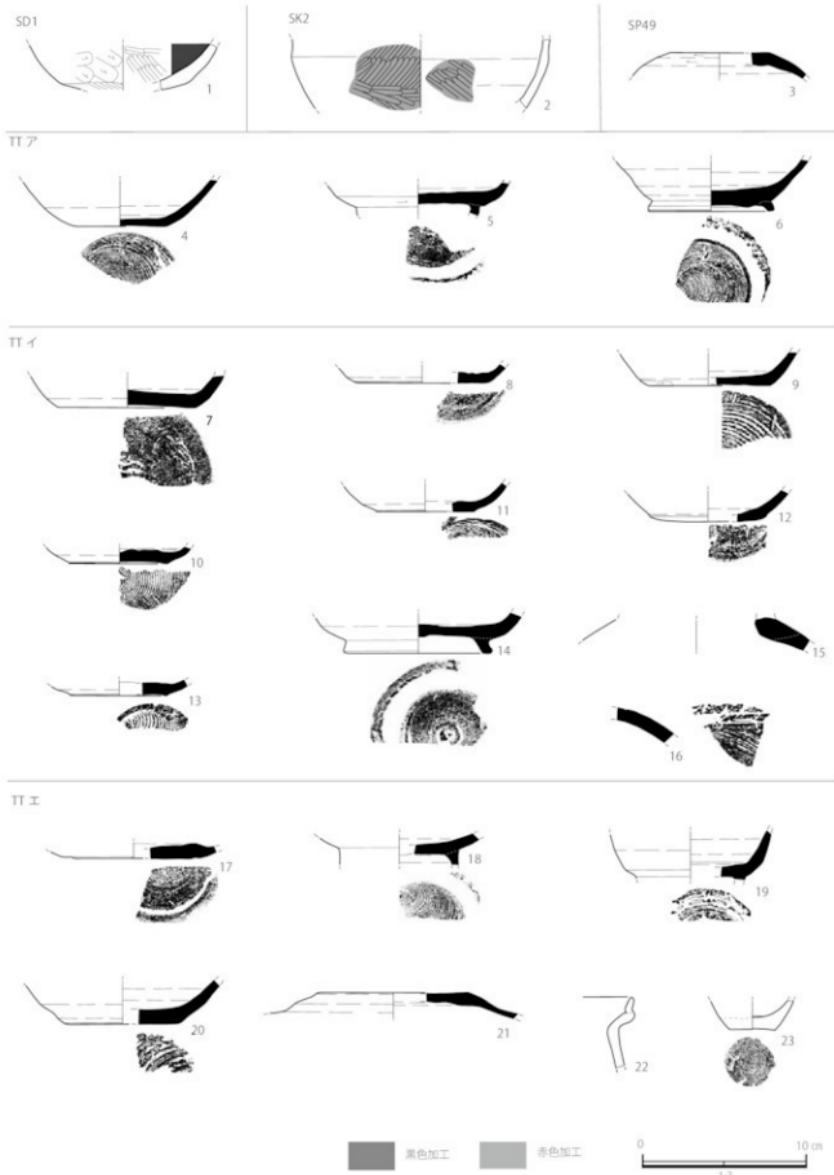
第 55 図 富貴田遺跡 南区遺構配図・基本層序



第56図 富貴田遺跡 柱穴・溝・性格不明遺構

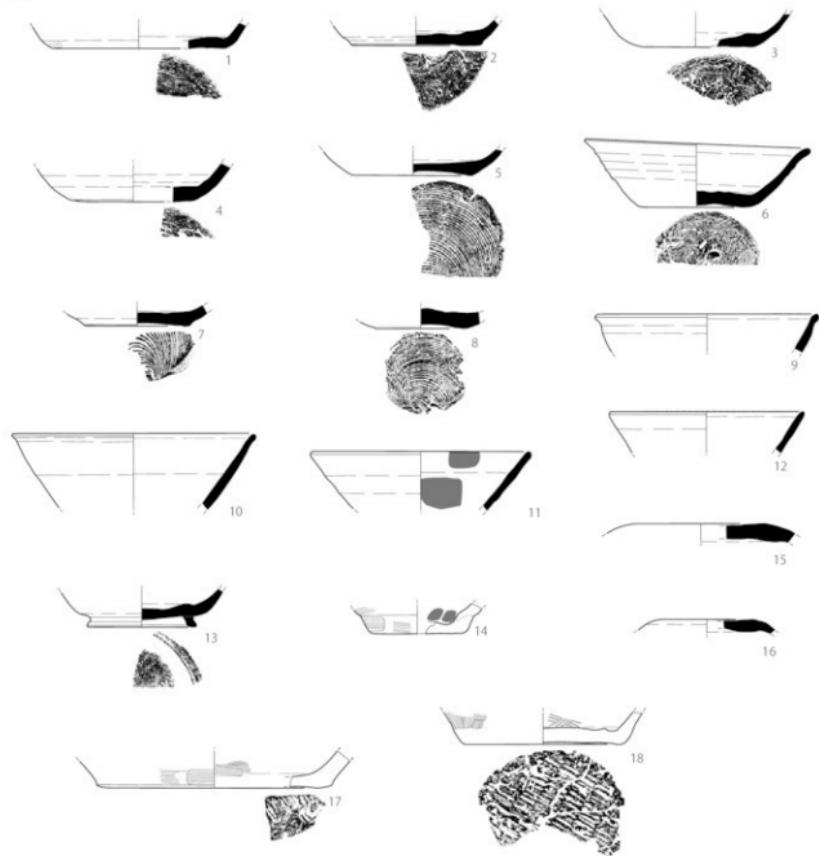


第57図 富貴田遺跡 掘立柱建物跡模式図

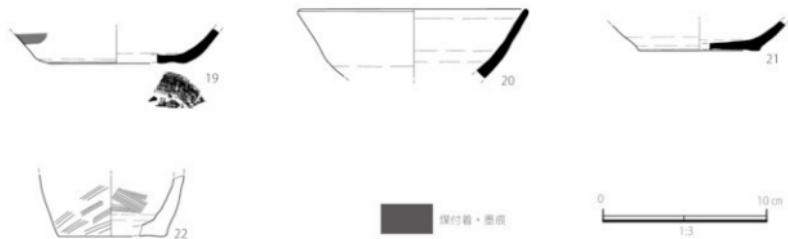


第58図 富貴田遺跡 出土遺物(1)

TT 才



TT 力

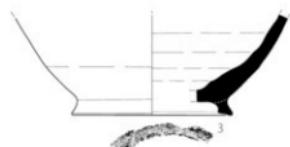


保付着・施痕

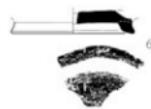
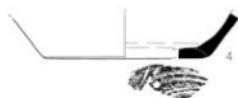
0 10 cm
1:3

第59図 富貴田遺跡 出土遺物 (2)

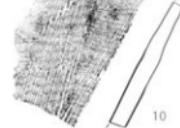
TT 千



TT ク



TT ケ



TT ス



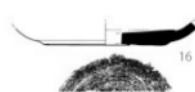
TTD



TTG

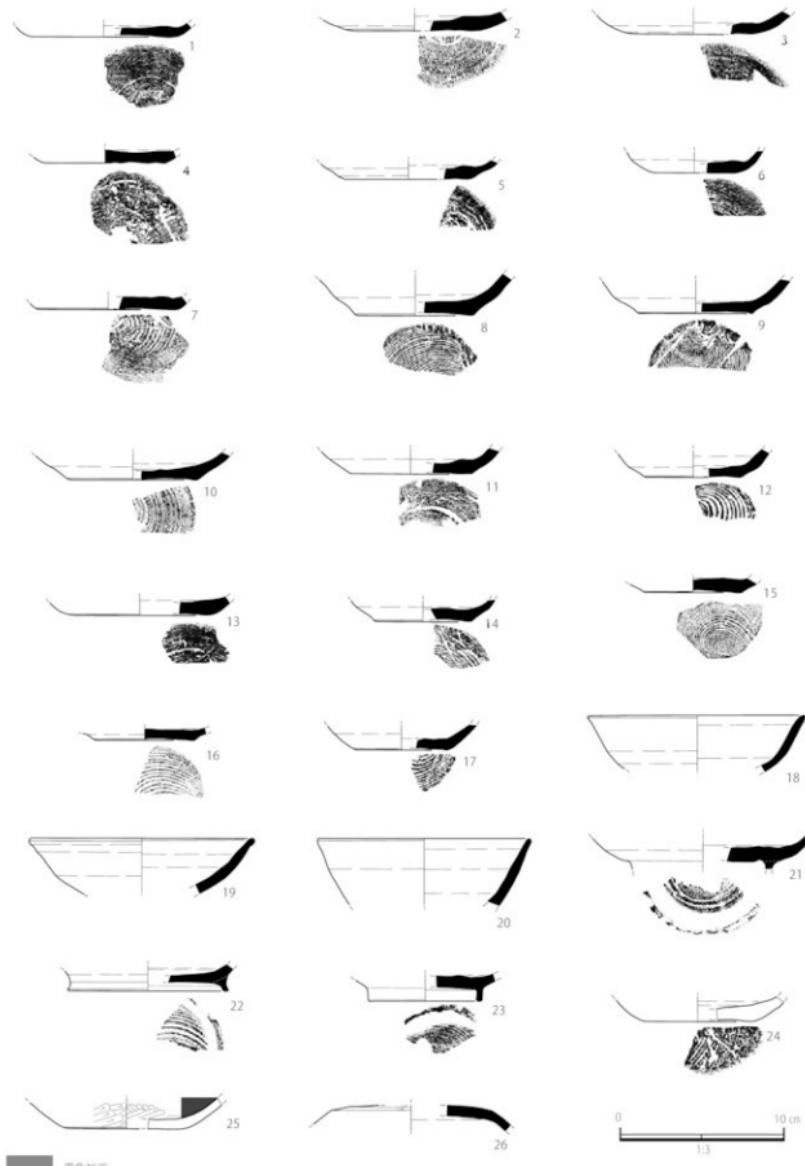


TTH



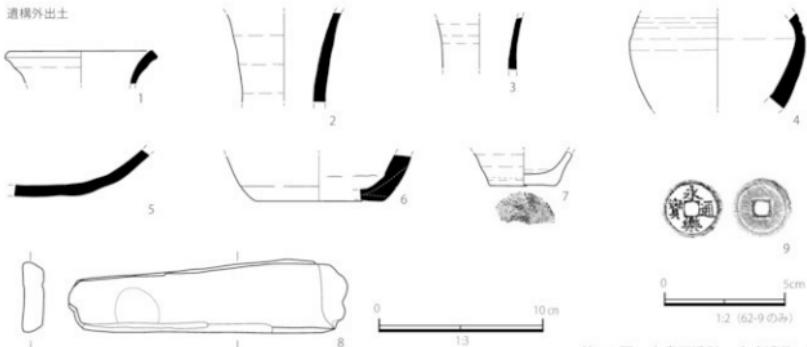
第60図 富貴田遺跡 出土遺物(3)

遺構外出土



第 61 図 富貴田遺跡 出土遺物 (4)

遺構外出土



第62図 富貴田遺跡 出土遺物(5)

表15 富貴田遺跡 遺物観察表(1)

回数	種別	器種	登録番号	計測値(mm)				調整技法	出土地点	備考
				口径	底径	高さ	厚さ			
58	1 黒色土器	碗	-	-	-	6 ミカキ	ケズリ	ミカキ	-	SDT
	2 土師器	壺	-	-	-	5 ミカキ	ミカキ	-	SK2	内外赤色加工 口縁部か
	3 漆器	壺	-	(60)	5 ロクロ	ケズリ	ロクロ	不明	SP49	焼成良好
	4 漆器	壺	-	(60)	4 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTア	
	5 漆器	高台壺	-	(76)	6 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTア	焼成良好
	6 漆器	高台壺	-	(78)	4 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTア	
	7 漆器	壺	-	(68)	7 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTイ	切離し後指ナメ調整 内面に摩耗跡有
	8 漆器	壺	-	(80)	4 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTイ	切離し後調整有
	9 漆器	壺	-	(78)	6 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTイ	内面に摩耗跡有
	10 漆器	壺	-	(60)	4 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTイ	
	11 漆器	壺	(164)	-	4 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTイ	
	12 土器	小型罐	-	(66)	6 ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	TTイ	
	13 漆器	壺	-	(60)	4 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTイ	
	14 漆器	高台壺	-	(92)	6 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTイ	
	15 漆器	壺	-	-	10 ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	TTイ	焼成良好
	16 漆器	壺	-	-	8 ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	TTイ	ヘラ書き有(紋様か)
	17 漆器	壺	37	(82)	9 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TT工	切離し後ナメ調整 打欠刻痕有
	18 漆器	高台壺	32	-	5 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切 高台	TT工	内面に摩耗跡有
	19 漆器	高台壺	-	(78)	4 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切 高台	TT工	
	20 漆器	壺	23	(74)	7 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TT工	
	21 漆器	壺	44	(90)	5 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TT工	
	22 土師器	壺	-	-	6 ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	TT工	
	23 陶器	少瓶?	37	30	5 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TT工	釉薬75YR6/2灰オリーブ
	1 漆器	壺	47	(108)	5 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTオ	切離し後調整有
	2 漆器	壺	22	(82)	5 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTオ	切離し後調整有
	3 漆器	壺	-	(70)	3 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTオ	切離し後指ナメ調整
	4 漆器	壺	22	(76)	6 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTオ	
	5 漆器	壺	-	(74)	5 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTオ	
	6 漆器	壺	30	(140)	64 39	4 ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTオ	表面や軽化
	7 漆器	壺	22	(66)	6 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTオ	
	8 漆器	壺	-	(58)	9 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTオ	打ち欠き割痕有
	9 漆器	壺	-	(136)	-	5 ロクロ	ロクロ	-	TTオ	内面に付着物(漆か)
	10 漆器	壺	-	(150)	-	5 ロクロ	ロクロ	-	TTオ	
	11 漆器	壺	-	(136)	-	4 ロクロ	ロクロ	-	TTオ	内面に墨痕あるいは煤痕有
	12 漆器	壺	-	(120)	-	4 ロクロ	ロクロ	-	TTオ	墨滅激しい
	13 漆器	高台壺	22	(66)	5 ロクロ	ロクロ	ロクロ	高台	TTオ	高台内にへら書き(×か)
	14 土器	かわらけ	22	(60)	6 ハケメ	指押	布痕	TTオ		内面スス付着
	15 漆器	壺	22	(80)	9 ロクロ	ロクロ	ロクロ	不明	TTオ	
	16 漆器	壺	20	(60)	4 ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転刃切	TTオ	

表 16 富貴田遺跡 遺物観察表 (2)

回復 種別	種 別	器 種	登録 計測値 (mm)				調査技法			出土 地点	備 考	
			番号	番号	口径	底径	高さ	厚さ	外 面	内 面	底 部	
17 土師器	甕	-	(146)	-	-	-	10	ハケメ	ハケメ	ハケメ	布痕	TT オ
18 土師器	甕	30	-	100	-	9	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	布痕	TT オ
19 漆器	环	-	-	(96)	-	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	TT カ 壓痕有
20 漆器	环	-	(138)	-	-	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	TT カ
21 漆器	环	-	-	(76)	-	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	TT カ
22 土師器	小型甕	-	-	(66)	-	6	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	ハケメ	TT カ
1 漆器	环	14	-	(76)	-	4	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	TT キ 切離し後調整有
2 漆器	甕	-	-	-	-	7	タキ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	TT キ 條成良好
3 漆器	瓶	36	-	(100)	-	7	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	高台	TT キ
4 漆器	甕・甌	7	-	(102)	-	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	TT キ
5 漆器	环	12	-	(90)	-	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	TT ク
6 漆器	高台环	-	-	(66)	-	7	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	TT ク
7 漆器	甕	-	-	-	-	7	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	TT ク
8 漆器	环	-	-	(100)	-	7	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	TT ケ 切離し後調整有
60 9 石製品	不明	-	-	-	-	31	-	-	-	-	-	TT ケ
10 陶器	すり鉢	-	-	-	-	12	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	TT サ 刃れ口を砥石として転用
11 漆器	环	-	-	(76)	-	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	TT ス 切離し後指ナテ調整 打欠割痕有
12 漆器	环	-	-	(86)	-	8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	TT ス 切離し後ナテ調整
13 漆器	环	-	-	(56)	-	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	TT ス
14 陶器	すり鉢	-	-	-	-	10	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	TTD
15 磁器	美濃 端反皿?	-	-	(66)	-	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ケズリ	見込文印花 (文様不明)
16 漆器	环	-	-	(76)	-	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	TTG 内面付着物 (漆か)、底部痕滅
1 陶器	环	52	-	(90)	-	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	XO 切離し後指ナテ調整 損傷時の痕滅
2 漆器	环	-	-	(80)	-	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	XO 切離し後調整有 正面部使用痕跡有
3 漆器	环	-	-	(76)	-	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	XO
4 漆器	环	-	-	(76)	-	7	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	XO 打ち欠き割痕有 損成甘い
5 漆器	环	-	-	(76)	-	4	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	XO
6 漆器	环	-	-	(50)	-	4	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	XO 切離し後指ナテ調整
7 漆器	环	35	-	(60)	-	8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切 ケズリ	XO 切離し後底部高リケズリ
8 漆器	环	28	-	(70)	-	7	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	XO 内面部使用痕跡有
9 漆器	环	-	-	(70)	-	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	XO 底部にへラ書か
10 漆器	环	-	-	(80)	-	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	XO
11 漆器	环	-	-	(76)	-	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	XO 切離し後指ナテ調整
12 漆器	环	2	-	(60)	-	7	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	XO
13 漆器	环	-	-	(60)	-	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	XO 切離し後ナテ調整
61 14 漆器	环	35	-	(60)	-	4	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切	XO
15 漆器	环	-	-	(60)	-	8	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	XO
16 漆器	环	35	-	(62)	-	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	XO
17 漆器	环	-	-	(58)	-	4	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	XO
18 漆器	环	-	-	(135)	-	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	XO
19 漆器	环	-	-	(140)	-	4	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	XO
20 漆器	环	-	-	(142)	-	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	XO 磨滅剥着
21 陶器	高台环	-	-	(86)	-	4	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	高台	XO 底部中央に穿孔痕か
22 陶器	高台环	-	-	(100)	-	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	XO
23 陶器	高台环	-	-	(70)	-	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切 高台	XO 打ち欠き割痕有
24 土師器	环	-	-	(70)	-	8	不明	不明	木葉痕	木葉痕	XO 磨滅剥着	
25 黒色土器	环	25	-	(70)	-	5	ケズリ	ミガキ	ミガキ	ミガキ	回転糸切	XO 切離し後調整有
26 陶器	甕	-	-	(100)	-	6	ロクロ	ケズリ	ロクロ	ロクロ	-	XO 基盤に焼成時くび痕
1 漆器	小型甕?	-	-	(90)	-	5	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	XO
2 漆器	長頸瓶	-	-	-	-	6	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	XO 條成良好
3 漆器	長頸瓶	-	-	-	-	4	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	XO 條成良好
4 漆器	小瓶	-	-	-	-	7	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	XO 條成良好
5 漆器	模瓶?	-	-	-	-	7	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	-	XO 内面に灰釉 口縁部下部が
6 漆器	甕	-	-	(80)	-	11	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ケズリ	XO
7 陶器	不明	-	-	42	-	4	ロクロ	ロクロ	ロクロ	ロクロ	回転糸切	XO 磨業10%灰白
8 木製品	不明	-	173	46	12	-	-	-	-	-	-	XO 針葉樹材か
9 古鏡	永樂通宝	-	24	24	1	-	-	-	-	-	-	XO

写真図版





調査前状況

調査前状況



C トレンチ（北より）



A トレンチ（西より）



B トレンチ（北より）



調査作業風景



調査作業風景

沢田遺跡（平成元年度調査）



遺構確認状況（南より）



遺構確認状況（南西より）



遺構確認状況（南東より）



SD8、ST1 確認状況（南より）

沢田遺跡（平成元年度調査）



ST1 積穴住居跡炭化材検出状況（東より）



ST1 調査状況（東より）

沢田遺跡（平成元年度調査）



ST1 竪穴住居跡完堀状況（東より）



ST1 完堀状況（南より）

沢田遺跡（平成元年度調査）



ST1 炭化材検出状況（南より）



ST1 炭化材検出状況（西より）



ST1 EL1周辺遺物出土状況（南より）



ST1 RP6 出土状況（西より）
沢田遺跡（平成元年度調査）



ST1 SK18 遺物出土状況（北東より）



ST1 EL1 土層断面（東より）



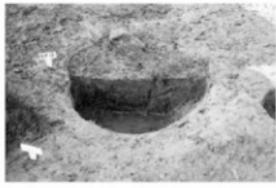
ST1 EL1 土層断面（北より）



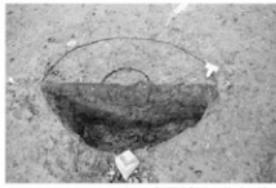
SK18 土層断面（南より）



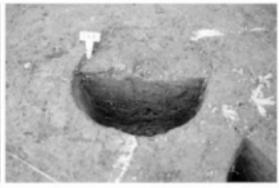
SK1 遺物出土状況（東より）



ST1 EP13 土層断面（西より）

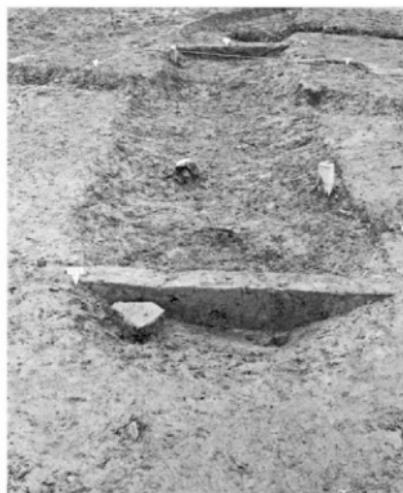


ST1 EP3 土層断面（北より）



ST1 EP4 土層断面（北より）

沢田遺跡（平成元年度調査）



SD5a-a' 土層断面(南より)



SD7b-b' 土層断面(東より)



SD2a-a' 土層断面(東より)



SD3a-a' 土層断面(南より)



SD3b-b' 土層断面(南より)



SDS b-b' 土層断面(東より)



SD6a-a' 土層断面(東より)



SD6b-b' 土層断面(東より)



SD7a-a' 土層断面(東より)



SD8 土層断面(東より)

沢田遺跡(平成元年度調査)



SD3 完堀 (東より)



SD5 完堀 (南より)



SD7 完堀 (東より)



SD8 完堀 (南より)

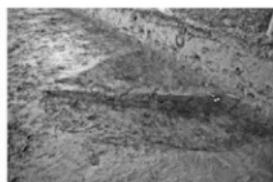
沢田遺跡 (平成元年度調査)



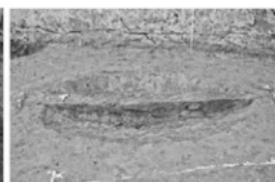
SD2 完堀 (東より)



SD6 完堀 (東より)



SK12 土層断面 (南より)



SK13 土層断面 (南より)



SDSa-a' 土層断面 (南より)



SK1・SX4 完堀 (南より)



SK12 完堀 (南より)

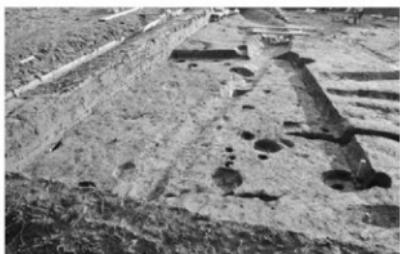
沢田遺跡 (平成元年度調査)



完堀全景(西より)



完堀全景(南西より)



完堀全景(北より)

沢田遺跡(平成元年度調査)



調査前状況(北より)



調査前状況(東より)



遺構検出状況(東より)



遺構検出状況(南西より)



遺構検出状況(南東より)



SD1c-c 土層断面(北より)



SD1a-a' 土層断面(南より)



SD2d-d' 土層断面(北より)



SD2e-e' 土層断面(北より)

沢田遺跡(平成4年度調査)



完堀全景(西より)



完堀全景(東より)



SD1 完堀状況(南より)



SD2 完堀状況(南より)

沢田遺跡(平成4年度調査)



調査前状況



調査前状況



遺構調査状況（南西より）



遺構調査状況（南より）



遺構調査状況（北西より）



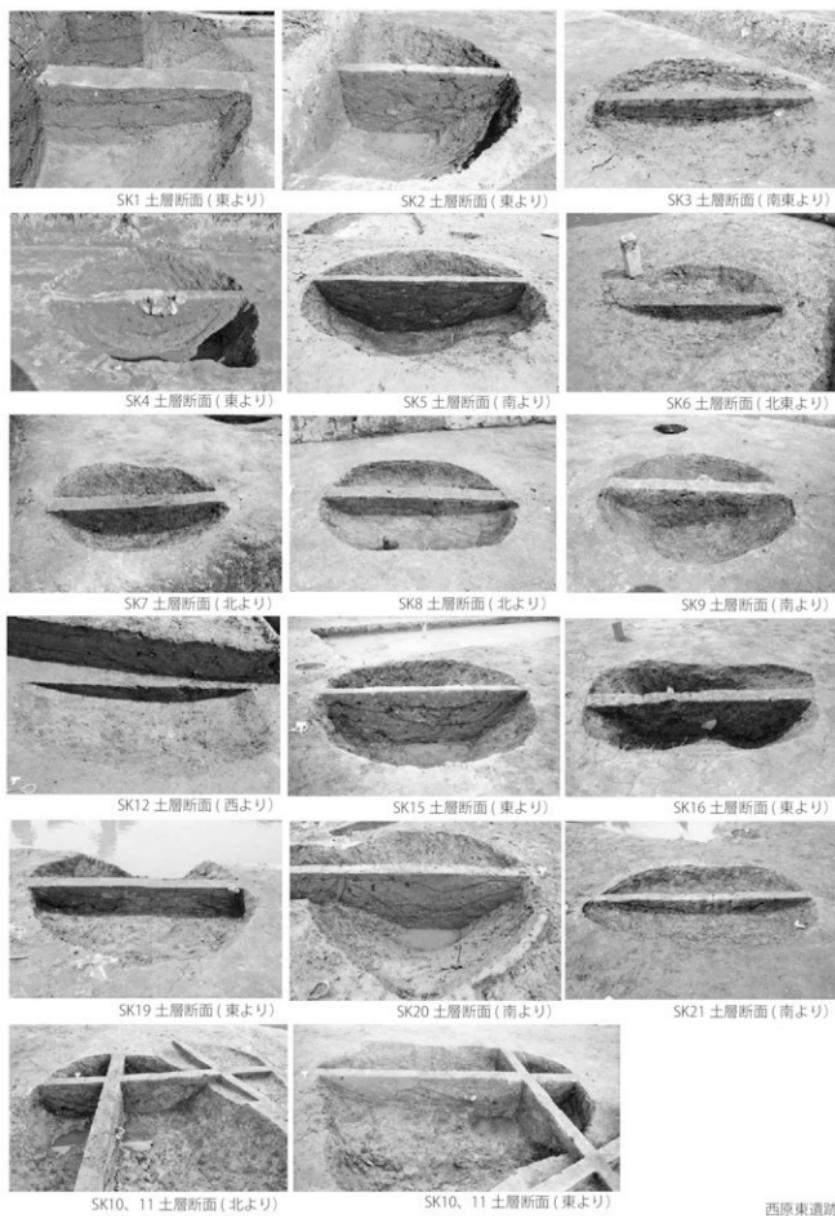
遺構調査状況（南西より）

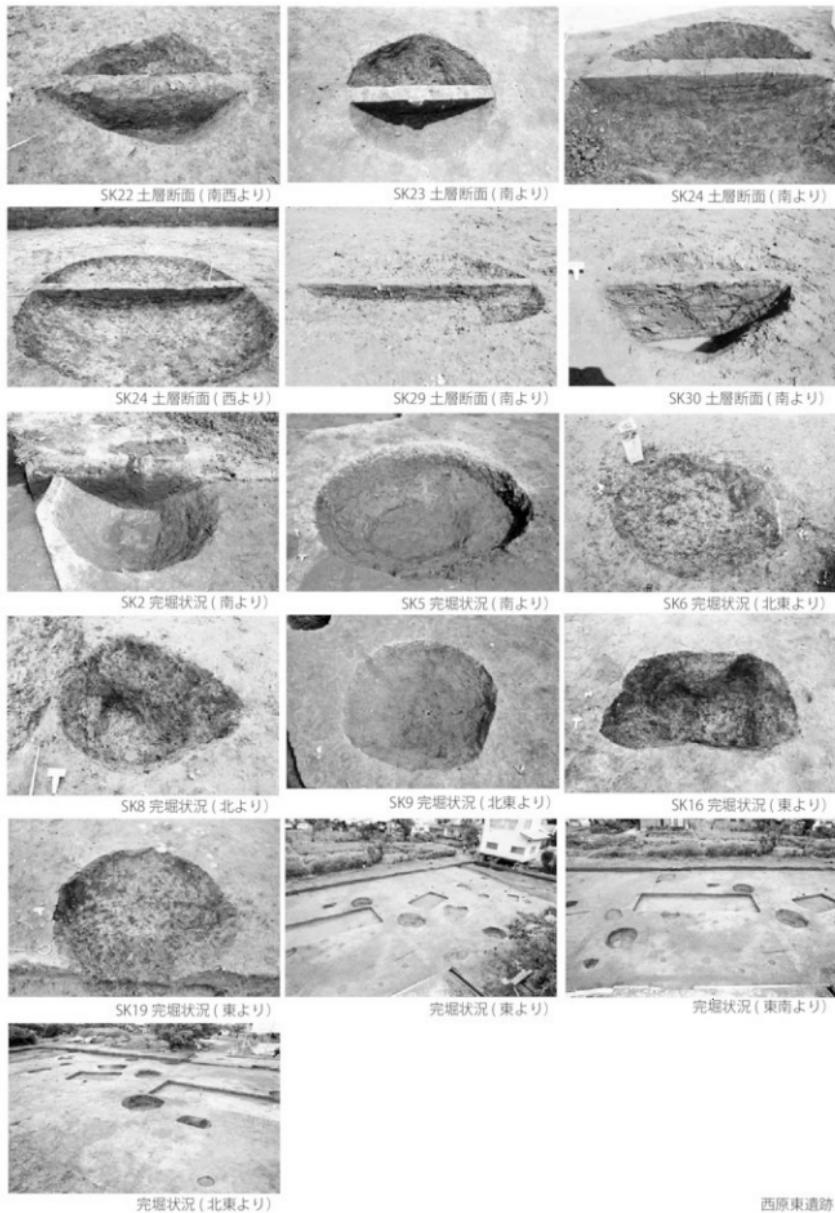


土器集中域 出土状況



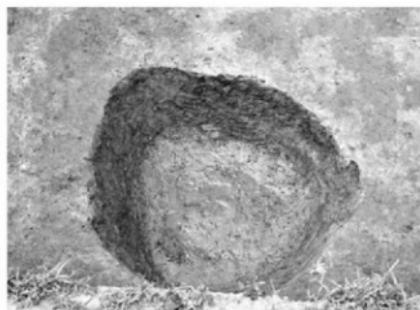
西原東遺跡



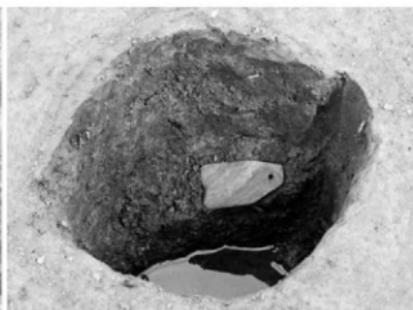




完堀状況(東南より)



SK4 完堀状況(東より)



P6 石斧出土状況(南より)

西原東遺跡



調査前状況

調査前状況



上層検出状況（南西より）



下層検出状況（南西より）



下層検出状況（南西より）

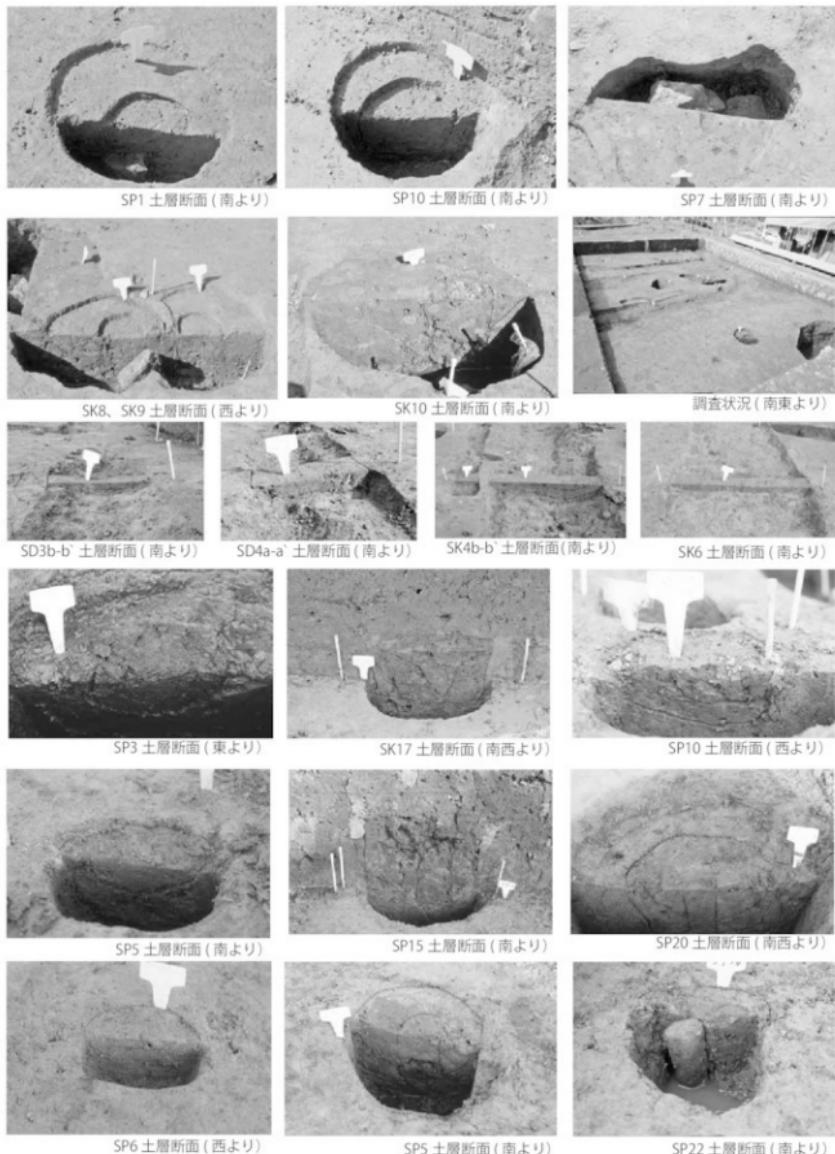


下層検出状況（南東より）



SH1 調査状況（西より）

SH1 土層断面（東より）
沢口遺跡



沢口遺跡



SK7 土層断面 (東より)



SK13 調査状況 (南西より)



SK13 調査状況 (西より)



SK13 調査状況 (南より)



完堀状況 (東南より)



完堀状況 (南西より)



完堀状況 (南より)



完堀状況 (南より)

沢口遺跡



A区 調査前状況



A区 調査前状況



A区 Aトレンチ



A区 Bトレンチ



A区 Cトレンチ



A区 Bトレンチ内 SKI



B区 調査前状況

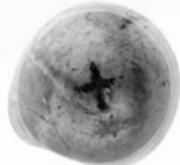


B区 調査前状況



B区 Cトレンチ

島貴遺跡



底部漆畫「×」

ST1 須恵器環 (14-1)



ST1 黒色土器有段環 (14-3)



ST1 黒色土器有段環 (14-8)
沢田遺跡



ST1 円面鏡 (15-6)



16-14



14-6

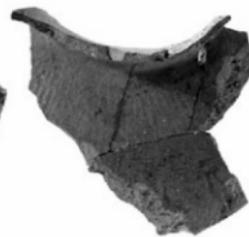


14-4



19-19

黒色土器・土師器 壕



須恵器 壕

ST1 出土遺物
沢田遺跡

14-11



21-3



15-2



15-1

14-17
土師器 蓋



14-9
須恵器 蓋



14-10
土師器 蓋

ST1 出土遺物
沢田遺跡



—

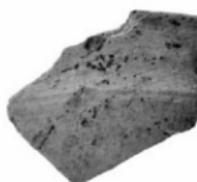


15-7
須恵器 紡錘車



14-15

須恵器 瓶



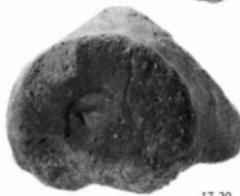
19-9
須恵器 稷塊



15-3



15-4



17-20



17-19



15-5
土師器 蓋

沢田遺跡



16-21 須恵器 蓋 (SD8)



16-13 土師器 器台



16-10



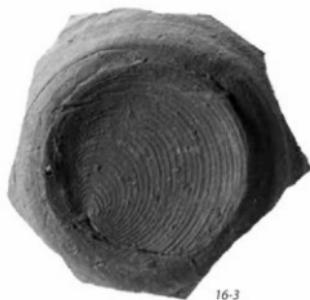
20-16
須恵器 瓶類
沢田遺跡



15-12



15-14
土師器 蓋
沢田遺跡



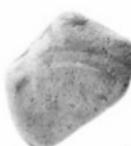
16-7



16-5



16-6



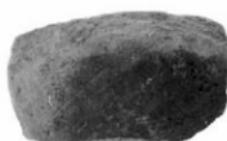
16-8



SD2 出土遺物



19-18



14-2



16-12



16-15

黑色土器 坯
沢田遺跡



17-5



17-6

15-13
弥生土器
沢田遺跡



土師器 高坏 (17-7)

17-10



17-9



17-11

土師器 高坏脚部
沢田遺跡



17-13



17-14



17-12

土師器 高環脚部



17-15



17-17



17-18



17-16

土師器 瓢類
沢田遺跡



須恵器基 (18・3)



須恵器高台基 (19・3)



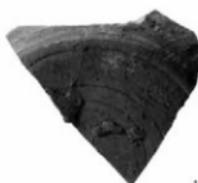
須恵器高台基 (19・4)
沢田遺跡



18-10



18-11



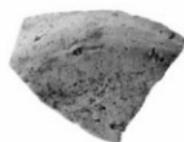
18-9



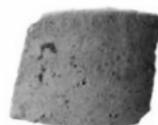
19-17



18-2



18-4



18-1



土師器坏 (19-12)



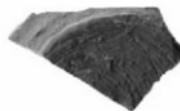
土師器坏 (18-17)
沢田遺跡



18-13



18-20



18-23



16-1



16-2



18-24

須惠器 壺



16-16



20-14



19-10

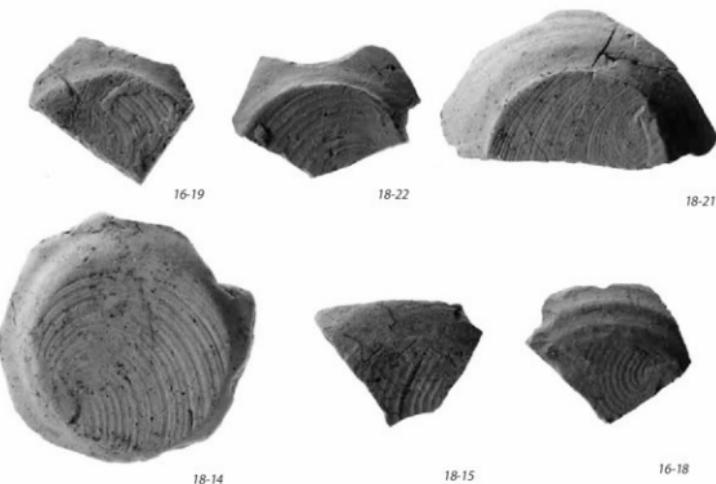


19-11

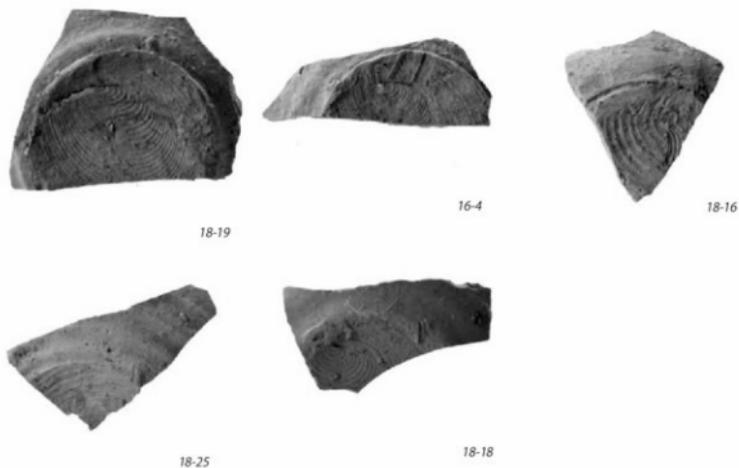


20-7

沢田遺跡



須恵器 壊

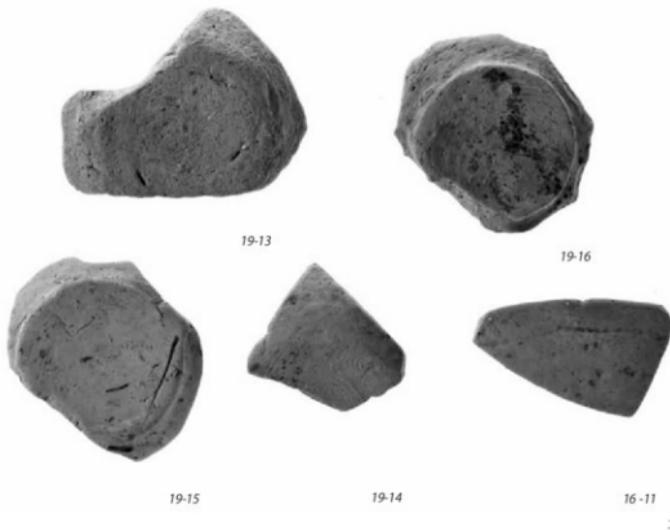


須恵器 壊

沢田遺跡



須恵器 高台坏類



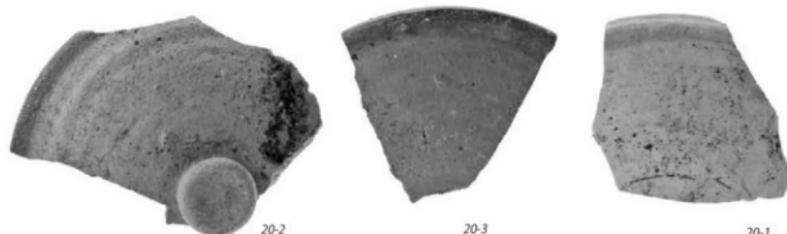
土師器 坏
沢田遺跡



16-22

20-4

20-5



20-2

20-3

20-1

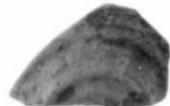
須恵器 蓋



須恵器 蓋 (20-6)



19-21



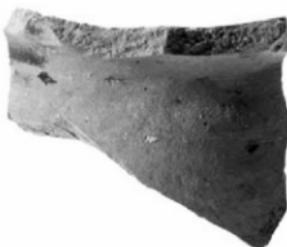
19-22



19-20

黑色土器 坯

沢田遺跡



須恵器　甕類 (20-13)



須恵器　こね鉢 (20-17)



須恵器　甕 (20-12)



須恵器　甕 (20-9)



土師器　小型甕 (21-2)

沢田遺跡



21-1
土師器 襲(参考資料)



羽口(21-4)



砥石(21-5)

沢田遺跡



EL1 土師器 瓢 (34-1)



EL1 土師器 支脚
(34-2)

西原東遺跡



土師器 高環 (34-4)

西原東遺跡



須恵器 蓋 (35-12)

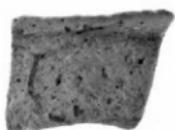


土師器 丸底壺（体部） (34-7)

22-24G 土器集中域
西原東遺跡



35-7



35-6



33-11



35-5

土師器 丸底塊



34-8



34-7 (口縁部)

土師器 丸底壺底部



34-9

土師器 壺類

22-24G 土器集中域
西原東遺跡



35-8



35-10



36-24



33-5



37-4



35-11



37-2



37-3



35-4

土師器 壺・蓋類
西原東遺跡



35-1



34-10



35-3

土師器 壺類



32-4

繩文土器



35-20

土師器 壺

西原東遺跡



SD2 須恵器 坯 (33-18)



遺構外出土 須恵器 坯 (35-21)

西原東遺跡



遺構外出土 須恵器 大型壺 (35-2)



遺構外出土 黒色土器 壺 (34-3)

西原東遺跡



36-5

36-23

32-8

36-7

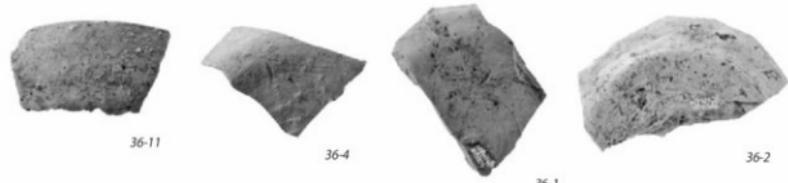


35-24

36-21

32-7

32-16

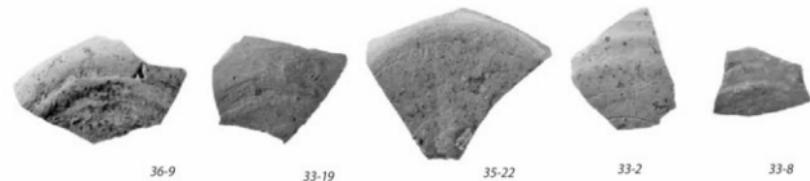


36-11

36-4

36-1

36-2



36-9

33-19

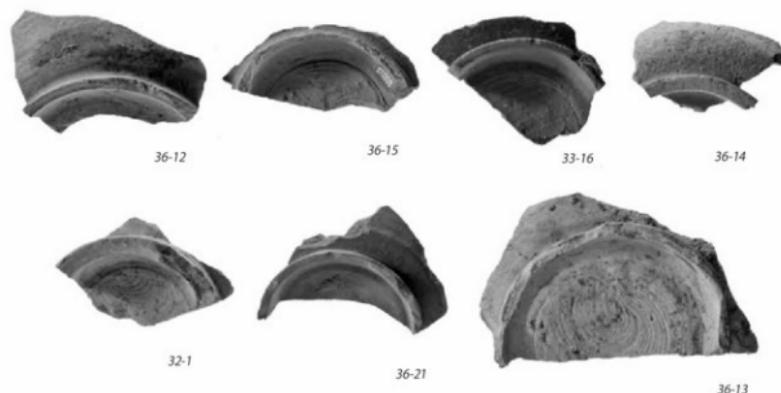
35-22

33-2

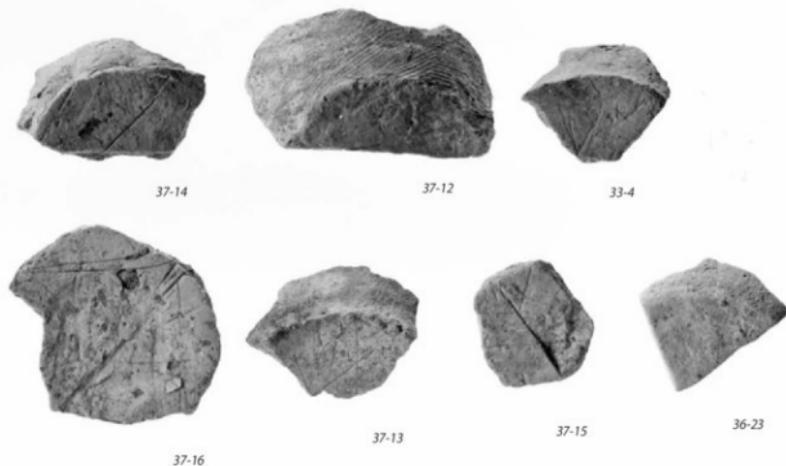
33-8

須恵器 环

西原東遺跡



須恵器 高台环



土師器 褶底部
西原東遺跡



32-17

33-9



32-14

32-13

37-1

須恵器 蓋



36-22

36-20

須恵器 瓶・稜塊



32-21

37-6

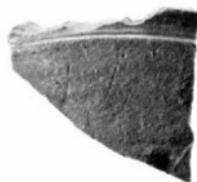


33-1

35-14

35-15

須恵器 裹頸
西原東遺跡



37-9



35-13



33-3

須恵器 瓶類

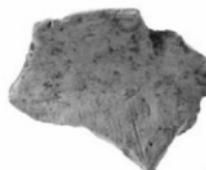


32-12

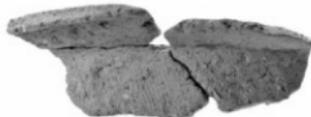


36-25

土師器 坯



33-20



37-11



32-15

土師器 褐
西原東遺跡



32-5



32-2

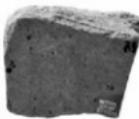


33-10

青磁 碗



石斧 (32-17)



砥石 (32-6)

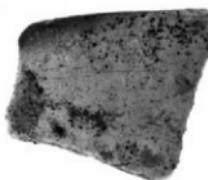


寛永通宝 (33-6)

西原東遺跡



円盤状石製品 (41-6)
沢口遺跡



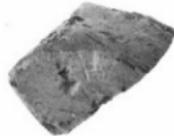
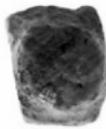
43-12

43-11

B区 TTB 黒色土器 坯



表採 黒色土器 坯
(43-19)



43-17
土師器 高坏

43-18

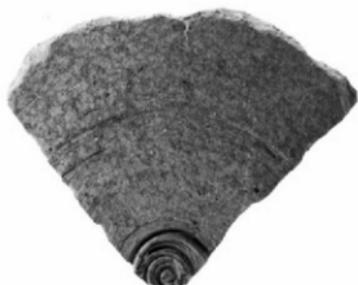
43-20
土師器 襄
島貴遺跡



43-6
A区TTA 須恵器 高台坏



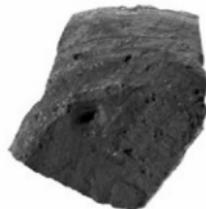
43-15
B区TTC 須恵器 瓶類



43-8
A区TTA 須恵器 蓋



43-9
須恵器 瓶類



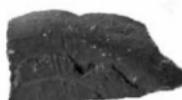
43-1



43-3



43-4



43-14

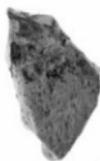


43-7
須恵器 坏

島貴遺跡



49-21



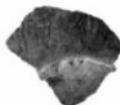
51-10



48-16



49-16



49-17

土師器 壺



黑色土器 壺 (51-2)



49-1



51-3

黑色土器 有段坏
中央第一土地区画整理事業地内



48-4



45-1



51-1



49-7

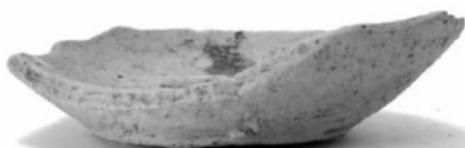


49-6
土師器 高环

中央第一土地区画整理事業地内



須恵器 坏 (49-14)



須恵器 坏 (51-5)



須恵器 高台坏 (48-3)
中央第一土地区画整理事業地内



土師器 瓢（参考資料）
(50-16)



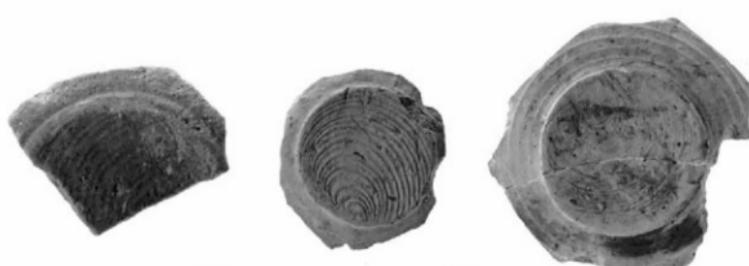
須恵器 坯 (49-24)
中央第一土地区画整理事業地内



50-3



50-12



48-12

49-13

50-13



49-8

49-19

45-2

須恵器 坯

中央第一土地区画整理事業地内調査



49-12



49-24



49-14

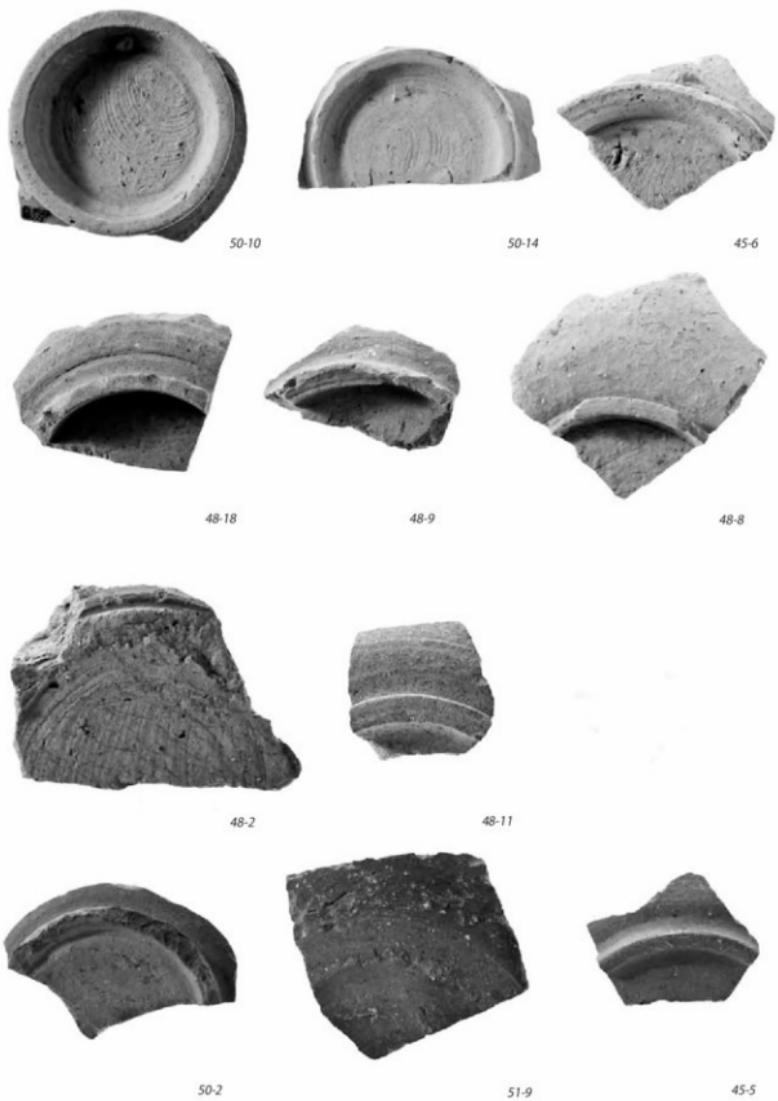


48-3

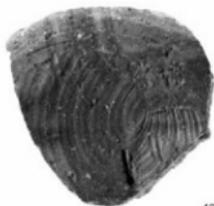


51-5
須恵器 坯

中央第一土地区画整理事業地内調査



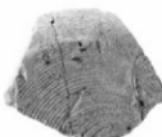
須恵器 高台坏
中央第一土地区画整理事業地内調査



49-11



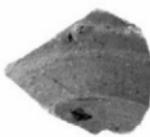
50-9



49-2



45-4



45-3

須恵器 壺



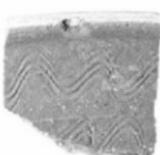
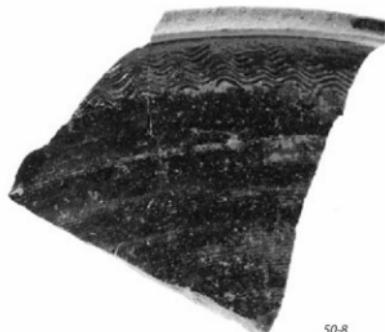
51-11



50-7

須恵器 簋

中央第一土地区画整理事業地内調査



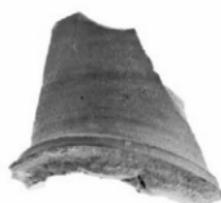
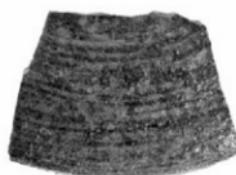
48-14

50-8



49-4

須恵器 蓋

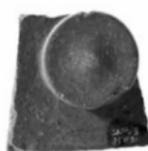


須恵器 長頸瓶 (48-6)

須恵器 瓶 (50-6)



49-18



50-1
須恵器 蓋

中央第一土地区画整理事業地内調査



調査前状況



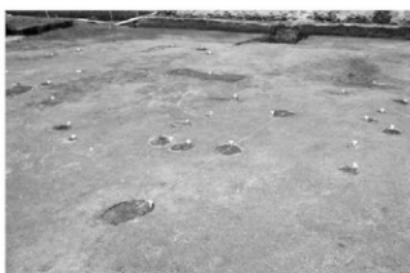
調査前状況



調査前状況



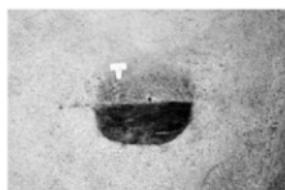
遺構検出状況（南西より）



遺構検出状況（南より）



SD1 調査状況



EB2 調査状況

富貴田遺跡 調査状況



遺構検出状況(南より)



遺構検出状況(南西より)
富貴田遺跡 調査状況



遺構検出状況（南より）



SD1 完堀状況



SX2 SP47 完堀状況
富貴田遺跡 調査状況



遺構検出状況（南西より）



EB2 完堀状況



EB12 完堀状況

富貴田遺跡 調査状況



59-6



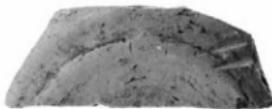
59-1



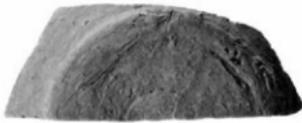
59-2



61-2



60-16



60-11

須恵器 坯

富貴田遺跡 出土遺物



61-9

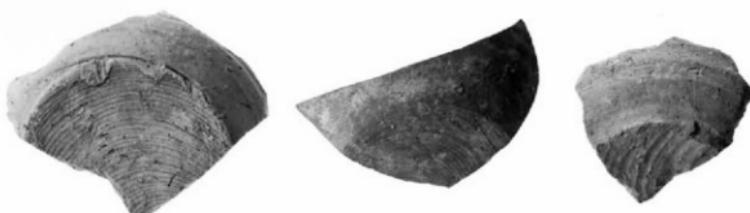
61-7

61-10



60-8

58-9



59-5

58-4

58-20



61-15

61-8

59-8

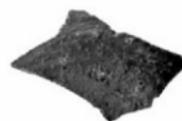
須恵器 坯
富貴田遺跡 出土遺物



58-7



61-11



61-6



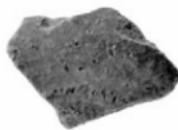
61-1



60-12



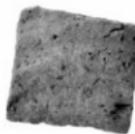
58-17



60-6



61-3



58-12



61-13

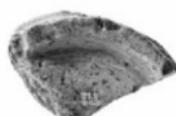
須恵器 坯
富貴田遺跡 出土遺物



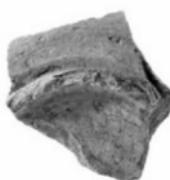
58-14



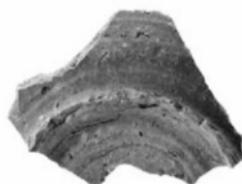
59-13



60-6



58-5



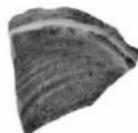
61-21



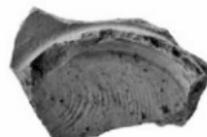
58-19



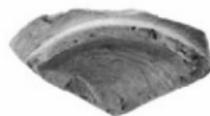
58-6



61-22

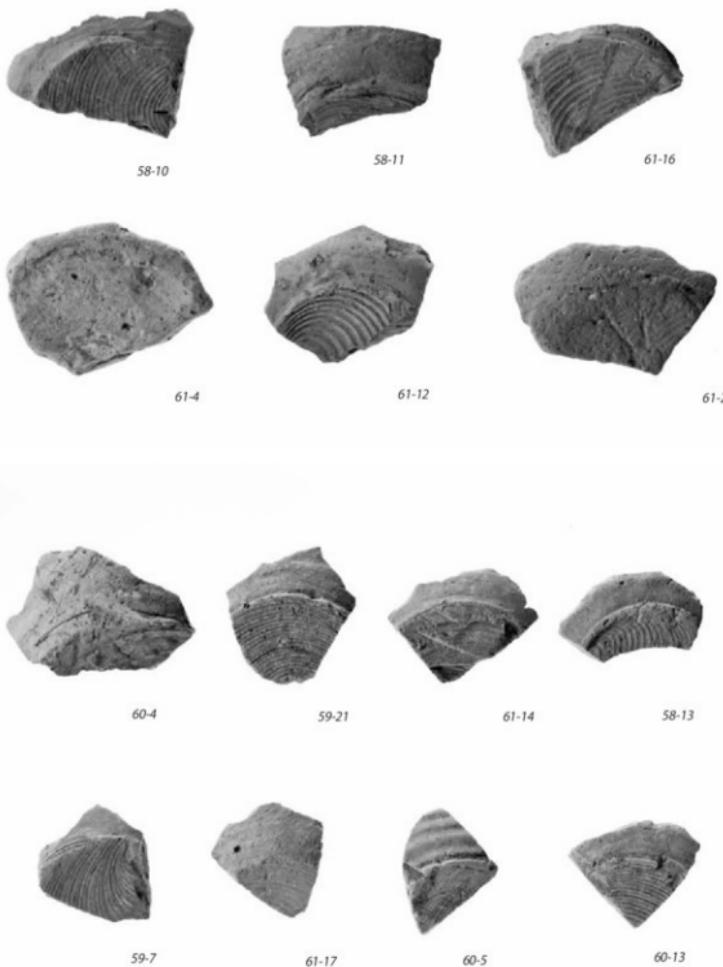


58-18

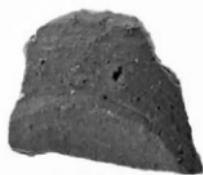


61-23

須恵器 坯
富貴田遺跡 出土遺物



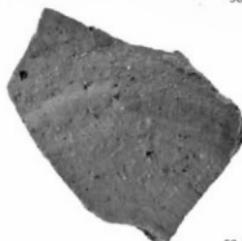
須恵器 壕
富貴田遺跡 出土遺物



58-3



61-26



58-21

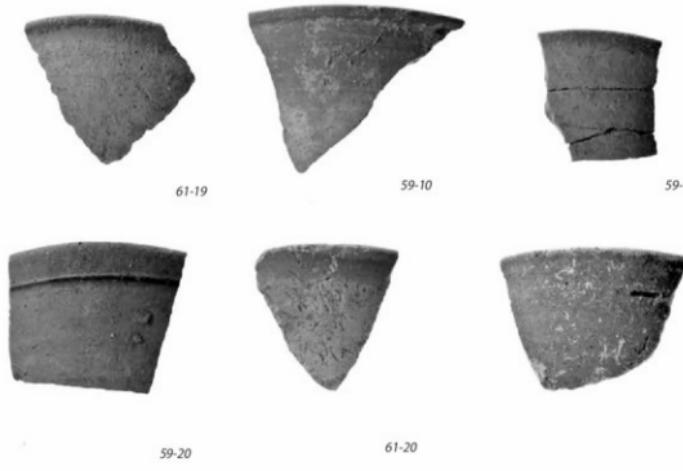
須惠器 蓋



60-3

須惠器 壺

富貴田遺跡 出土遺物



須惠器 坯



須惠器 長頸瓶

富貴田遺跡 出土遺物



60-10



60-14



62-7



60-15(高台)

中世陶器



60-15 (見込み)

永楽通宝 (62-9)

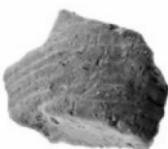


木製品 (62-8)

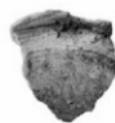
富貴田遺跡 出土遺物



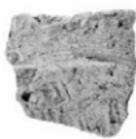
59-18



59-22



59-14



59-17



58-22

土師器



土師器 (58-2)



石製品 (60-9)

富貴田遺跡 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こおりやまいせきぐん・ふきたせきはつくちょうさほうくくしょ							
書名	郡山遺跡群・富貴田遺跡発掘調査報告書							
副書名								
卷次								
シリーズ名	南陽市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第6集							
編著者名	吉田江美子 山田 晴 熊坂正規 佐藤鎮雄							
編集機関	山形県南陽市教育委員会							
所在地	〒999-2292 山形県南陽市三間通 436 番地1 TEL 0238-40-3211							
発行年月日	2013年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 。	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
こおりやまいせきぐん 郡山遺跡群 さわだいせき 沢田遺跡 にしじらひいせき 西原東遺跡 さわひらひひせき 沢口遺跡 しまへい 島貫遺跡	やまとかほん 山形県 なんじょうし 南陽市 しままき 島貫 こうねい 若狭郷屋	6213	154 昭和60年度 新規登録 166 157	38° 04' 58" 38° 04' 32" 38° 04' 29" 38° 04' 77"	140° 14' 28" 140° 14' 16" 140° 14' 35" 140° 14' 40"	19831011 / 19930605 50 m ²	306 m ² 720 m ² 48 m ²	中央第一 土地区画 整理事業
ふきたいせき 富貴田遺跡	やまとかほん 山形県 なんじょうし 南陽市 いそご 池黒	6213	昭和60年度 新規登録	38° 07' 06"	140° 12' 90"	19891023 / 19891016	260 m ²	西工業団 地拡張事業
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
こおりやまいせきぐん 郡山遺跡群	集落跡	古墳時代 飛鳥時代 奈良～平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑・溝・柱穴	弥生土器 土師器 須恵器 陶器	ふきたいせき 優曇彌都成立時の7世紀末～8世紀初頭の竪穴住居跡が確認された。また郡山都衙の存在の手掛かりとなりえる8世紀代の掘立柱建物跡群が確認された。			
ふきたいせき 富貴田遺跡	集落跡	奈良～平安時代 中世	掘立柱建物跡 土坑・溝・柱穴	土師器 須恵器 陶器	9世紀代を主体とした遺跡。数時期にわたる掘立柱建物群が確認された。また中世においても集落が形成されていたことが窺える。			

南陽市埋蔵文化財調査報告書第6集

郡山遺跡群・富貴田遺跡発掘調査報告書

2013年3月31日発行

発行 山形県南陽市教育委員会
〒 999-2292 山形県南陽市三間通 436 番地 1

電話 0238-40-3211(代表)

印刷 有限会社●●●●
〒 999-2251 山形県南陽市●●●
電話 0238-00-0000